

博士論文

学問としてのダンスの歴史的変容：
ウィスコンシン大学マディソン校の
ダンスの100年

木場裕紀

目次

第1章	はじめに	4
第2章	先行研究の検討と本研究の分析の視点	10
第1節	アメリカの高等教育におけるダンスの歴史に関する先行研究の検討.....	10
第2節	デパートメントやプログラムに関する先行研究の検討	19
第3節	本研究で扱う事例.....	24
第4節	リサーチ・クエッションと作業課題	26
第5節	本研究で扱う資料.....	29
第3章	ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの創設期	36
第1節	マーガレット・ドゥブラーのニューヨーク留学とダンスとの出会い.....	36
第2節	ドゥブラーのダンス教育論にみる経験の諸概念	41
第3節	ドゥブラーの運動分析論.....	49
第4節	ダンス専攻の設置とカリキュラム.....	52
第5節	ドゥブラーの引退とダンス・プログラムの「芸術化」	60
第4章	第二次世界大戦後から1970年代にかけてのアメリカの文化政策とダンス 73	
第1節	冷戦期の芸術政策.....	73
第2節	高等教育機関におけるダンスのアイデンティティの模索.....	76
第3節	会議後のウィスコンシン大学マディソン校におけるダンス	83
第5章	身体教育デパートメントの改組とダンスのアイデンティティの模索	91
第1節	タイトルIXの成立と男女身体教育デパートメントの統合	91
第2節	ダンス部会のアイデンティティ・ポリティクス	99
第3節	新デパートメントにおけるダンス・プログラムとダンス部会	105
第6章	ダンスの「芸術化」とデパートメントとしての独立	110
第1節	アンナ・ナジフの独立構想	110
第2節	IATECH 専攻の設立とダンス・プログラムの復活.....	116
第3節	ダンス・デパートメントの設立	125
第7章	本研究で得られた知見と貢献	134
第1節	本研究で得られた知見.....	134
第2節	本研究の貢献	136
第3節	今後の課題.....	141

本研究で使用了た UW-MADISON ARCHIVES の資料一覧	143
引用・参考文献一覧.....	148
参照 WEB ページ一覧.....	154

第1章 はじめに

本研究の目的は、アメリカ合衆国（以下、アメリカ）の高等教育機関において芸術系のダンス・デパートメントが設立された要因を明らかにすることである。

アメリカにおいて身体教育¹としてダンスを位置付け、教育機関に取り入れようという動きはすでに18世紀に見られ、多くの女子私立学校でダンスが教えられていた²。19世紀にはその健康的効果を見込まれて、女性たちのみならず軍隊的な訓練の場において男性たちにもダンスが教えられるようになった。このころ高等教育機関においては男女別学が普通であり、さらに身体教育においてはその履修内容までもが異なっていた。ヴァッサー・カレッジ (Vassar College) がアメリカで初めて女性に身体教育活動を提供したのは1868年のことである。20世紀前半には多くの高等教育機関でダンスが教えられるようになり、そのほとんどは主に女性の身体教育科目として教えられていたのだが、1960年代になるとダンスを身体教育デパートメントから切り離し、独立したデパートメントや芸術系のデパートメントの一部に位置付ける高等教育機関が数多く見られるようになる。この流れは次第に加速し、現在ではほとんどのダンス・プログラムが身体教育デパートメントではなく独立したダンス・デパートメントや芸術系デパートメントで提供されている。

1960年代以後の「ダンスの芸術化」を裏付ける資料としてアメリカ・健康・体育・レクリエーション・ダンス連盟 (American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance) が発行する *Dance Directory* がある。*Dance Directory* は大学でダンスを学ぶことを検討している高校生などに向けて、それぞれのプログラムの簡略な情報を整理して提供している。Hagood (2000) によれば1965年から1980年にかけての「ダンス・ブーム」期にアメリカの高等教育機関において多くの芸術系ダンス専攻が多く誕生したという³。そこで1966年度版、1978年度版、1986年度版の *Dance Directory* の中からダンス専攻を提供しているプログラムを枚挙し、①身体教育デパートメントの中にダンス専攻を位置づけているもの、②美術や音楽などとともに芸術系デパートメントの一部として位置づけているもの、③独立したダンス・デパートメントとして位置づけられているもの、④その他 (デパートメント不明) の4つに類型化して整理したものが以下の図である。

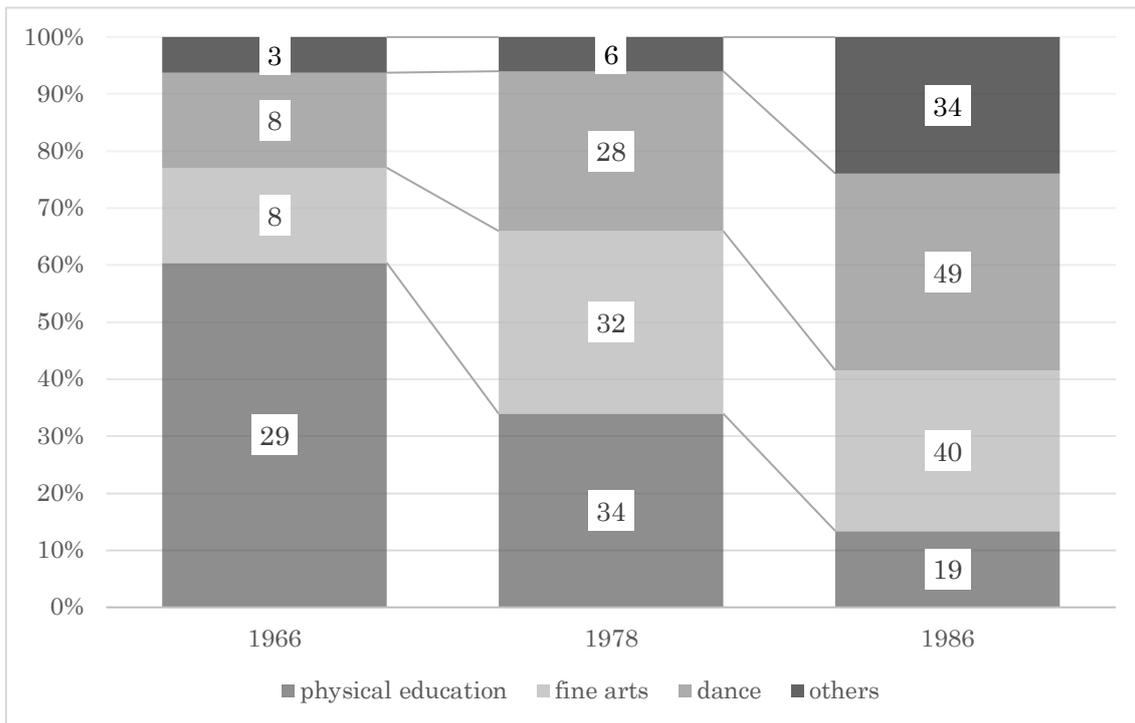


図 1-1 1966 年度-1986 年度の 20 年間に於けるダンス専攻の位置づけの変化(筆者作成)

1966 年度版の *Dance Directory* に掲載された 48 のダンス専攻のうち、その約 60% にあたる 29 の専攻が身体教育部門もしくは女性身体教育部門に位置付けられている⁴。1972 年のタイトル IX の成立を受け、アメリカの高等教育機関において男女別々に分かれていた身体教育部門の多くが統合された後の 1978 年度版 *Dance Directory* では、身体教育部門に位置付けられたダンス専攻の減少が目立つ一方で、芸術系部門に位置付けられたダンス専攻や独立したダンス・部門で提供されるものの増加が見られる⁵。さらに、1986 年度版の *Dance Directory* では、身体教育部門に位置付けられたダンス専攻(実数 19、構成比約 13%)を、芸術系部門に位置付けられたダンス専攻(実数 40、構成比約 28%)や独立したダンス・部門に位置付けられたもの(実数 49、構成比約 34%)の方が上回り、アメリカの高等教育機関におけるダンス専攻の位置づけのマジョリティは身体教育から芸術へと完全にシフトしたことが窺える⁶。ダンス専攻の数および位置づけに着目すると、1966 年度から 1986 年度までの 20 年間を通じてその数は増え続けており、少なくとも *Dance Directory* を参照する限り、Hagood の唱えた「ダンス・ブーム」期における高等教育機関におけるダンス専攻の量的拡大、および身体教育から芸術へのシフトは裏付けられたように思える。

またダンス・プログラムを提供するアメリカの高等教育機関の認定を行う基準認定団

体⁷として The National Association of School of Dance (NASD)がある。NASD は連邦教育省の認証を受けて各高等教育機関のダンス・プログラムを査定・認定しており、2018年8月現在、72の大学のダンス・プログラムが認定を受けている⁸。それらすべてが芸術系デパートメントか、もしくは独立したダンス・デパートメントで提供されており、現在設置されているダンス・プログラムは多くがそのいずれかであると予想される。

アメリカの高等教育機関において、独立したダンス・デパートメントが設立されたことは、教員が自らの学問的アイデンティティを学問としてのダンスに求めるようになったことと共に、高等教育機関内においてダンスが独立した学問領域として認められたことを意味する。アメリカの高等教育機関におけるダンスの芸術化について論じたこれまでの先行研究では、1960年代以降にアメリカ社会においてダンスが芸術分野の一つとして認知され、連邦政府からの助成対象領域になったことや⁹、高等教育機関で教鞭をとるダンス教育者たちが、モダンダンスの上演家・振付家とも連携をしながらダンス・カリキュラムや高等教育プログラムのスタンダードの開発を組織的に行ったことに焦点が当てられ、ダンスの芸術化の要因を高等教育機関外のマクロな要因に求めた説明がなされている。しかしながら、女性の身体教育プログラムとして扱われていたダンスが、芸術系のダンス・デパートメントとして位置付け直されたことに伴う葛藤に対して、先行研究では十分な考慮が払われてこなかった。純粹芸術 (fine arts) や上演芸術 (performing arts) としてダンスを位置付けることは、その発端において高等教育機関におけるダンス・プログラムが志向していたアマチュアリズムとは異なるベクトルを有するものであることに注意しなければならない。芸術としてのダンスを志向するダンス・プログラムの目的は高い技術と専門性を有する上演家・振付家の養成に置かれており、ダンスを手段として全人格的な発達を目的とするダンス教育とはその目的が異なっている。

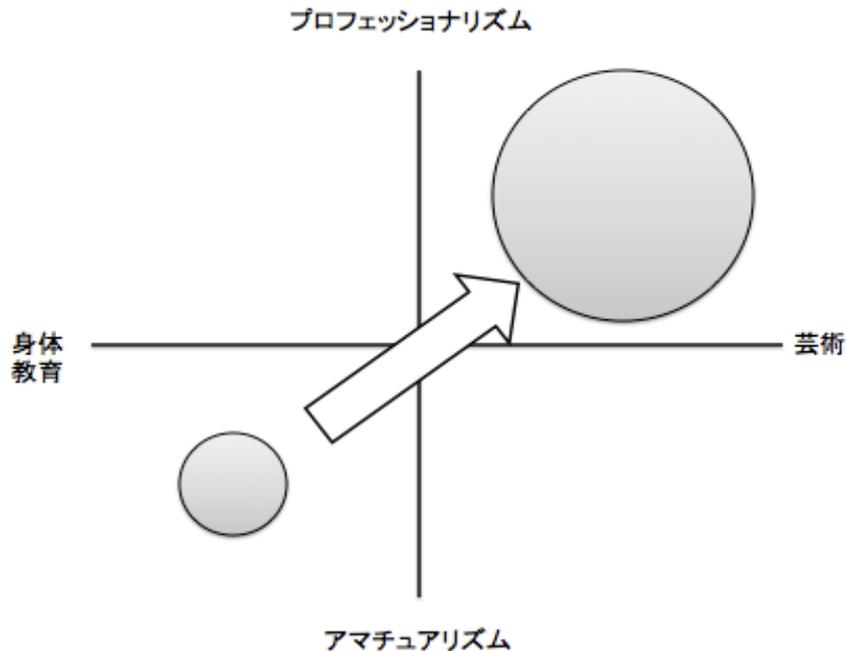


図 1-2 アメリカの高等教育機関におけるダンスの位置付けの変容（筆者作成）

「アマチュアリズム-プロフェッショナリズム」という軸と「身体教育-芸術」という二つの軸を置いて、20世紀前半から現在に至るまでのアメリカの高等教育機関におけるダンスの位置付けの変容を考えてみよう。図1-2に示すように、多くのダンス・プログラムは第3象限（アマチュアリズム／身体教育）から第1象限（プロフェッショナリズム／芸術）へとその位置付けを変化させるとともに、量的にも拡大していった。この変容の過程でアマチュアリズムとしてのダンスとプロフェッショナリズムとしてのダンスの間の価値対立はどのように終着していったのだろうか。また、デパートメントとしての組織化はリソースや権限の移譲を伴うため、学内においても少なからず葛藤があったと推察される。身体教育デパートメントに位置付けられていたダンスが独立したデパートメントとして組織化されるにあたり、それぞれの高等教育機関内においてはどのような葛藤や障壁があり、それらが乗り越えられていったのだろうか。アメリカの高等教育機関におけるダンスの位置付けの変容をテーマにしたこれまでの先行研究においては、連邦政府の教育政策や芸術政策、全米レベルの専門家団体の動き、また社会的潮流といったマクロな視点に着目したものが見られるが、そのような研究においてはダンスを専門とする教員集団の内部における対立や彼（女）らと学内の他の組織との間の葛藤が見過ごされており、これらの問いに答えることができない。またマクロな要因のみに依拠した説明では、「ダンス・ブーム」期に独立したダンス・デパートメントとして組織された高等教育機関を説明することはできても、その時期にデパートメントとして

の独立を果たさなかった事例を説明できない。もともと身体教育デパートメントの下位プログラムとして位置付けられていたダンスがデパートメントとして独立した要因を説明する際に、高等教育機関を取り巻く社会的政治的要因（外在的要因）のみに着目するだけでは不十分であり、高等教育機関内部においてダンスを専門とする教員（faculty）がどのようにデパートメントとしての独立を模索していったかを捉えることが不可欠である。

本研究はアメリカの高等教育機関においてダンスを専門とする教員の活動に着目し、彼らが高等教育機関外の外在的要因に影響を受けながら、必要なレディネスを整えたときに初めてデパートメントとして独立し得たことを示す。事例として1926年にマーガレット・ドゥブラー（Margaret N. H'Doubler, 1889-1982）の尽力により世界初のダンス専攻（dance major）が設置されたウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムを取り上げるが、ある高等教育機関におけるダンス・プログラムの事例を仔細に検討することで、プログラムの変容に伴うプログラムの目的やカリキュラムの質的変容、高等教育機関の内部における他の組織との葛藤、さらにはダンスを教えることの意味をめぐり、ダンスを専門とする教員同士の葛藤に迫ることができる。

本研究はウィスコンシン大学マディソン校においてダンス教育の実践が開始された1910年代から同大学においてダンス・デパートメントが誕生した2010年ごろまでの約100年間の同校ダンス・プログラムを対象とし、歴史的アプローチによってアメリカの高等教育機関におけるダンス・デパートメントの設立を可能にした要因を明らかにする。

本論文の構成は以下の通りである。

第2章では本研究に関連する先行研究の検討とともに分析の視点が示される。

以下、第3章から第6章にかけては、ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの歴史を時期ごとに区切って記述する。

第3章ではウィスコンシン大学マディソン校においてダンスの実践がなされるようになった19世紀後半から、マーガレット・ドゥブラーが着任しダンス専攻が設置された時期、さらにその後ダンス・プログラムに上演家・振付家養成を志向するプログラムが置かれた1960年ごろまでの同校におけるダンス・プログラムの歴史的変遷を描き出す。

第4章では、大戦後の高等教育機関の変容、及び連邦政府の芸術政策の動向を確認し、ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムを取り巻く社会的政治的要因の変容及びそれへの教員の対応について述べる。

第5章では、1972年のタイトルIXの成立後、同校における男女の身体教育デパー

トメントが統合し、ダンス・プログラムがアイデンティティの再構築を模索する中で芸術系プログラムとしての独立を目指すものの、新生の身体教育・ダンス・デパートメントにとどまることを決定した 1980 年ごろまでを中心に描き出す。

第 6 章では上演芸術としてのダンスの特徴を強調し、デパートメントとして組織化される 2010 年までの変遷を主に取り扱う。

第 7 章では描かれた歴史的変遷について第 2 章であげた分析の視点を元に考察を加え、本論文の結論とともに、今後の展望と課題が示される。

¹ Physical Education の訳語について、森田（1995）によれば日本では明治期に欧米の三育主義が紹介された際に訳語の検討がなされ「身体教育」及びそれを簡略化した「体育」の表記が用いられることになったが、その後国家主義の高まりを受けて運動を手段とした心身の教育として「体育」概念が形成されていったという（森田信博. (1995). 「体育」概念の形成過程について. 秋田大学教育学部研究紀要 教育科学部門. vol.48. pp.61-71.）。本稿では、学校教育で行われるものを指すときに「体育」、学問領域を指すときに「身体教育」の訳語を用いることとする。

² Mark, J. E. III. (1957). *America learns to dance: A historical study of dance education in America before 1900*. New York : Dance Horizons. p.38.

³ Hagood, T. K. (2000). *History of dance in American higher education: Dance and the American University*. New York: Edwin Mellen Pr.

⁴ American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1966). *Dance Directory : 5th edition*. DC : American Association for Health, Physical Education, and Recreation.

⁵ American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1978). *Dance Directory : 10th edition*. DC : American Association for Health, Physical Education, and Recreation.

⁶ American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1986). *Dance Directory : 13th edition*. DC : American Association for Health, Physical Education, and Recreation.

⁷ ここでいう認証評価 (accreditation) とは、高等教育機関の質保証・向上のために行われる民間の評価活動である。

⁸ The National Association of Schools of Dance. 参照 URL : <http://nasd.arts-accredit.org>. 最終アクセス日 2018 年 9 月 11 日.

⁹ 1965 年に設立された全米芸術基金 (the National Endowment for the Arts) では他の芸術領域とともにダンスの委員会も設けられ、初年度にはアメリカン・バレエ・シアター (American Ballet Theater) に対して助成が行われるなど、以後多くのダンス・カンパニーが NEA の支援を受けることとなった。

第2章 先行研究の検討と本研究の分析の視点

本章では、関連する先行研究の検討を行うとともに、本論文が依って立つ分析の視点を提示する。

第1節 アメリカの高等教育におけるダンスの歴史に関する先行研究の検討

アメリカの高等教育におけるダンスの変遷を、ダンス教育者団体や研究者団体の会議録を中心に、芸術史や連邦政府の芸術政策史、高等教育政策史などとも関連付けながら通史的に描き出した研究の代表的なものとして Hagood (2000) があげられる。Hagood によれば、女子の身体教育として始まったアメリカの高等教育におけるダンスは、1965年から1980年にかけては高等教育就学人口の増大を受けて「ダンス・ブーム」を迎える¹。この時期には独立したダンス・デパートメントが組織化されるものや芸術系カレッジに位置付けられるダンス・プログラムが増大するとともに、学問としてのダンス (Dance as a discipline) のあり方を議論する会議が数多く開かれ、高等教育において提供されるダンス・プログラムもこれらの会議で生み出されたスタンダードを踏まえたものとして専門化が進んでいった。特に組織論的アプローチによって「ダンス・ブーム」期におけるダンス教育者団体の会議の記録の詳細な分析から、この時期の高等教育におけるダンス・プログラムの拡大及び芸術化はどのような論理で進められたのかを考察している点において優れた研究である反面、以下のような課題もある。

まず、Hagood の研究では1960年代の連邦政府の芸術政策の流れや、高等教育機関でダンスを教えるダンス教育者、モダンダンスの上演家・振付家、ダンス批評家などが行なった会議での論点などが整理されているものの、それらが個別具体的な高等教育機関のデパートメントやダンス・プログラムにどのような影響を与えたのかを論じていない点である。確かに1960年代から1980年代にかけて独立したダンス・デパートメントや芸術系のデパートメントに位置付けられるダンス・プログラムが増加したことは事実である。一方で、プログラムの再定位はダンスの学問的位置付けの変容を伴うセンシティブな問題でもあり、高等教育機関の外部でダンスが芸術としてのプレゼンスを高めたからといって、直ちに高等教育機関におけるダンスが芸術として再定位されたわけではない。Hagood もこの点は自覚しているようで、1965年の「学問としてのダンス会議 (Dance as a Discipline Conference)」後に参加したダンス教育者たちは、自分たちの所属する高等教育機関に戻り、独立したダンス・プログラム²に向けた権限とリソース

を得るために奔走したとしている³。しかしながら、そこで Hagood が「会議後のダンス教育者たちの活動」の例として挙げているウィスコンシン州の例では、ウィスコンシン大学における独立したダンス・デパートメントの設立に向けた動きではなく、州内に点在していたダンス会議をウィスコンシンダンス会議 (Wisconsin Dance Council) へと統合する動きに言及されているのみであり、高等教育機関内における議論や折衝には全く触れられていない。

また、Hagood はユタ大学、メリーランド大学、オハイオ州立大学など 21 大学のうち 11 大学で、ダンスが 1965 年から 1975 年の間に独立したデパートメントとしての地位を得たことを挙げて、「学問としてのダンス会議」などの会議の後にいかにダンスが急速に発展したかを象徴的に描き出した出来事であると論じているが⁴、ウィスコンシン大学を始め、その時期にダンスが独立したデパートメントとしての地位を得なかった高等教育機関については等閑視している。このような事例を検証することによって、ダンスのデパートメントとしての独立を阻害する要因や、デパートメントとして独立するにあたっての重要な先行条件を明らかにできるのではないだろうか。

さらに、Hagood がダンスの「明確な学問的アイデンティティ」や「学問としてのダンスの開花」、「学問的独立」について論じるとき、それが身体教育デパートメントや芸術系のデパートメントで提供されるダンス・プログラムのことなのか、それともダンス・デパートメントのことを指しているのかが判然としない。むしろ、「独立したダンス・プログラム⁵」や「独立した地位を得たダンス・プログラムの数⁶」といった表現からは、Hagood がダンス・デパートメントとダンス・プログラムの違いを明確に区別して論じていないことが疑われる。デパートメント (Department) とはアメリカの大学の基本的な組織単位であり専門家・教員の集合体を指す。これに対しプログラム (program) は学生に提供される教育内容のまとまりのことを指す。阿曾沼 (2014) によれば、アメリカの大学において、プログラムはカリキュラムをベースにする組織であり、デパートメントはディシプリンをベースにする組織である⁷。これら二つの組織の編成原理は異なっており、後述する先行研究でも指摘されているように大学はしばしばデパートメントではなくプログラムの編成を変えることによって、コストを抑えつつ大学内外の変化に対応しようとする。高等教育機関外部における変化に対応するためには、必ずしも独立したダンス・デパートメントを設立する必要はなく、提供するプログラムの内容を変えたり、付け加えたりすることでも対応が可能である。「ダンス・ブーム」期にダンス・デパートメントが設立されなかった高等教育機関では、このようなプログラムの変更による対応が観察されるのではないだろうか。ダンス・プログラムの増加とダンス・デパートメントの増加は必ずしも「ダンスの芸術化」の結果として同列に扱うことができず、

操作概念として区別するべきであるというのが本研究の立場である。高等教育機関においてダンスが確固たる学問として位置付けられてきた歴史的変遷を描こうとする Hagood の意図を考えると、むしろデパートメントとプログラムの違いにも十分な注意を払うことは必須であるように思われる。

Hagood と同様の問題関心のもと、アメリカにおいてダンスを専門とする研究者、教育者、振付家らがどのように専門団体を形作っていったのかに、それらの団体の設立に携わった人物へのオープン・エンド・インタビューによって迫った研究として Kolcio (2010) が挙げられる。Kolcio が挙げる専門団体とは、アメリカン・ダンス・ガイド (The American Dance Guide)、ダンス研究会議 (The Congress on Research in Dance)、アメリカ・ダンス・セラピー協会 (The American Dance Therapy Association)、アメリカ大学ダンス・フェスティバル協会 (The American College Dance Festival Association)、ダンス批評協会 (The Dance Critics Association) である。これらの団体の設立期 (1956 年～1978 年) は連邦政府が民主主義や文化的自由、芸術や教育の投資を強調した時期でもあり、この時期におけるダンス専門団体の設立は、大戦後の政治経済的状况によって可能となったと Kolcio は述べる⁸。また Kolcio は、ダンスがデカルト的な二元論を克服し、知的な身体実践によって学問そのものを変容させるポテンシャルを持ったものであるとその可能性について言及している⁹。1956 年から 1978 年にかけてのダンス専門団体の設立は、そのような知的な身体実践が全国的に組織化されていったことを象徴しており、大学における知のポリティクスにおけるラディカルな変容を反映し実体化したものであると Kolcio は述べるが、そのような実践が個々の高等教育機関内においてどのようなジレンマに直面していたのかについても検討する必要があるのではないだろうか。

高等教育機関におけるダンス・プログラムが果たしてきた機能の変容に視点を当てた先行研究も蓄積されている。Clemente (1992) は 1989-1990 年度にダンス教育のコースを提供している 4 年制大学のダンス・デパートメント長を対象とした質問紙調査 (n=134) によって、アメリカの高等教育機関におけるダンス教育プログラムの状況を調査している。調査票を配布した州のうち、公立学校におけるダンス教育資格 (certificate) を提供している州は少数派であり (42 州のうちウィスコンシン州を含む 13 州)、それらの州に位置する大学のダンス・デパートメントにおいても、ダンス教育資格につながるコースを提供している大学は少ない。学部教育でダンス教育専攻を提供している大学は 30 校、ダンス教育強調プログラム (emphasis) を提供している大学は 24 校であった。これらの結果から、公立学校におけるダンス教育資格を提供している州に位置する大学のダンス・デパートメントにおいてさえも、ダンス教育に力を入れた

プログラムは少なく、その背景として、公立学校における雇用の少なさやダンスを必修にしている州が少ないこと、身体教育や他の教科の資格と組み合わせられないと教壇に立つことができないという制度的制約などがあるのではないかと Clemente は指摘する¹⁰。ダンス教育プログラムが少なくなった背景には、公立学校における労働市場の縮小という要因だけではなく、上演家・振付家養成に重きを置いたプログラムをダンス・デパートメントが重視するようになったことも挙げられよう。Clemente が明らかにした高等教育機関のダンス教育プログラムの状況は、各大学が提供する他のダンス・プログラム、すなわち上演芸術としてのダンスの側面を強調し、上演家・振付家養成を主眼とするダンス・プログラムとの関連を検討することでその位置付けがより明らかになるのではないだろうか。

Bonbright (2007) は、ウィスコンシン大学マディソン校において全米初となるダンス専攻が置かれた 1926 年から 2000 年代に至るまでのダンス教育の歴史を概括している¹¹。Bonbright によると、高等教育において女性身体教育デパートメントに位置付けられたダンスであったが、1972 年の教育修正法第 9 篇 (タイトル IX) 及び 1974 年の教育機会均等法 (The Equal Educational Opportunities Act of 1974) の成立を受け、それまで男女別に設立されていた多くの身体教育デパートメントが統合されるようになると、新しく設立された芸術カレッジ (College of Fine Arts) に位置付けられるようになったという。それによりダンスの教員養成に変化が生じ、より創造的な内容としてダンスを学び、学士 (芸術学) (Bachelor of Fine Arts) や修士 (芸術学) (Master of Fine Arts) を取得する教員が増えていった。また、民主党のケネディ大統領が就任して以後、連邦政府が芸術や芸術教育への積極的な支援を行ってきたことが、1990 年代にダンスが芸術として認知されていくことにつながったとしている。Bonbright は高等教育機関におけるダンスの位置付けの変化が公立学校におけるダンス教員の養成¹²にも大きな影響を与えたことを主張しようとしていると思われるが、そのような説明に説得力を持たせるためには、個別の高等教育機関におけるダンスの位置付けやダンス・プログラムの質的な変容を、資料に基づいて詳細に明らかにする必要がある。

上述の諸研究はアメリカの高等教育機関における、様々なダンス・プログラムの変容を対象としている。アメリカの高等教育機関において、ダンスが身体教育から芸術へと変容して行ったことを、大学外の社会的政治的要因 (連邦政府による芸術政策や教育政策、専門団体の設立など) に求める視点は重要であるものの、それのみに依拠した説明は不十分である。というのも、それらの社会的政治的要因が生成した 1960 年代以後も身体教育デパートメントにとどまるダンス・プログラムは一定数存在したからである。本研究が対象とするウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムもその一つ

であるが、このような事例を説明するためには、視点を大学外の社会的政治的要因から大学内の要因、特にダンスを専門とする教員の関心や動向及び彼らと大学内の他組織との折衝などに移し、大学外の社会的政治的要因と大学内のミクロな要因双方を含む包括的な視点からの分析が不可欠である。

個別の高等教育機関におけるダンスに着目したものについても研究の蓄積がある。特にウィスコンシン大学マディソン校に世界初となるダンス専攻を設立したマーガレット・ドゥブラーの業績やそのダンス教育観については多くの研究がなされている。その中でもさきがけとなるのが Rose による研究であろう。Rose (1950) はドゥブラーが自身のダンス教育観や指導技術を確立するにあたり、どこから着想を得たかについて考察を行っている¹³。ドゥブラーがウィスコンシンで教えるダンスの探求を行った 1920 年代のアメリカ社会では個人の経験に焦点を当てる経験主義的な世界観が広く受け入れられていた¹⁴。また学部時代に生物学を専攻していたドゥブラーであったが、E. J. Marey や J. B. Pettigrew が著した動物の動きに関する書籍から人間の運動に関する興味をかき立てられていったという¹⁵。解剖学や物理学による人間の運動の構造的な探求から、ドゥブラーはさらに運動と人間の内面との相互関係に着目し、心理学への洞察を深めていく。その鍵となるのが、ドゥブラーが H. C. Bastian からその着想を得た運動感覚 (kinesthetic sense)¹⁶ という概念であった¹⁷。さらに、人間の運動はそれぞれが独特のリズムを内包しており、そのリズムが運動感覚的に受容されていることをドゥブラーは見出す。これらの概念を用いながら、ドゥブラーがダンス教育の方法論をどのように構成していったのかについても、Rose は考察を加えている。その根底にあるのは問題解決の方法論であり、学生を床に寝転ばせて重力から解放することで自身の身体が織りなす運動に自覚的にさせることから始まり、簡単な言葉かけを行うことにより学生に動きを創作させたり、その動きを行うことでどのように感じるかを言語化させたりすることで、学生の運動感覚を高めていった¹⁸。Rose はウィスコンシン大学女性身体教育デパートメントの卒業論文としてこの研究をまとめ上げているが、その考察の精緻さには目を見張るものがあり、また卒業論文の指導を行っていたのが他ならぬドゥブラー本人であったことから、ドゥブラーのダンス教育を読み解く貴重な研究として位置づけられている¹⁹。

Remley (1975) はドゥブラーの授業実践においてどのような活動が行われていたのかを探求している²⁰。ドゥブラーのダンスの授業における最初のステップは表現の媒体としての身体の構造・動きを習得することであり、この段階において学生たちは床に寝そべて重力から解放された状態で、転がる、這うなどの簡単な動きを探求していった。そこからだんだんと歩く、跳ぶなどの空間移動を伴う動きの探求へと発展していき、最

終的には学生一人ひとりが思考や感情の純粋な表現を自由な身体運動の創作により行うことが求められた²¹。個々人の自由な表現活動を重視した点は当時アメリカにおいて発展していったモダンダンスの先駆者たちの実践と類似しているが、ドゥブラーの特徴は創造的芸術経験としてのダンスを教育の文脈に乗せたことであると Remley は指摘している²²。

Cox (1977) はアメリカの高等教育機関における、17世紀から20世紀に至るまでのモダンダンスの歴史の変遷を人物史的なアプローチを用いて概括し、特に重要な役割を果たした人物としてドゥブラーをあげている²³。Coxによればドゥブラーのダンス教育観には「為すことによって学ぶ」というデューイの教育哲学が明確に現れているという²⁴。ドゥブラーは解剖学や生理学の知識を用いた科学的側面に加えて創造的側面からもダンス教育のあり方を探求し、またダンス教育のような創造的な活動は、すべての人が体験する機会を与えられるべきであるとの信念に立っていた²⁵。ドゥブラーの著作やCox自身が行ったインタビューを用いて、ドゥブラーのダンス教育において用いられた技術やその根底にある哲学に迫った研究である。

Gray (1978) は、ドゥブラーの生誕からウィスコンシン大学マディソン校での教職から退く1954年までの詳細なライフヒストリーを描き出している²⁶。Grayによれば、ドゥブラーはカーネギー・ホールで子どもたちに音楽を教えていたアリス・ベントリー (Alys Bentley) の実践にヒントを得て、マディソンに戻った1917年からダンスの指導実践を始める。ドゥブラーの実践は学生たちの間で極めて好評であり、1919年には400人を超える学生が、1920年には600人近い学生がそれぞれダンスの授業を履修していたという²⁷。ドゥブラーは教育に資する創造的芸術活動としてのダンスに着目し、高等教育機関において初となるダンス専攻を設置した1926年には、既に存在していた身体教育の教員養成プログラムに同専攻を位置付けた。1930年に8名の卒業生が誕生するが、そのうち半数にあたる4名が他の高等教育機関で教鞭を取っており、以来ドゥブラーの赴任中にウィスコンシン大学マディソン校はダンス教員養成の中心拠点として発展を遂げていった。ドゥブラーはハロルド・クロイツベルグ (Harold Kreuzberg) やテッド・ショーン (Ted Shawn)、ドリス・ハンフリー (Doris Humphrey) といったアメリカ及びヨーロッパの代表的なモダン・ダンサーとも交流があり、ワークショップやパフォーマンスのためにしばしば彼らをマディソンに呼び寄せた²⁸。Grayの研究はドゥブラーの生誕から1954年までという限られた期間ではあるものの、彼女がどのような人々と交流を持ちながら自身のダンス教育理論を展開させていったかを、ドゥブラー本人へのインタビューや歴史資料から丹念に明らかにしている。

近年では Ross (2000) がドゥブラーの教え子たちへのインタビューを通して、上述

の Remley らが部分的に明らかにしたドゥブラーの授業の様子を描き出そうと試みているほか、ジェンダーや進歩主義の観点からドゥブラーが果たした業績の歴史的意義を考察する優れた研究を残している²⁹。Ross はドゥブラーがデューイの問題解決の方法論をダンスにおいて体現したからこそ、高等教育の中にダンスを位置付けることができたことと述べ、ドゥブラーをデューイの後継者としてみなしている³⁰。ドゥブラーのダンス教育論は他の高等教育におけるダンスのあり方を大きく規定したものの、Hagood と同様に Ross も、1960 年代以後にはパフォーマンス志向のプログラムが増加していったことを指摘している³¹。

ウィスコンシン大学マディソン校以外にも、ユタ大学のモダンダンス・プログラムの歴史的変容をユタ大学のアーカイブの資料を中心に描いた研究として Waterfall (1968) と Habel (2010) がある。ユタ大学の身体教育部門においてダンス創作の授業が取り入れられたのは 1921 年のことであるが、その後、ウィスコンシン大学マディソン校でドゥブラーのもとで学んだクランシー (Myrtle Clancey) とブランシュ・ヘイズ (Blanche Hayes) によってダンス・カリキュラムの改変が行われ、1931 年には「リズム形態と分析」や「ダンス理論と哲学」、「ダンス・ドラマ・セミナー」などウィスコンシン大学でドゥブラーが教えていた科目と同じ科目を取り入れるようになった³²。1940 年の秋に、同じくドゥブラーの教え子であるエリザベス・ヘイズ (Elizabeth R. Hayes) が赴任してからは、ダンス教員の養成に重点が置かれ、1944 年にはダンス・マイナー (ダンス副専攻) が、そして 1948 年にはダンス教員専攻が健康・身体教育部門に置かれることとなった³³。1963 年には健康・身体教育部門にダンス部会が設置され、教員養成ではなく上演家の輩出を目的とするモダンダンス専攻が芸術カレッジに設置されることとなった。その後モダンダンス・プログラムは健康・身体教育部門から分離していき、1966 年にはバレエ・モダンダンス・部門が芸術カレッジに設置されることとなる³⁴。これに伴い、中等教育における教員資格につながるモダンダンス教育専攻は 1967 年にユタ州の教員資格認定プログラムから外れることになった³⁵。Waterfall の研究はモダンダンス・プログラムにおける出来事とカリキュラムの羅列にとどまっており、このような改組においてダンス・プログラムと上位部門やカレッジとの間でどのような議論があったかについては言及がなされていない。また、Habel の研究は 1968 年以降を対象としているため、ダンスの身体教育から芸術への移行については以上のような概略を述べるにとどまっており、移行期における学内での葛藤について十分な言及がない。

日本におけるアメリカのダンス教育に関する研究についても紹介しておこう。先駆的なものとしては片岡 (1984, 1986, 1991) がドゥブラー以前にアメリカの高等教育機関

において創造的なダンス実践を行っていたコルビー (Gertrude K. Colby) とラーソン (Bird Larson) の実践について紹介しているほか、彼女らのダンス教育思想がどのように後続のダンス教育者に受け継がれ、教材化されていったのかについて考察を行っている³⁶。また廣兼 (2015) はドゥブラーが 1921 年に著した *A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing* の内容分析を行い、初期のドゥブラーの教材観や指導観を明らかにしている³⁷。これらの研究のように 1920 年代から 1930 年代にかけてのダンス教育の成立期を対象とした歴史研究は見られるが、高等教育機関におけるダンスの位置付けそのものを対象とした研究は見当たらない。

このように個々の教育機関におけるダンスの変容について述べたものとしてはウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムとユタ大学のモダンダンス・プログラムを対象としたものがあるが、本研究の問題関心である身体教育から芸術への移行時期を対象としたものではない。また、ダンスを専門とする教員の関心や動向には焦点が当てられているものの、彼らと大学内の他組織との折衝は見落とされている。既に見てきたように、アメリカの多くの高等教育機関においてダンスは、身体教育部門の下位プログラムとして出発したのだが、いわば身体教育部門内におけるマイノリティとして、ダンス以外を専門とする教員との軋轢やコンサートや作品創作などのダンスの芸術性への理解のなさに対するフラストレーションがあった。実証的なデータを挙げているわけではないが、Ingram (1986) はダンスが身体教育部門にとどまる理由としては①身体教育とダンスの教員資格を両方とすることで公立学校における雇用の可能性が広がること、②身体教育からダンスが抜け出すことで、身体教育の中でダンスが教えられる機会が減ってしまうことの 2 点があり、身体教育部門の教員のマジョリティはスポーツの専門家であることから、部門内における意思決定に参加しにくいことによる無力さやフラストレーションがダンス教員の退出を促すとしている³⁸。また、Clark (1994) は教育者と上演家の二つのアイデンティティの間で揺れ動く女性教育者³⁹たちのライフヒストリーを描いている。クラークによれば教育機関においてダンスがどこに位置づいているかが、そこで働く教員の専門性のアイデンティティに大きな影響を及ぼすという⁴⁰。身体教育部門の中にダンスが組み入れられている時には、ダンスの創造的な側面や上演芸術としての側面が軽視される恐れがある一方、演劇部門や上演芸術部門の中でダンスが扱われる時には、ダンス教育の専門性にあまり敬意が払われない⁴¹。Clark が指摘するように、ダンス教育者としてのアイデンティティと上演家としてのアイデンティティが、高等教育機関のダンスの中で相容れない側面があるとすれば、ダンスが身体教育から芸術へと移行する際に教員のアイデンティティはどのように揺らいだのかは検討に

値するだろう。

現在の「芸術化」したアメリカの高等教育におけるダンスに関する論考を参照すると、ダンスが身体教育デパートメントから離れ自律性を増したことを肯定的に受け止めるもの⁴²がある一方で、ダンスを専攻した大多数の卒業生がプロの上演家や振付家としてのキャリアを歩むわけではないにも関わらずダンス・デパートメントの構造やカリキュラムが過度に専門化(hyperprofessionalized)しすぎていることを批判するもの⁴³や、万人の教育に資するものとしてのダンスという視点が失われ、ダンス教育が軽視されていることを指摘する論考⁴⁴も見られる。また、上演芸術としての側面を強調したダンス・デパートメントを批判的に論じる実証研究も存在する。Montgomery と Robinson (2003) はアマーフト・カレッジ、ハンプシャー・カレッジ、マウント・ホリヨーク・カレッジ、スミス・カレッジ、マサチューセッツ大学アマーフト校⁴⁵のダンス・デパートメントの卒業生を対象にした質問紙調査 (n=193、回収率 36%) により、卒業後の彼らのキャリアについて調査している。彼らによると、1998 年時点でダンス関連の職業 (ダンサー、振付家、ダンス教育者等) についている卒業生は 54.4% であり、約半数がダンス以外の職に従事している⁴⁶。また、ダンス関連の職に従事する卒業生の賃金 (平均 26,329 ドル) は、ダンス以外の職に従事する卒業生の賃金 (平均 40,816 ドル) と比較して低いことが報告されている⁴⁷。さらに、ダンス関連の職に従事する卒業生の割合は年を経るごとに低くなることも指摘しており、「ダンスで食べていく」ことの困難を実証的に示している⁴⁸。このことに関連して Risner (2010) は、卒業生の多くがプロのダンサーになるわけではないにも関わらずダンス・デパートメントが過度に専門職化されすぎ、排他的になっていることを批判し、ダンス教育プログラムの充実を主張する^{49,50}。

要約すると、20 世紀にダンスがどのような役割を期待されて高等教育機関に取り入れられ、その後どのような発展を遂げて行ったのかについて概略的に明らかにした研究や個別の高等教育機関におけるダンス・プログラムに着目した研究は存在するものの、個々の高等教育機関内においてダンス・プログラムの位置付けや役割が通史的にどのように変容していったのかや、ダンスを専門とする教員と大学内の他の組織とのやりとりについては明らかにされていない。高等教育機関内においてダンスを専門とする教員とスポーツを専門とする教員など他の学問領域を専門とする教員との間に少なからず衝突があったこと、また、ダンスを専門とする教員集団の間でさえ、ダンス教育に重きをおく教員と上演家・振付家養成に重きをおく教員との間で葛藤があった (ある) ことを考えると、本研究が関心を寄せる個別の高等教育機関におけるダンスの歴史的変容を検討する必要性が浮かび上がってくる。その変容を分析的に捉えるための視座として、高等教育機関の最小単位であるデパートメントやプログラムに関する組織的研究が有用

な視点を与えてくれる。次節ではそれらを整理し、本研究が依って立つ分析の視点を得る。

第2節 デパートメントやプログラムに関する先行研究の検討

前述したように教員の専門分野を組織編成の原理とするデパートメントと学生が学ぶカリキュラムを組織編成の原理とするプログラムは区別して論じるべきであり、本研究では、ダンスを学ぶ学生に焦点を当てた教育内容のまとまりであるダンス・プログラムと、そのプログラムの提供を担う教員組織であるデパートメント（女性身体教育デパートメント、身体教育・ダンス・デパートメント、キネシオロジー・デパートメント、ダンス・デパートメント）は区別して用いている。

これまでの研究ではディシプリンに結びついた頑健な構造を持つデパートメントに対し、大学が提供するプログラムは比較的容易に変化しうるということが指摘されてきた。一般に、教員は専門分野を同じくする他の教員とデパートメントの運営に携わり、カリキュラムや人事の決定、予算の要求などを行っている。ハーン（2015）によると、大学で働く教員は「自分たちの権威を行使するための手段」としてデパートメントを利用する⁵¹。すなわち、デパートメントはデパートメントが代表する学問の進化や学生数の増減、割り当てられる予算の変化など、絶えず外部からの圧力にさらされているが、カリキュラムの改革などを通じてそうした圧力に適応するのである。

そもそもアメリカにおいてデパートメントという組織構造が誕生したのは1825年のハーバード大学の改革においてであり、履修科目の自由選択制や学生の能力別クラス編成の導入とともに、専門分野を同じくする教員の組織化が行われた⁵²。教員が行うべき研究テーマにまでデパートメント長の権限が及ぶイギリスとは異なり、アメリカのデパートメントにおけるデパートメント長が司る権限はもっぱら管理運営上の問題に限られている。デパートメントに所属する教員間の関係はイギリスのそれと比べて平等主義的であり、また、あるデパートメントと他のデパートメントとの関係も平等である⁵³。

平等主義的な組織構造を持つ一方で凝集性が低いと言われるアメリカの大学のデパートメントは、様々な危機に対してカリキュラム改革を行うことで対処しようとする。これまでのデパートメントに関する先行研究を概観すると、デパートメントを安定的な構造とみなし、デパートメントの配置はあまり変化がないとみる研究が多くを占める。MannsとMarch（1978）は、デパートメントがカリキュラムの魅力高めようと努力するか否かは、デパートメントの財政状況や学会における知名度に依存するという知見を提示している⁵⁴。彼らはスタンフォード大学のデパートメントを対象に、①デパートメントは財政的に安定しているときではなく危機にあるときに、カリキュラムの魅力を

増大させようとするより努力しようとする、②財政的な危機にあるときにカリキュラムの魅力を増大させようとする努力は、研究において名声を得ているデパートメントよりもそうでないデパートメントの方で顕著である、という二つの仮説を検証した⁵⁵。結果、アメリカ国内において研究で名高いデパートメントの方が、そうでないデパートメントよりもカリキュラム改革に消極的であるという結論を示している⁵⁶。Manns と March の示した結論が、他の大学にも適用可能であるとすれば、財政的な危機にあり、かつ学会における名声が低いデパートメントほど積極的にカリキュラム改革に取り組むということになるだろう。デパートメントの基盤となるのは政治学、社会学、物理学といった個々の学問分野 (discipline) であるが、Abbot (2002) によれば、デパートメントは教員の雇用というマクロ構造と個々の大学内のミクロ構造という二重の制度によって支えられているため、極めて安定している⁵⁷。デパートメントが教員の雇用を担うとき、その専門分野の学会に所属する研究者の中から人選を行うため、学問の構造は再生産され続ける。またデパートメントの内容も大学間で基本的には差がない。このような二重の構造が崩れなければ学問の変化は起こらないため、20 世紀を通じ、特に社会科学と人文科学におけるアメリカのデパートメント構造はほとんど変わっていないと Abbot は述べる。個々の学問分野に基づいたデパートメントは、研究、カリキュラム内容の決定、教員の雇用と昇進、学部教育といった機能を担い、アメリカの大学にとって不可欠な組織単位となっている⁵⁸。

Manns と March、そして Abbot が示した知見は、もともと学問分野がアプリオリに存在している場合には首肯できるものであるが、新たなデパートメントが創設される場合や、もともと存在したデパートメントが統合される場合などを議論の射程に捉えてはいない。どのようなときにデパートメントは設立されるのだろうか。デパートメントの設立を促す要因には何が考えられるだろうか。そもそも彼らが主張するようにデパートメントを安定したものとみなす見方は、果たして適切なのだろうか。学問分野の発展とそれに対応したデパートメント構造の変化に着目した先行研究は非常に限られている。大学史家のルドルフ (1990[1962]) は「サイズのみがデパートメント化 (departmentalization) を必要とした⁵⁹」とし、教員は「デパートメント化」されることによって、大学内における地位を得る一方で、専門分化した教員の興味関心は、さらなるデパートメントの分化へと繋がるとしている⁶⁰。ここでルドルフがいう「サイズ」が何を意味するのかが明確ではないが、おそらく専門分野を同じくする教員集団のことを指しているものと考えられる。Blau (1973) は、デパートメントの設立を「学問的創造性の制度化」として定義付け、デパートメントの設立によって大学は力のある教員を確保することができると指摘している。新たな領域におけるデパートメントの創設は大

学がそれを通じて知識の生産に貢献することができる組織的なイノベーションであり、その努力なくしては他の大学に遅れをとることになる⁶¹。Blau は 112 の高等教育機関を対象に、1968 年時点で 9 つの学問領域（人類学、生化学、生物物理学、ジャーナリズム、言語学、微生物学、看護教育、統計学、都市研究）におけるデパートメント設置数を調べ、デパートメントが創設されやすい要因として、大学の規模の大きさや分権的な意思決定構造を挙げている⁶²。大学の規模が大きければ大きいほど、所属する教員の数も増え、教員の専門分野も多様化する。教員の数が多ければ多いほど、新しい学問領域を専門とする教員の数も増え、彼らのイニシアティブによってデパートメントの設立が促されると Blau は見る。

一方で、Gumport (1988) は知識内容と歴史的・文化的文脈とを分断する組織論的研究であるとして Blau の研究を批判する⁶³。何が学問的な知識とされるかは、そこに携わる歴史的・社会的文脈に拠りながら決定されるとする知識社会学的な知見を提示し、Gumport は新たな知識の正統化に果たす教員の役割を注視するよう主張する⁶⁴。確かに、統計学など社会的実用性が明らかな分野のデパートメントの設立と、ジェンダー学やカルチュラル・スタディーズなど、既存の知的枠組みを問い直す志向を持つ学問領域のデパートメントの設立とを同列に扱うことは難しいようにも思われる。Blau 自身も述べているように、新たなデパートメントの設立は既存のデパートメントの教員や理事会等の執行部からの抵抗に晒されることも考えると、Gumport の主張も頷ける⁶⁵。Gumport と Snyderman (2002) はこの見方を発展させ、組織論に知識社会学的な視点を加味し、経済などのマクロレベルの分析と個人に着目した分析との間に焦点を当てる「中レベルの分析」を提案する⁶⁶。そこにおいて着目されるのが、知識の生産（研究）と知識の伝達（教育）という大学の二つの機能であり、これらの機能を構造付ける要因として、官僚的要素（bureaucratic element）とプログラムの要素（programmatic element）を挙げる。官僚的要素とは、教員集団がどのレベルの官僚的組織を形成しているかを示すもので、デパートメントのほか部門（division）や学部（school）といった形態をとる。一方のプログラムの要素とは、知識内容の水平的・垂直的差異を示すものである。大学においてそれぞれの学問分野は水平的に並列されている一方で、ある学問分野は学位授与プログラムになっているのに対し、他の学問分野は学位授与に結びついていないなどの層化が見られる。これら二つの要因を用いて、Gumport と Snyderman はサンノゼ州立大学の 1952 年から 1997 年までの変化を調査している。彼女らによれば、学生の要求や学問の専門化、教員の興味の変化などによって新たなデパートメントの設立は促されるものの、デパートメントの設立は多大な資源を要するため、大学は官僚的要素よりもプログラムの要素を変化させることで学問構造の変化に対応しようと

する⁶⁷。彼女たちの知見にも大学が基本的にデパートメントの設立ではなくプログラムの変更によって変化に対応しようとする基本的姿勢が現れている。

デパートメントの設立に関するものではないが、新たな学問分野の出現やそれに伴う高等教育機関の組織的変容を論じた研究は蓄積されており、これらから有用な示唆を得ることができよう。Ross (1976) は新たなプログラムの創設といった大学組織の革新 (innovation) を、資源、革新への圧力、権限システムの三つの変数によって説明する⁶⁸。新たな学問プログラム創設において、標準的な学問分野 (統計学など) においては単に大学の規模や利用可能な資源が重要になるのに対し、論争的な学問分野 (女性学や都市学など) においては、それらに加えてプログラムの創設を担う権限システムに圧力をかけることのできる教員集団の存在や、大学内の意思決定の分散化といった条件が重要になると指摘している。Ross の知見は、学問分野によって新たなプログラム創設の難易度が変化することを示唆しており、Blau の研究に対する Gumpert の批判を裏付けるものである。また、大学教育改革の先駆的研究として位置付けられるヘファリン (1969) は、1962 年から 1967 年にかけて、学生に提供される授業科目、学生が専攻可能な教育課程、学生が学士号取得のために満たさなくてはならない履修要件、ある教育課程を専攻するための要件、カリキュラムに関する規制の 5 つの指標をもとに、110 の 4 年制大学と 11 の短期大学を対象としてカリキュラム改革に意欲的な教育機関の特徴について検討している⁶⁹。一般にカリキュラムの抜本的な見直しがなされることは稀であり、多くの場合は科目や履修要件を追加したり削減したりする漸進的改革がなされる。ヘファリンによれば、カリキュラムの改革がなされるためには、①改革のための資源、②改革に関心を寄せる改革唱導者の存在、③資源と改革唱導者を受け入れる大学の制度の開放性という 3 つの要件が必要であるという⁷⁰。またヘファリンによれば、カリキュラム改革が学外からの影響なしに行われることはほとんどなく、「学外者が主導し、それに大学が反応する (outsiders initiates; institutions react)」形でカリキュラム改革が行われるという⁷¹。カリキュラム変革における大学外の影響を重視するヘファリンの見方を受け継ぎ、Hashem (2007) は新しい学問分野の登場に影響を与える 4 つの要因として①社会的圧力、②国の介入、③分野(field)のリソースの豊富さ、④分野の制度的ダイナミクス (Abbot のいうデパートメントと学問分野の両方における再生産構造) を挙げ、以下のようなモデルを用いて新たな学問分野の生成を検討している⁷²。

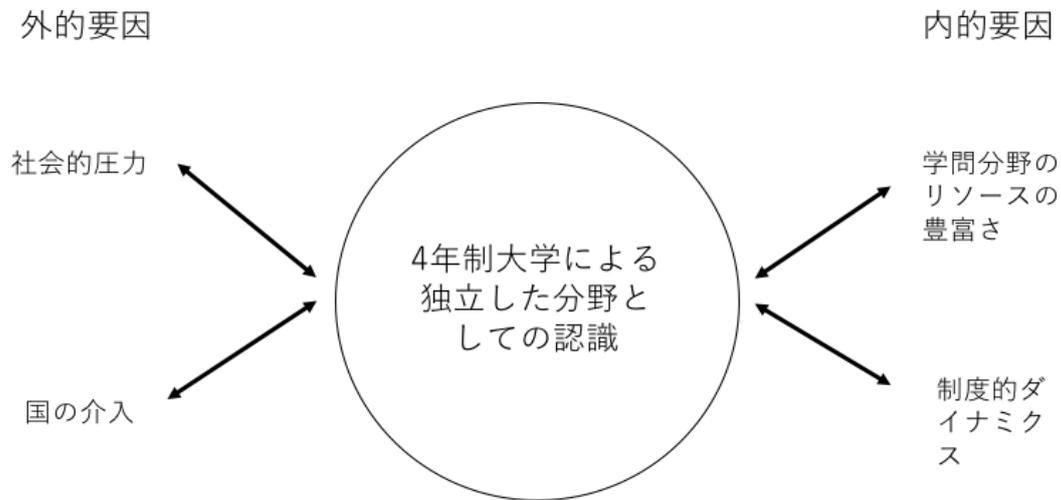


図 2-1 応用分野の独立を促進する主な要因 (Hashem (2006) より抜粋、訳出筆者)

Hashem は 1969-70 年から 1993-1994 年にかけて授与された学位の数が著しく増大した分野のうち、行政学、病院管理学、レクリエーション、法学、刑事司法、コミュニケーションの 6 分野を選択し検証している⁷³。このうちレクリエーションやコミュニケーションの分野は学問分野のリソースの豊富さが低いにも関わらず急成長を遂げたことに着目し、学問分野のリソースの豊富さよりもむしろ連邦政府による介入が学問分野の生成の必要条件になりうると主張する⁷⁴。Hashem はデパートメントの設立ではなく授与される学位の出現をもって学問分野の生成を捉えているため、本研究の問題関心とはいささか異なるものの、高等教育機関がどのような要因にさらされて教育内容を変化させるかを捉えている点は興味深い⁷⁵。

Hashem のいう内的要因とは大学内部におけるリソースの配分の問題やデパートメント構造のことではなく、学問分野と市場とのつながりにおいて発生する労働機会などを指しているものと考えられる。これに対して Gumport (2002) は新たな分野の出現には社会的組織的要因だけではなく、教員の興味関心や認識論的な傾向性も重要であると主張する。その影響度合いは主流の分野 (心理学、統計学、社会学) であるか、周縁的領域 (ダンスなどの上演芸術が含まれる) であるか、学際的領域 (女性学や地域学) であるかによって異なるものの、それらに共通して教員の興味関心が新たな学問分野の出現において一義的な役割を果たすと Gumport は述べる⁷⁶。Gumport は大学外部の政治的要因がどのように大学と学問分野に影響を与えているかを、フェミニスト学の生成に貢献した女性学術者の経験に着目して明らかにしている。1964 年以前に大学院に入学した先頭集団 (forerunners) と 1972 年以後に大学院に入学した後続集団 (pathtakers) に比べて、1964 年から 1972 年に大学院に入学し研究者としてのキャリアを歩み始めた

開拓者たち (pathfinders) は政治的な指向性と学問的興味を融合させる条件を活用したと Gumport は述べ、それらの条件として女性学術者のクリティカル・マス、いくつかの学問分野における認識論的な転換、博士候補者に対する十分な財政的援助、支持的な政治運動を挙げている⁷⁷。Gumport (2002)は特定の高等教育機関におけるデパートメントの出現ではなく、全米におけるフェミニスト学の出現を対象としているため、本研究の問題関心とはいささか異なるものの、教員の興味関心に着目している点で示唆に富む。

ハーンが期待するように、「脅威と機会の増大に対してデパートメントがどう対応するのかを時間をかけて追うこと」、また「プログラムやデパートメントの新設と廃止を研究すること」には大きな意義があるものの、「今までのところ、デパートメントに関する時系列的な研究はごく少ない」⁷⁸。その中でもデパートメントやプログラムに関する先行研究を整理すると、デパートメント構造の頑健性を説明する研究 (Manns & March 1978, Abbot 2002) やデパートメントを創設しやすい大学の特徴を検討した研究 (Blau 1973)、ある大学内におけるデパートメント構造の変容を検討したもの (Gumport & Snyder 2002)、ディシプリンや大学内におけるプログラムの生成について検討したもの (Gumport 2002, Hashem 2007, Ross 1976) などが見られる。これらの研究では連邦政府の介入や変革を促す社会的圧力といった大学外部の要因と、学内のリソース、教員の興味関心、制度的開放性といった大学内部の要因からカリキュラム改革やデパートメントの生成を説明しようとする傾向が見て取れる。しかしながら、デパートメントの設立にあたってどのような要因が重要であるのかについて明確な言及がなされていない。Blau が指摘するように大学の規模に相関する教員の人数が重要であるとの指摘はもっともであるが、Gumport が主張するようにデパートメントが設立される学問領域の知識内容や性格を加味した分析が行われる必要がある。

以上を踏まえ、本研究では以下の節で示すモデルを構築し分析を試みる。

第3節 本研究で扱う事例

本研究はアメリカの高等教育機関において身体教育の下位プログラムとして始まったダンスが、独立したデパートメントとなった要因を明らかにしようとするものである。Hagood (2000) はダンス・プログラムの設置とダンス・デパートメントの設立を区別せずに論じていたが、Blau が「学問的創造性の制度化」と定義づけたように、デパートメントの設立は教員のディシプリンへの帰属意識に関わると同時に、学内において頑健な構造を持たせるにたる学問分野であることを、当該学問領域を専門とする教員だけでなくそれ以外の教員も認知した結果であると考えられる。本研究では芸術系のダン

ス・プログラムの設置ではなく、独立したダンス・デパートメントの設立に着目する。

アメリカにおいては中央政府にあたる連邦政府が中央集権的に教育プログラムを管理せずに、個々の高等教育機関が主体性を持って独自にプログラムを発展させてきた。ダンス教育の歴史的変遷を捉えるにあたっては、数多くあるダンス・プログラムの中から適切な事例を取り上げて論じる必要がある。事例研究を行う際、単一事例研究を行うべきか複数事例研究を行うべきかについては様々な意見が存在するが、Yin (2014) は、事例が次のような特徴を備えている場合には、単一事例研究が妥当であると述べている⁷⁹。すなわち、研究において採用する理論を検証するにあたっての要件が明確かつ統制されており、その事例を検証することで理論の真偽を確かめることが可能になるような決定的事例 (a critical case)、理論的もしくは常識的に考えて起こることが稀な極端な事例 (an extreme or unusual case)、現象が起こる日常的な環境や条件を捉えることが可能な典型的事例 (a common case)、事例へのアクセス自体が困難であり、記述すること自体に価値が発生する啓示的事例 (a revelatory case)、そして複数の時間的地点において一つの事例を検証する長期的研究事例である。また、ジョージとベネット (2013) は理論形成を目指す事例研究のデザインとして非理論的／輪郭的・固有記述的事例研究、論理的・輪郭的事例研究、発見方法的事例研究、理論検証的事例研究、可能性調査、ボトムアップ型研究の6つのパターンをあげている⁸⁰。研究総合大学、リベラル・アーツ・カレッジ、公立研究大学、コミュニティ・カレッジ等、様々な形態があるアメリカの高等教育機関のダンス・プログラムの中から、どの事例を選択することで本研究の問いへの解答に迫ることができるだろうか。

本研究ではダンス教育の最も長い伝統を持つ高等教育機関であるウィスコンシン大学マディソン校に焦点を当てる。ウィスコンシン大学マディソン校には1926年、マーガレット・ドゥブラーのリーダーシップのもと、アメリカの高等教育機関で初めてダンス専攻が設立され、以来、初等中等教育機関、高等教育機関に数多くのダンス教員を輩出してきた。長年にわたって高等教育機関におけるダンスをリードする役割を果たしてきたものの、1970年代から1980年代の「転換期」を経て、一時はダンス・プログラムにおける新規入学生の受け入れを停止し、その後教員養成よりも上演芸術としてのダンスの専門性に焦点を当てたプログラムへと変容し、2010年にダンス・デパートメントとして組織化された経緯を持つ。同大学のダンス・プログラムはアメリカで最も長い歴史をもつダンス・プログラムであり、長期にわたる事例の検証を可能にしてくれる。また、身体教育デパートメントの下位プログラムとしてスタートし、「ダンス・ブーム期」を経験しながらも、独立したダンス・デパートメントとして組織化されたのは近年(2010年)であるという稀有な特徴を持っている。ウィスコンシン大学マディソン校

のダンスの事例は先行研究が指摘するダンス・ブーム期（1965-1980）よりかなり後に
デパートメントとしての組織化を経験したことから、先行研究が提示する理論では説明
することができない逸脱事例であり、これまでの研究で見落とされてきた先行条件や新
たな変数および因果メカニズムの特定に役立つと考えられる。これらの理由から、同校
のダンス・プログラムは、アメリカの高等教育機関において身体教育から芸術へとダン
スの位置付け及び意味づけがどのように変容していったのかを検証することができる
格好の事例であり、単一事例研究の対象として選択するのに適していると考え⁸¹。ま
た、Blau の研究においては、大学の規模（に相関する教員の人数）がデパートメント
の設立を促すとされていたが、ウィスコンシン大学マディソン校のような大規模な大学
⁸²においてなぜダンス・デパートメントの設立が遅れたかを検証することは、デパート
メントの設立の新たな要因の析出を可能にするものと期待される。

第4節 リサーチ・クエッションと作業課題

本研究では、以下のリサーチ・クエッション、仮説、および作業課題を設定する。

リサーチ・クエッション：身体教育の下位プログラムとして始まったアメリカの高等教
育機関におけるダンス・プログラムがダンス・デパートメントとして組織化されたのは
なぜか。

サブ・リサーチ・クエッション1：身体教育の下位プログラムとして始まったウィス
コンシン大学マディソン校のダンス・プログラムが「ダンス・ブーム期」を経ても、2010
年に至るまでデパートメントとして組織化されなかったのはなぜか。

サブ・リサーチ・クエッション2：ウィスコンシン大学マディソン校においてダンスを
教えることの意味はデパートメント化に伴ってどのように変容したか。

作業課題：ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスの位置付けを、ダンスを専
門とする教員集団とその時代における大学内部や社会的状況との関連から通史的に明
らかにすること。

これまでの高等教育におけるダンスの先行研究では、大学外部の社会的政治的要因に
着目して学問分野としてのダンスの発展を検証した研究（Bonbright 2007, Haggod

2000, Kolcio 2010) や大学内におけるダンスを専門とする教員の活動に着目した研究 (Cox 1977, Gray 1978, Habel 2010, Remley 1975, Rose 1950, Ross 2000) はなされてきたものの、ダンスを専門とする教員が大学内外にわたってどのような活動を行っていたかについては見過ごされてきた。デパートメントやプログラムに関する先行研究で指摘されているように、教員の興味関心や活動が高等教育機関内におけるイノベーションの源泉であることを踏まえると、それらを接合する研究枠組みによって高等教育におけるダンスの歴史の変容を捉える必要がある。

Gumport (2002) が言うように、統計学や心理学などの主流の学問領域に対して、ダンスは歴史的に周縁的な学問領域として扱われてきた。また、Ingram (1986) や Clark (1994) が指摘するように、後発の学問領域として、身体教育(学) から見ても芸術学から見ても周縁的な位置付けをされると言う、いわば二重の意味でのマージナリティを負わされてきた学問分野である。学問としてのダンスの歴史の変容を捉えるためには、このようなダンスの宿命—主流の学問分野と比較した時のマージナリティと親学問から見たときの鬼子としてのマージナリティ—を考慮した上で、高等教育機関内における他の学問領域や組織との関係性を捉えた研究を行うことも必要であろう。

以上を踏まえ、本研究では以下に示すモデルに基づいてウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムの歴史の変容を描き出す。

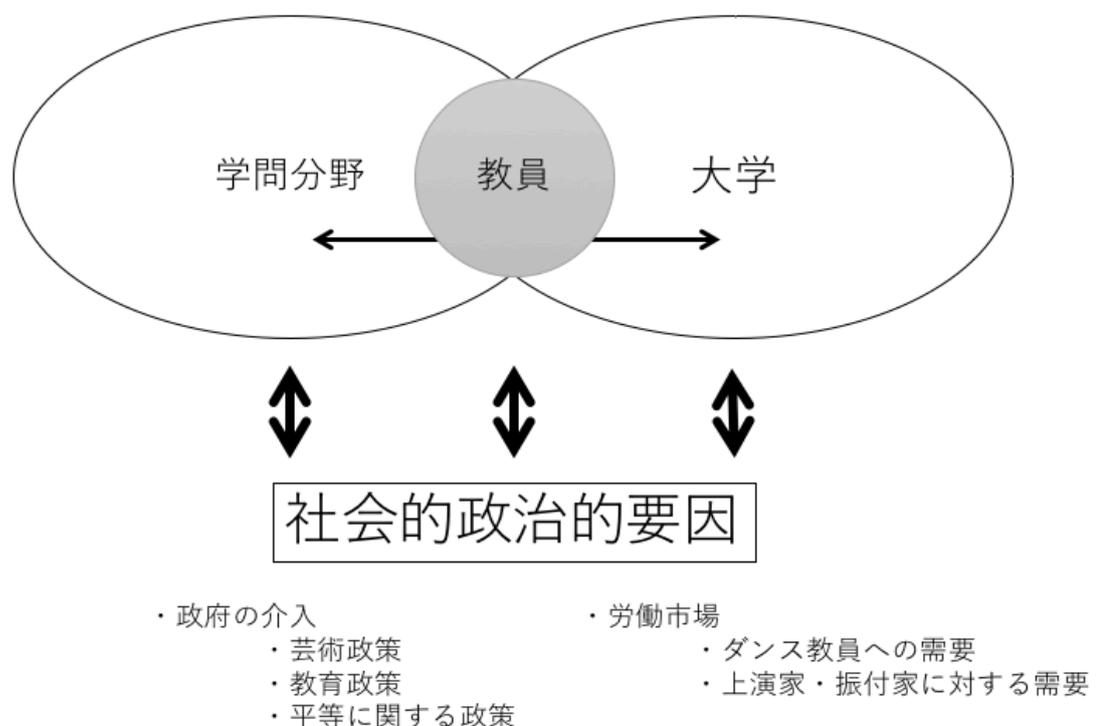


図 2-2 本研究が提示する分析モデル (筆者作成)

先行研究で着目されているダンスという学問分野そのものやアメリカの大学に影響を与えた社会的政治的要因（州や連邦政府による芸術政策、教育政策、労働市場など）を検討するとともに、本研究はウィスコンシン大学マディソン校においてダンスを専門とする教員の興味関心や活動に着目する。先行研究で指摘されているように大学教員（faculty）は個々の高等教育機関に所属すると同時に、自らが専門とする学問分野（discipline）にアイデンティティを持つ存在である（Abbott 2002, Gumport 2002）。上述のモデルにおいて縦方向の矢印は相互作用を表しており、大学や教員、またそれぞれの学問領域で研究が行われる内容は社会的政治的要因と相互に影響し合うことを示している。また、横方向の矢印は教員がディシプリンと大学の両方にアイデンティティを持ち、大学内外で活動することを示している。すなわち、大学内においては学問分野としてのダンスを専門とする教員集団を形成し、他の学問分野を専門とする教員とともに教育・研究活動を行う。一方、大学外においては同じ学問分野を専門とする他の教員とともに、専門学会等を形成し活動を行なっている。そこで行われる議論や学問的発展を大学内におけるダンスの位置付けにどのように反映させようとしてきたのか、そのダイナミクスを捉え分析を行う。その際、以下の二つの側面に着目する。

① 内容的側面

(ア) ダンス・プログラムが提供する授業の科目内容

(イ) 個々のダンス・プログラムの目的やダンスを教えることへの意味づけ

② 組織的側面

(ア) 授業を担当する教員の職位や学問的背景

(イ) ダンスを専門とする教員集団と他のデパートメントや学部との折衝

分析の視点は内容的側面と組織的側面とに分けられる。内容的側面はさらに（ア）ダンス・プログラムが提供する授業の科目内容、（イ）個々のダンス・プログラムの目的やダンスを教えることへの意味づけに細分化される。これらに着目することで、その時々のダンス・プログラムがどのような知識・技能の習得を意図して開設されていたのかが明らかになる。そのような機能を担うのはカリキュラムを決定し、実際に授業を行う教員である。組織的側面では（ア）授業を担当する教員の職位や学問的背景といった個々の教員の特性に加え、（イ）ダンスを専門とする教員（集団）と他のデパートメントや学部との折衝過程に着目することで、ダンスを専門とする教員が組織としてどのようなアイデンティティを保持し、上位のデパートメントや学部といった組織と関わっ

ていたのが明らかになる。

第5節 本研究で扱う資料

本研究で収集・分析の対象とした資料は、主にウィスコンシン大学アーカイブ及び州の歴史図書館の所蔵資料で収集されたダンス教育のカリキュラム、スタンダード、教材、生徒向けの配布物、教授会の議事録、歴任教職員のオーラル・ヒストリーのスクリプト等である。

ウィスコンシン大学アーカイブでは、主にウィスコンシン大学に関わる歴史資料が所蔵されており、資料は主にカレッジまたは学部ごとに分類されている。その中でもダンス・プログラムの科目内容や教員が記されたカタログ及び年報（シリーズ No.5）、1926年にダンス専攻が身体教育デパートメント内に設立された当時、身体教育デパートメントが位置付けられていた文理カレッジの資料（シリーズ No.7）、女性身体教育デパートメント、身体教育・ダンス・デパートメント、キネシオロジー・デパートメントが位置付けられてきた教育学部の資料（シリーズ No.13）から、ダンス・プログラムに関連する資料を収集した。収集した資料は UW Archives and Records Management の司書の許可を得て photocopy を取り、PDF ファイルに変換して保管した。本文中でこれらの資料を使用するには資料ナンバーを記してある。また 1990 年代から 2000 年代までのウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの歴史の変遷を明らかにするため、2015 年 8 月から 9 月にかけてプログラムの設置等に携わった教職員に電子メール及び面接による聞き取り調査を行った。インタビューの主なプロフィールと質問内容は以下の通りである。

表 2-1 インタビューの主なプロフィール

	名前	性別	職 位 (2015 年当時)	在 籍 年数	質問内容
1	Jin-Wen Yu	男性	教授、デ パート メント 長	18 年	<ul style="list-style-type: none"> ・IATECH プログラムが 2005 年に閉鎖されたのはなぜか。 ・いつどのようにしてダンス・デパートメントは独立したのか。 ・ダンス・デパートメント独立当時のデパートメント長として、どのような交渉

					<p>を行っていたのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ダンス・プログラムがデパートメントとして組織化される前後での最も大きな変化は何か。
2	Li Chiao-ping	女性	教授	22年	<ul style="list-style-type: none"> ・学士(芸術学)学位プログラムが1997年に設立された当時の議論について。 ・2001年にダンス教育プログラムが閉鎖されたのはなぜか。 ・IATECHプログラムが2005年に閉鎖されたのはなぜか。 ・いつどのようにしてダンス・デパートメントは誕生したのか。
3	Joseph Koykkar	男性	教授	28年	<ul style="list-style-type: none"> ・1988年にダンス・プログラムの新入生受け入れが停止したのち、1990年にIATECHプログラムが始まった経緯について。 ・どのくらいの生徒がIATECHプログラムで学んでいたのか。 ・キネシオロジー・デパートメントが1992年に設立された際、なぜダンスはキネシオロジー・デパートメントに留まることになったのか。 ・IATECHプログラムが2005年に閉鎖されたのはなぜか。

(筆者作成)

このうち Joseph Koykkar 氏には、2015年9月9日にウィスコンシン大学マディソン校ダンス・デパートメント (Lathrop Hall) 内にある Koykkar 氏の研究室にて約1時間の聞き取り調査を行った。内容は録音され、著者の手によってスクリプトを作成し、分析に用いた。またダンス・デパートメント設立時のデパートメント長であった Jin-Wen Yu 氏からは、教育学部やウィスコンシン大学の教員評議会に提出した提案書やデパートメント設立タスクフォースで作成した資料等の提供を受けた。

-
- ¹ Hagood., T. K. (2000). *op. cit.*, pp.218-222.
- ² デパートメント (department) ではなくプログラム (program) という表現を用いていることに注意が必要である。このことの課題については後述する。
- ³ Hagood., T. K. (2000). *op. cit.*, p.196.
- ⁴ *Ibid.*, pp.207-208.
- ⁵ *Ibid.* p.196.
- ⁶ *Ibid.*, p.208
- ⁷ 阿曾沼明裕. (2014). アメリカ研究大学の大学院. 名古屋大学出版会. p.172.
- ⁸ Kolcio, K. (2010). *Movable pillars: Organizing dance 1956-1978*. CT : Weleyan University Press. p.39.
- ⁹ *Ibid.*, p.3.
- ¹⁰ Clemente, K. (1997). Dance education degree programs in colleges and universities. in *Dance in higher education: focus on dance XII*. Virginia: American Alliance for Health, Pphysical Education, Recireation and Dance. pp. 41-46.
- ¹¹ Bonbright, J. M. (2007). National agenda for dance arts education: The evolution of dance as an art form intersects with the evolution of federal interest in, and support of, arts education. National Dance Education Organization website. URL: https://s3.amazonaws.com/ClubExpressClubFiles/893257/documents/Evolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf?AWSAccessKeyId=AKIAIB6I23VLJX7E4J7Q&Expires=1444044614&response-content-disposition=inline%3B%20filename%3DEvolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf&Signature=IBUPmlG7%2B4bbSKD9zII5%2BHKrQWQ%3D. 最終アクセス日: 2017年8月20日
- ¹² 高等教育機関を対象とした研究に対し、義務教育段階におけるダンスの歴史的な研究は少ない。その中でもウィスコンシン州における1980年代末のK-12段階におけるダンス教育の状況を調査した事例研究としてCowan (1990) が挙げられる。1978-79年にはウィスコンシン州では約50%の学校でダンスが身体教育の一部として教えられていたものの、1987年から1989年にかけてCowanが行った調査では、ダンスを教えていた学校は小学校が5校、中学校が4校、高校が16校にとどまっている (Cowan, K. (1990). *The current status of dance education in Wisconsin and developmental influences*. A dissertation thesis submitted to the University of Wisconsin-Madison.)。
- ¹³ Rose, R. J. (1950). *The Wisconsin dance idea*. A thesis submitted to the University of Wisconsin-Madison Department of Physical Education for Women.
- ¹⁴ *Ibid.*, p.20.
- ¹⁵ *Ibid.*, pp.23-26.
- ¹⁶ 運動感覚 (kinesthetic sense) とは筋肉を通じて自らの身体の位置や重さ、運動を感じる働きのこと。
- ¹⁷ *Ibid.*, p.40.
- ¹⁸ *Ibid.*, pp.62-67.
- ¹⁹ Wilson, J. M. (2006). Margaret H'Doubler's mottos in context. in Wilson, J. M., Haggod, T. K., & Brennan, M. A. (ed.) *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York : Cambria Press. pp. 305-351.
- ²⁰ Remley, M. L. (1975). The Wisconsin Idea of Dance : A decade of progress, 1917-1926. in *Wisconsin Magazine of History*. vol.58(3). pp. 179-195.
- ²¹ *Ibid.*, p.183.
- ²² *Ibid.*, p.185.
- ²³ Cox, P. N. (1997). *The development of modern dance in higher education with an*

emphasis on the contributions and influences of Margaret H'Doubler. a thesis submitted to San Jose State University.

²⁴ *Ibid.*, p.79.

²⁵ *Ibid.*, p.92.

²⁶ Gray, J. A. (1978). *To want to dance: A biography of Margaret H'Doubler*. Doctral dissertation submitted to the University of Arizona.

²⁷ *Ibid.*, pp.57-60.

²⁸ *Ibid.*, pp.139-172.

²⁹ Ross, J. (2000). *Moving Lessons: Margaret H'Doubler and the Beginning of Dance in American Education*. Wisconsin: University of Wisconsin Press.

³⁰ *Ibid.*, pp.127-141.

³¹ *Ibid.*, p.201.

³² Waterfall, T. M. (1968). A history of dance at the University of Utah(1906 to 1968). A thesis submitted to the faculty of the University of Utah. pp.21-22.; Habel, L. S. (2010). *History of the modern dance program at the University of Utah 1968-1989*. A published theses submittited to the faculty of the University of Utah. p.23.

³³ Habel (2010). *op. cit.*, pp.24-25.

³⁴ *Ibid.*, p.26.

³⁵ Waterfall (1968). *op. cit.*, p.110.

³⁶ 片岡康子. (1984). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—ナチュラル・ダンスからのアプローチ. お茶の水女子大学人文科学紀要. vol.37, pp141-158. ; 片岡康子. (1986). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—クリエイティブ・ダンスの教材体系を中心にして. お茶の水女子大学人文科学紀要. vol.39. pp.171-201. ; 片岡康子. (1991). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—1930年代にダンス・セクションとベニントン・スクールが果たした役割を中心として. お茶の水女子大学人文科学紀要. vol.44. pp.235-252.

³⁷ 廣兼志保. (2015). Margarert H'Doubler(1889-1982)が提示した”Exercises for Fundamental Motor Control”(1921)についての考察. スポーツ教育学研究. vol.35(2). pp.29-41.

³⁸ Ingram, A. (1986). Philosophical discussion of where dance belongs in higher education (USA). in *Dance: The Study of Dance and the Place of Dance in Society: Proceedings of the VIII Commonwealth and International Conference on Sport, Physical, Education, Dance, Recreation, and Health: Conference'86 Glasgow, 18-23 July*. Routledge. pp.199-202.

³⁹ アメリカの高等教育機関においてダンスは女性の身体教育として取り入れられた経緯があり、ジェンダー (gender) が密接に関係している。ジェンダーの視点から 19 世紀末から 20 世紀にかけてのアメリカの教育機関における女性身体教育の歴史を扱った研究として、Verbrugge (2012) があげられる。20 世紀前半の高等教育における身体教育プログラムは白人中流階級の価値観を反映しており、女性はその中でも男性に従順に従う「二次的な地位 (second-class status)」に過ぎなかった。この傾向は身体教育を担当する教員内にも表れており、女性身体教員は男性よりも限られたリソースと自律性の中で、多くの仕事量をこなすことを求められた (Verbrugge, M. H. (2012). *Active bodies: a history of women's physical education in twentieth-century America*. New York: Oxford University Press. p.46.)。また高等教育機関内で働く教員の性別による待遇の格差についての研究も蓄積がある。Bellas (1994) は 1984 年に行われたカーネギー財団の助成を受けて行われた調査デー

タ (Carnegie Foundation National Faculty Surveys) を用いて男女教員の給与格差をマルチレベル分析によって明らかにしている。それによると講演会や企業のアドバイザーなど大学外における労働市場における就労機会や学位や教歴など、教員個人の変数を調整した後も、女性就業者の割合が高い分野の教員は給与が有意に低いという (Bellas, L. M. (1994). Comparative worth in academia: the effects on faculty salaries of the six composition and labor-market condition of academic disciplines. in *American Sociological Review*. vol.59. p.817.)。ダンスは女性教員の割合が多い分野の一つであるが、ダンスを専門とする教員の給与の実態やそのことが彼らの選択にどのような影響をもたらしたのかについては考慮する必要がある。これらの研究ではジェンダーと身体教育に関する考察が主だが、木場 (2014) は戦後日本における学校ダンスとジェンダー観との関係の変容を言説分析の手法を用いて描き出している (木場裕紀. (2014). 学校ダンスとジェンダー観に関する言説の歴史の変容-体育専門雑誌の言説分析から-。舞踊學. vol.36. pp.31-40.)。

⁴⁰ Clark, D. (1994). Voices of women dance educators: Considering issues of hegemony and the educator / performer identity. in *Impulse*. 1994(2). p.127.

⁴¹ *Ibid.*, p.126.

⁴² Ingram, A. (1986). Philosophical discussion of where dance belongs in higher education (U. S. A.) in *Dance the Study of dance and the place of dance in society: Proceeding of the VIII Commonwealth and International Conference on Sport, Physical Education, Dance, Recreation and Health Conference*. London, New York: E. & F. M. SPON. pp.194-203.

⁴³ Kerr-Berry, J. A. (2007). Dance educator as dancer and artist. *Journal of dance education*. vol.7(1). pp.5-6.; Risner, D. (2010). Dance education matters: Rebuilding postsecondary dance education for twenty-first century relevance and resonance. *Arts education policy review*. vol.111. pp.123-135.

⁴⁴ Bond, K. E. (2010). Graduate dance education in the United States. *Journal of dance education*. vol.10(4). pp.122-135.;

⁴⁵ これら 5 つの大学のダンス・プログラムは合同で the Five College Dance Department を組織し、それぞれの大学のダンス専攻の学生はキャンパスを行き来して授業を受けることが可能になっている (Five College Consortium ウェブページ URL: <https://www.fivecolleges.edu/dance> 最終アクセス日 2018 年 3 月 5 日)。

⁴⁶ Montgomery, S. S. & Robinson, D. M. (2003). What becomes of undergraduate dance majors? in *Journal of cultural economics*. vol.27(1). p.59.

⁴⁷ *Ibid.*, p.68.

⁴⁸ *Ibid.* p.69.

⁴⁹ Risner, D. (2010). Dance education matters: Rebuilding postsecondary dance education for twenty-first century relevance and resonance. in *Arts education policy review*. vol.111. p.124.

⁵⁰ 演劇分野においてもアメリカの多くの高等教育機関においてプロの俳優を輩出することを目的としたプログラムが設立されたが、卒業生の多くが生計を立てるのに苦労していることが報告されている (Zazzali, P. (2016), *Acting in the academy: the history of professional actor training in US higher Education*. New York: Routledge.)。

⁵¹ ジェームズ・C・ハーン. (2015). アカデミック・デパートメントに関する社会学的研究.

-
- パトリシア・J・ガンポート編. 伊藤彰浩、橋本紘市、阿曾沼明裕訳. 高等教育の社会学. 玉川大学出版部. p.290.
- 52 潮木守一. (1993). アメリカの大学. 講談社. pp.73-74.; 吉田文. (2005). アメリカの学士課程カリキュラムの構造と機能-日本との比較分析の視点から-. 高等教育研究. vol.8. pp.78-79.
- 53 ベン=デービッド, J.著 潮木守一、天野郁夫訳. (1974). 科学の社会学. 至誠堂. p.209.; Abbot, A. (2002). The disciplines and the future. in Brint, S. (ed.) *The future of the city of intellect: The changing American University*. California: Stanford University Press. p. 208.
- 54 Manns, C. L. & March, J. G. (1978). Financial adversity internal competition, and curriculum change in a University. in *Administrative Social Quarterly*. vol.23(4). pp.541-552.
- 55 仮説を検証するための変数として、コースの入学者数の分散、コースにおいて取得された平均単位数の分散、カタログにおけるコースの説明の長さ、フルタイムの教授によって教えられた学部コースの割合、授業が集中する時間帯以外で教えられたコースの割合、履修要件を求めないコースの割合、コースで取得された平均単位数、コースにおいて取得された成績の平均、の8つが用いられている。
- 56 Manns と March の研究がデパートメントの創設ではなくプログラムの変更に焦点が移っていることには注意が必要である。
- 57 Abbot. (2002). *op. cit.*, p.209.
- 58 *Ibid.*, p.210.
- 59 原文は「Size alone required departmentalization」となっている。阿部ら (2003) の訳では「規模のことだけでも、デパートメント化は必要であった」とされているが、「規模のことだけでも」ではなく「規模のことこそ」とした方が良いように思われる。ここでルドルフが強調したかったのは、デパートメントとして組織化された教員集団が、それぞれの興味に応じて小グループ化し、新たなデパートメント化を求めるといふ、教員集団の専門分化の側面ではないだろうか (Rudolf, F. (1990). *The American college and University: A history*. Georgia: The University of Georgia Press. pp.399-400.; F. ルドルフ著. 阿部美哉・阿部温子訳. (2003) . アメリカ大学史. 玉川大学出版会. pp.366-367.)。
- 60 Rudolf. (1990). *op. cit.*, pp.399-400.
- 61 Blau, M. P. (1973). *The organization of academic work*. New York: A Wiley-interscience publication., p.190.
- 62 *Ibid.*, p.213.
- 63 Gumport, P. J. (1988). Curricula as Signposts of Cultural Change. in *Review of Higher Education*. vol.12(1). pp.51-52.
- 64 *Ibid.*, pp.54-55.
- 65 Blau. (1973). *op. cit.*, p.196.
- 66 Gumport, P. J. & Snyderman, S. K. (2002). The Formal Organization of Knowledge: An Analysis of Academic Structure. in *the Journal of Higher Education*. vol.73(3). p.379.
- 67 *Ibid.*, pp.397-400.
- 68 Ross, R. D. (1976). The institutionalization of academic innovations: Two models. in *Sociology of Education*. vol.49(2). pp. 146-155.
- 69 Hefferlin, J. B. L. (1969). Dynamics of academic reform. San Francisco: Jossey-Bass.
- J. B. L. ヘファリン著. 喜多村和之・石田純・友田泰正訳. (1987). 大学教育改革のダイナミックス. 玉川大学出版部. p.52.
- 70 *Ibid.*, p.49.
- 71 *Ibid.*, p.146.
- 72 Hashem, M. (2007). Becoming an independent field: Societal pressures, state, and professions. in *Higher Education*. vol.54. p. 186.
- 73 資料として National Center of Educational Statics が発行した *The Chartbook of*

*Degrees Conferred, 1969-70 to 1993-94.*が用いられている。

⁷⁴ *Ibid.*, p.198

⁷⁵ 新たな学位プログラムの創設は必ずしも新たなデパートメントの創設を伴わない。Gumport と Snyder (2002)の分析でも示されたように、大学は官僚的要素ではなくプログラムの要素に手を加えることで変化に対応しようとする。

⁷⁶ Gumport, J. P. (2002). *Academic pathfinders: Knowledge creation and feminist scholarship*. CT: Greenwood Press. p.15.

⁷⁷ *Ibid.*, p.153.

⁷⁸ ハーン(2015). *op. cit.*, p.325.

⁷⁹ Yin, R. K. (2014). *Case study research : Design and methods-Fifth edition*. California : Sage. pp.51-53.

⁸⁰ アレクサンダー・ジョージ=アンドリュー・ベネット著. 泉川泰博訳. (2013). 社会科学のケース・スタディ 理論形成のための定性的手法. 勁草書房. pp.87-88.

⁸¹ 上述した Yin の類型に照らし合わせると、逸脱事例としての特徴と長期的研究事例としての特徴の二つを併せ持っていると言える。また、本研究は特に高等教育機関内における教員の活動に着目して、デパートメント設立にいたる経路を明らかにしようとするものであり、ジョージとベネットの分類では発見方法的 (heuristic) 事例研究に該当すると言える。

⁸² 2017-2018 年度の学生数は 43,820 名、教職員数は 22,038 名であり、ウィスコンシン州で最大の高等教育機関である (The University of Wisconsin-Madison Academic Planning and Institutional Research. (2018) . Data Digest 2017-2018. URL: <https://uwmadison.app.box.com/s/epbh1zhdsudpjvyki38jl7wo8a9gl5w8> 最終アクセス日 2019 年 3 月 1 日,)。

第3章 ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの創設期

われわれの関心の第一は、子どもたちや男女にダンスを手段として教えること、ダンスを生の哲学や体系に貢献する一つの経験として教えることなのです。¹

マーガレット・ドゥブラーの尽力により、ウィスコンシン大学マディソン校に世界初となるダンス専攻が設置されたのは1926年10月のことであった。1916年の春、修士論文研究のためにニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジを訪れたドゥブラーはジョン・デューイ（John Dewey）のゼミを受講し、授業後には当時行われていた様々なダンス教育実践を視察した。アリス・ベントリーらの創造的な実践にヒントを得て、1917年にマディソンに戻ったドゥブラーは人格の完成という教育の究極的な目的にダンスが貢献することを目指し、創造的なダンス教育実践を行った。彼女の実践は「Wisconsin Dance Idea」と呼ばれ、ウィスコンシン州内のみならず彼女の教え子たちの手によって、全米に普及していった。ドゥブラーの実践は日本のダンス教育者にも知られており、公益社団法人日本女子体育連盟の元会長でダンス教育家である松本千代栄も「運動の基本的原理の上に、内発的な運動感覚、表現と創造的体験に注目し、科学と芸術の視野を統合して“人間の教育としての舞踊”を拓いた」とその実践を高く評価している²。

本章ではウィスコンシン大学マディソン校においてダンスの実践がなされるようになった19世紀後半から、ドゥブラーの尽力により身体教育部門にダンス専攻が設置され多くのダンス教育者が養成された1920年代～1950年代、さらにドゥブラーが引退し芸術系のプログラムが置かれるようになった1960年までを対象とし、ダンス専攻の位置付けや内容の変化を見ていく。

第1節 マーガレット・ドゥブラーのニューヨーク留学とダンスとの出会い

ウィスコンシン大学マディソン校における女性の身体教育の歴史は古い。同校において、古くは1863-64年に女性にジムナスティクス（gymnastics）の授業が計画されていたようだが、実際に授業が行われたという記録は残っていない。1878年、アンダーソン（William G. Anderson）が同校の女子学生にカリセニクス³とバーベル運動の授業を実施したのが実質的に同校における女性の最初の身体教育活動である。その後

1894年にはすべての女子学生に週あたり2時間(1単位)の身体教育の授業が必修化され、スウェーデン体操やテニス、自転車、ボーリング、ボートなどの授業が行われていた⁴。

ウィスコンシン大学マディソン校において女性の身体教育活動が活発になり始めていた19世紀の終わりごろ、アメリカ全土においてダンスは身体教育として広く教えられており、高等教育においてもフランス人演劇教師フランソワ・デルサルト(Francois Delsarte)が考案した「美的体操(aesthetic gymnastics)」が広く行われるようになる。美的体操はその後ギルバート(Melvin Ballou Gilbert)により「美的ダンス(aesthetic dance)」として継承され、女性向けのダンスとしてアメリカ全土で教えられていた⁵。体育教師として知られるサージェント(Dudley Allen Sargent)がエセティック・カリセニクス(aesthetic calisthenics)をハーバード・スクールとサージェント・スクールで教え始めたのは1894年のことである⁶。このころにはヨーロッパ起源のフォークダンスやナショナル・ダンスも多くの教育機関で実施されていた⁷。一方で男性たちには「ジムナスティック・ダンシング(gymnastic dancing)」と呼ばれるシンプルかつ運動量の高いダンスが用意されていた。ダンスは男女ともに行われていたものの、その内容において差別化(ジェンダー化)されていたのである。

さて、アメリカでは19世紀末にイサドラ・ダンカン(Isadora Duncan)がモダンダンスを創始し、それまでの定型的な動きを基調としたバレエなどのダンスとは異なる自由な表現が模索されていたが、このモダンダンスに影響を受けた創造的なダンス⁸が教育に取り入れられた出発点を1913年、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ、スペイヤー・スクールのコルビーの実践に求める研究は多い⁹。同校は現在に至るまで250年以上にわたりアメリカの教員養成系大学で先導的な役割を果たしてきた。1900年代から1930年代にかけて、ジョン・デューイやウィリアム・キルパトリック(William H. Kilpatrick)も同校で教鞭をとっていた。

1901年にデューイの進歩主義教育に影響を受けたウッド(Thomas D. Wood)が同校の教授となると、彼は「ナチュラル・アクティビティーズ(natural activities)」と呼ばれる活動をカリキュラムの中に組み込んだ¹⁰。1927年に発行された*The New Physical Education: A program of naturalized activities for education toward citizenship*の中ではその内容が体系的にまとめられている。「ナチュラル・アクティビティーズ」では、教師の一方的な指導に従って、決まりきった運動を行うことは戒められ、心理学や生物学、社会学的な知識に基づき、個人の関心及び能力を調和的に発達させる全人教育が目指された。その活動の一領野として「ナチュラル・ダンシング(natural dancing)」というものも含まれており、コルビーはその理論的な面を開発した人物とし

て紹介されている¹¹。

1904年にはデューイがコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジの哲学科教授に就任する。デューイやキルパトリックはこれまでの教師からの一斉指導を批判的に見直し、子どもたちの生活に根差した実践的活動を基盤とする児童中心主義と呼ばれる教育を展開し、全米のみならず世界中の教育に影響を与えていく。知識の伝達ではなく、学生の体験的な学びのなかに積極的に教育的価値を見出す進歩主義教育は、アメリカの高等教育機関において創造的なダンス教育実践がその居場所を見つける重要な前提条件の一つになった¹²。

このようにデューイらが児童中心主義教育を展開し、ウッドがそれに影響を受けた身体教育実践を行っていた当時、コルビーはデューイが創設した数々の実験学校のうち、幼稚園のひとつであるスペイヤー・スクールで教鞭をとっていた。ここで彼女は子どもたちの自然な動きと自己表現とを結びつけた実践を開始する。そこに目を付けたウッドは、スペイヤー・スクールの閉校が決まると、創造的な実践を教員養成の場でも発揮してほしいとコルビーに要望した¹³。1918年、彼女は「ナチュラル・ダンシング (Natural Dancing)」と銘打った授業実践をティーチャーズ・カレッジで開始する。たしかに、何かを表現するために身体運動を取り入れるという視点は、当時としてはラディカルなものではあったが、コルビーの実践は動きそのものよりも、動きを通じて何かを表現することへと傾斜していたため、方法論的な発展という点には限界があったこともまた事実であった¹⁴。解剖学を修め、ティーチャーズ・カレッジの姉妹校であるバーナード・カレッジで教鞭をとっていたラーソンは、コルビーよりも運動そのものへの注視を掘り下げ、トルソーを効果的に使うことで身体の自然な動きを追及していった。「ナチュラル・リズムック・エクスプレッション (Natural Rhythmic Expression)」と名付けられた彼女の実践は、コルビーの実践と後のドゥブラーの実践とを橋渡しするものであった¹⁵。

以上のように、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで創造的なダンス教育実践が育まれる中、アメリカ中西部のウィスコンシン大学マディソン校ではダンスが高等教育制度のなかに専攻として初めて位置付けられることとなる。

ウィスコンシン大学マディソン校は、ウィスコンシン州が州となった直後の1849年に設立された。1862年に制定されたモリル法により、同校も連邦政府から付与された土地を得て農学などの分野が発展を遂げる。1874年に学長に就任したバスコム (John Bascom) は、個人が日々の倫理的な問題についての関心を高めることが必要であるとの信念のもとで経済学を教えていたが、彼の教えを受けた卒業生の中でものちに州知事となるラ・フォレット (Robert M. La Follette) と彼の任命を受けて学長に就任したヴ

アン・ハイス (Charles R. Van Hise) は政治と学術、それぞれの分野で広く人民に奉仕することを目指すようになる¹⁶。彼らの実践は「Wisconsin Idea」と呼ばれ、農学などの実用的な教育を市民に向けた公開講座として設置したものとして名高い、ウィスコンシン大学拡張部の活動などの形で具現化されていった¹⁷。以下に述べるようにウィスコンシン大学マディソン校におけるマーガレット・ドゥブラーのダンス教育実践は「Wisconsin Idea」をもじって「Wisconsin Dance Idea」と呼ばれ、限られた少数の人々の為ではなく、すべての人にとってダンスが果たしうる教育的役割を重んじるアマチュアリズムの視点に立った実践であった。

ウィスコンシン大学マディソン校身体教育部門に世界初となるダンス専攻を設立したマーガレット・ドゥブラーは、1910年にウィスコンシン大学マディソン校を卒業した。専攻は生物学、副専攻は哲学であった。同校で1912年に新設された女性身体教育プログラムのディレクターに就任したブランシェ・トリリング (Blanche Trilling) のもとでドゥブラーはアシスタントとして働くことになる¹⁸。このころには全米のほとんどの大学で女性身体教育部門が設立されていた¹⁹。それらの女性身体教育部門では体育施設の設置は進んでいたものの、女性が男性のように運動競技に打ち込む環境が十分でないとトリリングは考えていた。そこでトリリングは、女性身体教育部門を持つ全米20の大学に呼びかけ、1917年3月9日から11日に掛け、ウィスコンシン大学マディソン校で女性身体教育者の会合を主宰する²⁰。同会議のメンバーが中心となって The Athletic Conference of American College Women が設立され²¹、女性の運動競技に関する全米レベルの学会へと発展していった。トリリングは女性の運動競技には肯定的だったものの、男性のように大学間対抗で競技を行うことに対しては否定的であり、男性とは異なる身体教育のあり方を模索していた。

ドゥブラーが女性身体教育プログラムのアシスタントとして赴任したのは、同プログラムが女性身体教育分野の先導的存在として着目されていた時期であった。意外にも当初ドゥブラーはダンスにあまり関心がなく、バスケットボールやソフトボールのコーチとして活躍していた²²。1916年春、哲学の修士論文研究のため、ニューヨークにあるコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに向かうこととなったドゥブラーに、トリリングは女性の身体教育のためにダンスの状況を視察し、マディソンに帰ってきた暁にはそれを教えるように命じる。ドゥブラーは当時のことを次のように振り返っている。

トリリング先生は私を呼んでこういったわ。「マージ (筆者注: ドゥブラーの愛称)、ニューヨークにいる間にダンスを学んできて、マディソンに帰ったらそれを教えて欲しいのだけれど。」私はぞっとして言ったわ。「トリリング先生、ダンスを教えるバスケットボールを諦めるです

って？」涙が出てきて、「考えられません。ダンスについては何も知りませんもの」って。²³

バスケットボールをこよなく愛する反面、ダンスについての知識をほとんど持ち合わせていなかったドゥブラーであったが、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジで学び始めて以後、バレエのクラスを訪れたり、コルビーやラーソンの実践を視察したりと、そこで行われていた様々なダンスの実践を視察する。彼女が教えを受けていたジョン・デューイのゼミが終わるや否やドゥブラーは地下鉄に飛び乗り、バレエスタジオへと急いだ。「ダンスとは何か」「ダンスと身体教育との関係はどのようなものなのか。もしダンスが芸術であるとすれば、他の芸術とどのような関係にあるのだろうか」と、行く先々で問いかけながらの探究であった²⁴。当時のニューヨークでは演劇、音楽、ダンスなど、あらゆる芸術が変革の時を迎えており、大いにドゥブラーの興味を引きつけた。しかしながら、なかなか理想的なダンス教育の実践に出会えなかったドゥブラーは、トリリングに宛てた手紙の中で「教えられそうなものは何も見つけられません」と綴っている²⁵。バレエがドゥブラーの心を捉えなかった理由は、バレエ教育が技術の伝達に終始していたからであった。ドゥブラーは動きの模倣に教育的価値を見出すことができなかった。彼女はダルクローズのリトミックも視察しており、幾らかの理論の科学的根拠を見出しているが、それがもっぱら音楽のための動きに終始していると評している。そんな中、トリリングの勧めで訪れた音楽教師であるベントリーの創造的な実践に大きなヒントを得る。ベントリーは子どもたちに歌を教えることはせず、子どもたちは自由に自分の好きな歌を歌いながら床を転がったり歩き回ったりと身体を動かしていた。ベントリーは自分たちの身体の重さ＝重力を感じ、それを自覚した後に以前と感覚がどのように異なっているかを感じるよう子どもたちを促していた²⁶。

1917年、マディソンへと戻ったドゥブラーは既成作品やテクニックを教えるのではなく、学生たちの美的経験及び教育的経験へとつながるアプローチの開発を模索し始める。ドゥブラーはダンスを「身体運動を媒体とした自己表現」とし、身体を通じて思考や感情を表現するためには、自らの身体の高めることがまず重要であると考えた²⁷。そこでドゥブラーはベントリーに倣って学生たちを床に寝そべらせ、重力による制約を抑えた状態で転がる、這うなどの簡単な運動をさせることで身体の各部位がどのように連結しているのかに気づかせようとした²⁸。そこから歩く、跳ぶなどの基本的な空間移動へと発展させていくのだが、その際に目を瞑ったまま移動させたり、目隠しを用いたりすることで身体の中で何が起きているのかにより注意を向けさせた²⁹。学生に自身の身体の動きに対する感覚を高めさせると、いよいよそれぞれの学生に自己表現を促す段階へと入る。簡単なリズムのパターンを与え、学生たちに自由に動きを創

作させることで、「個々人の思考や感情の純粹な表現」を導こうとしたのである³⁰。

また、ドゥブラーは人間の運動とそれを行う人の内面との関係を心理学的に探求し、運動感覚 (kinesthetic sense) という概念を鍵としてそれを解き明かそうとした。ドゥブラーによればすべての運動はそれぞれに独特なリズムを内包しているが、そのリズムを私たちが受容できるのは運動感覚の働きによる³¹。このとき私たちの運動経験は、美的経験 (aesthetic experience) として受容され、ダンサー自身に喜びをもたらす³²。日常生活において、我々は無意識に運動を行っているが、身体に対する感受性を高め、意識的に運動をコントロールしてダンスへと昇華させるとき、個人の全人格的な表現となるとドゥブラーは考えた。

1921年、ドゥブラーは *A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing* を著す。同書の中でドゥブラーは身体の動きを科学的に分析するアプローチを明確にしており、体幹の動きから発せられる緊張と弛緩を中心としたキネセティックな感覚の獲得を自らのダンス教育理論の基礎に据えている。ここにおいて打ち出された彼女のスタンスはダンスのプロフェッショナルを養成するためではなく、むしろすべての人がダンスを通じた教育的な効果を楽しむためにダンス教育を実践することを強調するものであった³³。

このようなドゥブラーのダンス教育論は、学生一人ひとりをもつ経験を鍵として展開されていった。ドゥブラーは「感情的経験 (emotional experience)」「美的経験 (aesthetic experience)」「創造的芸術経験 (creative art experience)」といった種々の経験概念を使い分けて使用しているが、これらはデューイの美的経験論にも密接な関係をもつものである。次節ではこれらの経験概念をデューイと美的経験論を手掛かりに整理し、読み解いていくこととする。

第2節 ドゥブラーのダンス教育論にみる経験の諸概念

ドゥブラーはウィスコンシンに戻ってから、自らのダンス教育論を様々な著書にまとめているが、中でも1940年に出版された *Dance: A Creative Art Experience* はアメリカ国内のみならず世界中の多くのダンス教育者に読まれており、日本においても松本千代栄氏による邦訳『舞踊学原論：創造的芸術経験』が出版されている。

ドゥブラーは著書の中で厳密に脚注を付けている箇所が少ない。しかしながら *Dance: A Creative Art Experience* の初版には参考文献の一覧とともに、それぞれに文献についての寸評が書かれている。その中ではデューイの *Art as Experience* (邦訳：経験としての芸術) が取り上げられており、第7章「The natural history of form」と第8章「The organization of energies」、及び抽象化とリズムの議論に対して興味を示

している³⁴。また、コロンビア大学における修士論文研究の成果をドゥブラーは *The Dance and Its Place in Education* にまとめているが、その中で次のようにダンス教育の目的について述べている。

私たちの本当の目的は、子どもたちそして男女にダンスを手段として教えることである。すなわち、彼らに人生の哲学を教えることであり、その実践的な適用はダンスの中に見出しうるものなのである。³⁵

The Dance and Its Place in Education の内容はドゥブラーが後年出版した *Dance: A Creative Art Experience* と重なる部分も多いのだが、後者においてドゥブラーがダンス教育の目的について述べた部分では次のように文面が微妙に書き換えられている。

私たちの第一の関心は、子どもたちそして男女にダンスを手段として教えること、すなわちダンスを人生の哲学や体系に対して貢献する、一つの経験として教えることなのである（下線引用者）。³⁶

ここに登場する「一つの経験 (an experience)」とは、デューイの美的経験論の核となる概念である。*Art as Experience* のなかでデューイが明らかにしようとしたことの一つは、「美的なもの」が我々の経験からかけ離れたものではなく、それが「<一つの>経験」が備える様々な特性のうちの一つである、ということであった³⁷。私たちは強烈な印象を残す、始まりと終わりのある経験をした時に、それを「あれはひとつの経験だった」などと言って日常生活と区別する。「<一つの>経験 (an experience)」とはこのような自律性を持った一つの統一体 (a unity) である³⁸。重要なのはデューイによれば「<一つの>経験 (an experience)」が美的な (esthetic) 性質を持つということである。一つの統一体 (a unity) としての経験は、それが知的なものと実践的なものであろうと、美的な性質を持っており、そのなかでも特に美的な特性が強い経験が「美的経験 (esthetic experience)」と呼ばれる³⁹。

このようにデューイは美が超越的な実在として芸術作品などに備わるのではなく、人間と芸術作品などの対象との相互作用のなかで「美的なもの」が生み出されることを示そうとした。ドゥブラーもまた、美が芸術作品に備わっているとする考えを否定する。ドゥブラーはギャラリーに展示されている秀作のみを芸術であるとする考えに対し、そのような見方は芸術制作を人々の日常生活からかけ離れたものにしてしまうと述べる。そして優れた芸術は長年の研究や修練を積んだ専門家によって生み出され、完全に理解

されることは真実であるとしながらも、すべての人にとって芸術鑑賞のみならず芸術制作までもが可能であるとしている⁴⁰。なぜなら、芸術による快 (pleasure) や価値 (value) は芸術作品そのものではなく、鑑賞者がそれにどのように反応するかに存すると考えたからである。

絵画、舞踊、交響曲のような、芸術作品の真の快や価値は、われわれが実際に何を見、何を聞いたかということではなく、受容したもののすべてにわれわれがどのように反応するかというところにある。⁴¹

ドゥブラーはこのように述べ、芸術鑑賞の際には、鑑賞者が過去に経験したり想像したりしたことを芸術作品に関係付けるときに芸術の素晴らしさが伝わるとしている⁴²。デューイと同様、芸術作品そのものに備わる超越的な概念として美があるのではなく、それに対する我々の反応において「美的なもの」が顕在化すると考えたのである⁴³。

ここまで見てきたように芸術鑑賞における経験を問題にするときのデューイとドゥブラーの考え方は互いに似通っているが、芸術の制作活動についての二人の考え方は大きく異なっている。次に芸術制作に関する二人の考え方の異同について見ていこう。

デューイは芸術作品の制作を「人間と環境の条件やエネルギーとの相互作用から生まれる統合的経験の構築⁴⁴」であるとしている。ここで人間が持つものとしてデューイが注目しているのが「感情 (an emotion)」である。感情がなければ芸術は存在せず、それが直接的に現れても芸術とはならないとデューイは述べる⁴⁵。芸術制作の過程においては、物的素材だけでなく感情のような内的素材も徐々に変化していく。このような変化を経た感情を、デューイは「美的感情 (esthetic emotion)」と呼ぶ⁴⁶。デューイにとっての芸術制作の過程とは、感情などの内的素材が物的素材と相互作用しながら変容し、内的素材と物的素材それぞれの美的性質が高められていく過程である⁴⁷。

ドゥブラーもまた、芸術制作における感情の働きを重視していた。ドゥブラーによれば人間を芸術制作に向かわせるのは「他者をして自らが感じるように感じさせたいという切望、自らの感情に対し他者が反応するという事に備わる豊かさを経験したいという切望⁴⁸」である。言い換えると、感情の伝達欲求及び感情のコミュニケーションに内在する豊かさへの欲求が芸術制作の源泉であると捉えている。

注意しなければならないのは、ドゥブラーは芸術において感情がそのまま表現されると考えていたわけではないという点である。ドゥブラーによれば、芸術とは我々が望み描く理想を「実際に経験する機会を提供してくれる⁴⁹」ものであり、合わせて次のように述べている。

すべての芸術は一つである。すなわち、人間の感情的経験の表現であり、その表現は思考、心が知覚できるなんらかの媒体として意図的に与えられた形態によって変容させられている。⁵⁰

芸術表現の素材としてデューイが感情 (an emotion) という語を用いたのに対し、ドゥブラーは「感情的経験 (emotional experience)」という言葉を用いている。デューイにとって感情は経験に (美的な性質を含む) 質的なまとまりを付与する働きであって、「美的経験 (esthetic experience)」という概念は存在しても「感情的経験 (emotional experience)」という概念は存在しない。しかしながら、ドゥブラーにとっては感情を伴った特別な経験が芸術表現の出発点なのである。

十分に知覚されなかった経験が表現へと向かうことはほぼ、あるいはまったくないのであろう。印象付けられていないことが表現されることはない。適切に機能している心は常に印象を受け取り、それを統合し、洗練し、選択し、解放し、そして心の目的により適合するよう変容させるのである。⁵¹

ドゥブラーは経験が表現へと向かうためには、その経験が「十分に知覚され (sufficiently perceived)」なくてはならないと述べる。経験することすべてが芸術表現へと向かうのではない。十分に知覚されるためには、その経験は強く印象付けられていなくてはならない。ドゥブラーは「心 (mind)」が印象を「統合」「洗練」「選択」「変形」すると述べている⁵²。心は感情的経験を操作することによって、その印象を適切に変容させる。ドゥブラーが「感情的経験 (emotional experience)」という語を用いたのは、芸術制作の過程において、感情そのものが変化するというよりも、心の働きによって感情的経験が生じた時点からその経験の持つ意味が変化すると考えたからであろう。

さて、ドゥブラーは「美的経験 (aesthetic experience)」についても言及している。ドゥブラーの経験論において「美的経験」は「感情的経験」と近似した概念であるが、厳密には両者は区別して用いられていると考えられる。

ドゥブラーは「美しい炎」の例を通じて、炎がもたらす悲しみ (例えば家屋の消失) を考えるか、その美しさを考えるかによって、炎の持つ意味が変わってくると論じている⁵³。この事実から、美的なものが個人がそれを「経験する方法 (way of experiencing)」に備わる質であるとする。鑑賞者が芸術としてのダンス作品の中に美的なものを見出すときには「美しいという感じ (feelings of beauty)」を特定のダンスに投影しており、ダンス作品との相互作用を通して鑑賞者の美的感覚が満足させられるとき、鑑賞者はダ

ンスを通して美的経験に達することができる」とドゥブラーは結論づけている⁵⁴。

ここでいう美的経験 (aesthetic experience) とは何であろうか。感情的経験 (emotional experience) に近いものとして見なせるのであろうか。既にドゥブラーは芸術を感情的経験の表現としていることを指摘したが、ダンスにおける技術 (technique) について述べている箇所では「ダンサーが美的経験を創作の中に体現する (embody aesthetic experience in a composition) ⁵⁵」という言い回しを用いている。すなわち、ドゥブラーにとっては感情的経験も美的経験も、ともにダンサーがそれを用いて芸術制作を行う素材として捉えられていることがわかる。

しかしながら、彼女にとって美的経験と感情的経験は全く同じもの、というわけではなかったようである。その根拠を美的経験の要素についての考察に見いだすことができる。美的経験は知的な要素を含んではいるものの、一義的には「感じとる経験 (a feeling experience) ⁵⁶」であるという。知的な満足と感情的な満足をドゥブラーは区別して考えており、それらと美的経験との関係については次のように述べている。

感情的満足だけでなく知的満足も美的経験へと至るかもしれない。しかしながら、これら二つを織り交ぜることでより豊かで満足のゆく美的経験へと至るであろう。完全で満足度の高い美的経験はその両方を必要とするのである。⁵⁷

ここから美的経験には段階があるとドゥブラーは考えていたことがわかる。ドゥブラーの論では美的経験は感情的満足と結びつくことが多いものの、知的満足とも結びつくことによって、より豊穡な美的経験となるのである⁵⁸。ではこれらとドゥブラーの言う「芸術経験 (art experience)」とはどのような関係にあるのだろうか。

ドゥブラーはプロフェッショナリズムの視点からではなく、すべての人がダンスを学ぶことによって恩恵を受けることができるとのアマチュアリズムの視点から自身のダンス教育論を展開した⁵⁹。そのベースにはこれまで見てきたような「美的なもの (the esthetic)」についての捉え方がある。すなわち、美的なものが我々の日常からかけ離れたものではなく、我々と対象や出来事との相互作用で生み出される経験の質として捉えることができるとする捉え方である。美的なものが万人に開かれているのであれば、専門的なダンサーのみならず全ての人々がダンスを美的に経験することができる。ドゥブラーは述べる。

(専門的な) パフォーマンスとしてではなく教育的・創造的芸術経験としての舞踊を考えるにあたっては、学習者が現実において発見された美的価値を再体験する特殊な方法として舞踊

を知ることができるよう配慮するべきである。⁶⁰

「教育的・創造的芸術経験 (an educational creative art experience)」⁶¹としてのダンスは、学習者にとっては美的価値 (aesthetic value) を再体験 (re-experiencing)⁶²する機会となる。ダンスを創作し踊ること自体が、学習者にとっては新たな経験となる。このような経験は学習者が必ずしもプロフェッショナルなダンサーになることにはつながらないとしても、人格の完成 (a fulfillment of the personality) という教育の大きな目的に対して、大いに寄与できるものであるとドゥブラーは主張する⁶³。

さて、上述の引用部において、ドゥブラーは「芸術経験 (art experience)」と「美的経験 (aesthetic experience)」を明確に区別して用いている。芸術の制作・鑑賞について言うと、ドゥブラーにとって前者は芸術の制作活動に関する語、後者は芸術の鑑賞活動に関する語であり、両者の関係については次のように述べられている。

すべての美的経験が芸術経験へと発展するわけではないかもしれないが、美的経験なしではいかなる芸術経験も存在し得ない。美的経験は芸術作品の本質となる、熟考され方向付けられた経験の必要不可欠な予備条件である。いかなる経験も、快であれ不快であれ、美的経験になりえ、その価値はその表現の価値に存するのである。美的経験は創造的芸術活動によって、美の対象に変容させられるのである。⁶⁴

すなわちドゥブラーにとって「美的経験 (aesthetic experience)」は「芸術経験 (art experience)」の必要条件なのである。実はこの点に於いてドゥブラーのいう「美的経験」とデューイのいう「美的経験」の違いが明らかとなる。

デューイは英語の「芸術的 (artistic)」という語と「美的 (esthetic)」という語の二つを含意する語、すなわち制作と鑑賞の両過程を意味する語がないことを嘆く⁶⁵。デューイによれば、「芸術的」という語は一般に制作活動を表し、「美的」という語は鑑賞活動を表すが、意識的な経験はこれら二つの側面が互いに支えあって成り立っているという。すなわち、芸術作品の制作者は鑑賞者がどのように作品を鑑賞するかを意識しながら制作を行い、一方で芸術作品の鑑賞者は制作場面を想像しながら芸術作品の鑑賞を行うため、両者は相互排他的ではないとした⁶⁶。*Art as Experience*のなかでデューイが芸術制作を「芸術経験 (art experience)」などと表現している箇所はなく、両者を分離できないものとして論じようと試みている⁶⁷。

デューイは *Art as Experience* のなかで絵画や彫像、彫刻などを例に芸術を論じているが、ダンスについてはほとんど語っていない。しかしながら、ダンスはデューイが主

に想定していた他の芸術表現とは、区別して論じる必要がある。なぜなら絵画や彫像、彫刻などの芸術表現においては、多くの場合、芸術作品の鑑賞は制作の後に行われるのに対し、ダンスにおいては作品の上演と鑑賞が同じ時間・場所で行われるからである⁶⁸。また人間の身体の運動を媒体とするダンスは、ダンサー自身が過去の美的経験を踊る瞬間において美的価値を再経験すると同時に、鑑賞者に美的経験を引き起こすという同時性も存在する。このように考えると、芸術としてのダンスを語るにあたり、作品の制作と鑑賞を「美的経験」として同時に論じるためには、「誰にとっての経験か」を常に意識していなければ混乱をきたしてしまう。ドゥブラーが鑑賞を「美的経験」、制作を「芸術経験」として区別して論じた背景には、このようなダンスの持つ特殊性があるのではないだろうか。

*Dance: A Creative Art Experience*の中で、ドゥブラーはデューイが十分に論じなかった「芸術経験としてのダンス (dance as art experience)」に紙幅を割き、独自の論を展開している。ダンサーと鑑賞者が同居する場において、顕在化するのがリズムであり、両者間のコミュニケーションを考える上でリズムの考察は不可欠である⁶⁹。ドゥブラーのリズム概念は彼女がダンス（舞踊）の定義を試みた以下の箇所に見出される。

舞踊とは、美的に価値付けられた感情の状態のリズミ的な運動表現であり、その運動による象徴は、再体験の、表現の、伝達の、遂行の、そして形式を作り出すことの快と満足のために、意識的に設計されたものであるとすることができるかもしれない。⁷⁰

既に見てきたように、ドゥブラーの定義においては、ダンスにおいて表現されているのはダンサーの過去の美的経験であるが、ここではさらにその運動表現が「リズミ的な (rhythmic)」ものであることが指摘されている。ドゥブラーはリズムを「規定し、結びつける力 (regulating and binding force) ⁷¹」と端的に定義しており、リズムは「自己の身体的動作」や「自己を取り巻く環境における活動」にあまねく存在している⁷²。しかしながら、それを感じることができるのは我々がそれを実際に経験している時であると述べる⁷³。

リズムは筋肉の緊張の中に姿をあらわし、心は、運動感覚によって、この力に気づくようになる。運動はエネルギーの解放という意味を含んでおり、また運動は自然なタイミングの仕組みを備えた、構造的な機能の法則にしたがって発生するので、一つの経験としてのリズムは測定されたエネルギーと言えるかもしれない。⁷⁴

リズムが形を表すのは我々の筋肉の緊張 (tension) においてであり、我々は「運動感覚 (kinesthetic sense)」によってリズムを経験することができる。このようにダンスの鑑賞・創作を成り立たせるのに不可欠なリズムを、ドゥブラーは身体が備えた運動感覚 (kinesthetic sense) の働きに着目することによって捉えようとした。

また、ドゥブラーが「一つの経験としてのリズム (rhythm as an experience)」という表現を用いていることに注目したい。リズムが「一つの経験」であるということは、どのような意味であろうか。上述のように、我々がリズムを知覚するのは我々の運動感覚による。ドゥブラーは運動における美的経験の基礎は「高められた感受性と気づき (heightened sensitivity and awareness)⁷⁵」であると述べているが、我々が運動感覚によってリズムを鋭敏に捉えるとき、自身の運動や環境に存在するリズムを他とは切り分けられた経験として、すなわち一つの経験 (an experience) として捉えることが可能になるのである。

前述した通り、上演芸術としてのダンスに特徴的なのは、ダンサーの「芸術経験 (art experience)」が身体の運動として現れている際、同時にその表現が鑑賞者と相互作用をなして鑑賞者に「美的経験 (aesthetic experience)」を生起せしめるという点であった。その際、鑑賞者は自身の運動感覚の働きによってダンサーの身体に顕在化したリズムを捉えていると考えられる。それに加え、ダンサーの身体運動は高められた運動感覚によってダンサー自身によって知覚され、彼 (女) 自身の中にも新たな「美的経験 (aesthetic experience)」をもたらしていると考えられる。すなわちドゥブラーの経験論をもとにダンスを考察すると、ダンスの上演においては鑑賞者の美的経験に加え、ダンサーの芸術経験と美的経験が同時発生的に生起しているということになる。これらを媒介するのがダンサーの運動に表出するリズムであり、ダンサーも鑑賞者も運動感覚によってそれを捉えることができるとドゥブラーは考えたのである。

このようにドゥブラーにとってリズムはダンスを成り立たせるのに不可欠なものであり、ダンサーも鑑賞者も運動感覚によってそれを捉えるときに、それを経験できると考えられていた。また、ドゥブラーが論じた様々な要素の中でも、リズムだけを「一つの経験」として捉えられていることを鑑みると、その働きを特に重要視していたことがうかがえる。ドゥブラーが「一つの経験」という表現を用いているとき、デューイのいう「<一つの>経験 (an experience)」をどの程度意識していたかについては明確には述べられていない。「美的なもの (the esthetic)」を人間が対象や出来事と相互作用するなかで生起する「美的経験」の中に求めるなど、デューイの経験論と共通する部分を持ちながらも、ドゥブラーは身体の運動を媒体とした上演芸術であるというダンスのもつ特性に着目し、ダンスが人々のために何ができるかを模索するなかで、独自にその論

を展開したと評価できるのではないだろうか。

第3節 ドゥブラーの運動分析論

前節で見たようにドゥブラーは、デューイの美的経験論に影響を受けながらも、上演芸術としてのダンスに即した形で、自らの経験概念を発展させていった。ドゥブラーはまた、運動としてのダンスの特質に着目し、ダンスを運動科学の視点から分析しようと試みた。ドゥブラーによれば、運動の基本的な要因は①長さ、②力の強度、③範囲、④速さの4つから構成され、さらにそれぞれの運動は各個人の⑤感情、⑥態度、⑦生理学的または解剖学的構造によって決定されるとする(図 3-1 参照)。

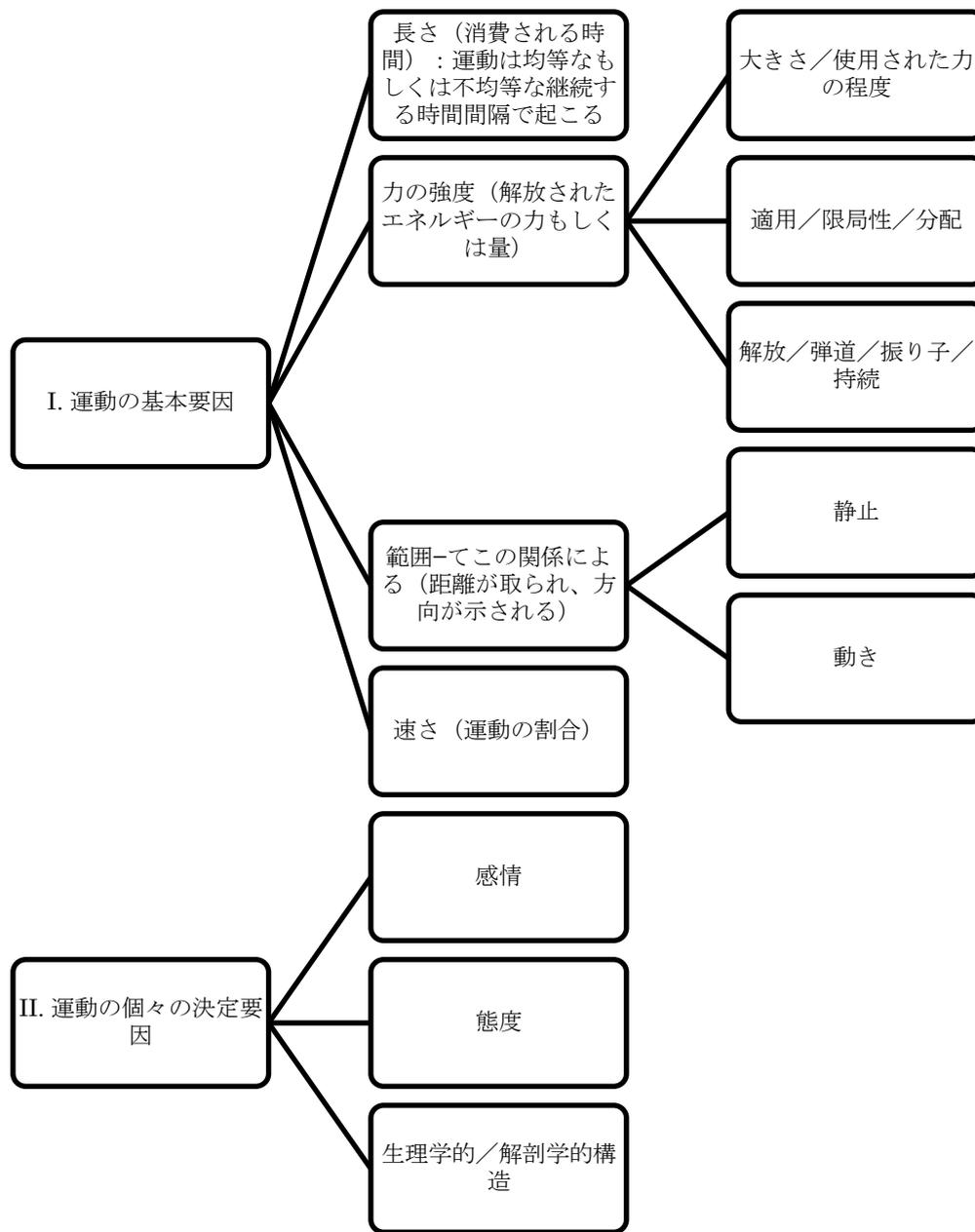


図 3-1 運動とダンス研究のためのアウトライン (H'Doubler, M. (1953). Outline for study of movement and Dance. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.より引用)

「I. 運動の基本要因」で示されたそれぞれの要素に運動を分解することで、私たちは運動を何かそれ以外のものと関連づけるのではなく、それ自身として理解することができるようになる」と述べる。それに対して「II. 運動の個々の決定要因」は、運動の基本要因をどのように利用するのかを決定づける、ダンサー一人ひとりの個人的な要因である。ドゥブラーによれば、ダンス運動は時間・空間を占める運動としてのみ理解さ

れるのでもなければ、それぞれの要素を知的に理解することによってのみ成立するわけでもない。芸術形態としてのダンスは、生命やダンサー自身の想像的あるいは創造的な力が運動に表現されたものとして包括的に理解されるべきであるというのが、ドゥブラーの立場であった。

このようなダンス教育論を、ドゥブラーは誰に学びながら構築していったのだろうか。前述したようにドゥブラーは修士論文研究のためにニューヨークのコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジを訪れ、デューイの教えを受けていた。また、モダンダンスの草創期でもあり、創造的なダンス教育がアメリカに花開きつつあった時代にあってドゥブラー自身も多くの人々と交流を持っていたが、ダンス教育の先達であるコルビーや、イサドラ・ダンカン、ルドルフ・フォン・ラバン (Rudolf Von Laban)、マリー・ヴィグマン (Mary Wigman) といったモダンダンスの先駆者たちの影響を否定しており、逆に自らのアプローチ開発に影響を与えた人物としてラーソン、トリリング、ベントリー、さらにルームメイトであったジョンソン (Gertrude Johnson)、生理学者のヘレブランド (Frances Hellebrandt) といった人々をあげている⁷⁶。

ドゥブラーの実践が学生たちにとっていかに魅力的であったかを示す一つのエピソードがある。ある日、ドゥブラーは一人の英語教授に呼び止められ「マージ、いったい君は学生に何を教えているんだい？」と話しかけられた。英語教授が言うには、学生たちの文章がダンスについてのものばかりになっているというのである。学生たちのダンスに対する情熱はダンスの授業内にとどまらず、他の授業においてもダンスについて白熱した議論を交わしていた⁷⁷。

ドゥブラーの実践は徐々に注目を集めるようになり、ドゥブラーのもとで研鑽を積んだ卒業生たちもそれぞれの場所で「ドゥブラー流ダンス」を教えるようになる⁷⁸。また、ドゥブラーは学生によるダンス作品の創作・上演を積極的に支援し、1918年には「オーケシス (Orchesis)⁷⁹」と呼ばれる学生のパフォーマンス・グループを組織している。オーケシスはドゥブラーに率いられて全米各地でダンス作品を上演し、それに触発を受けて他大学においても学生たちの手で次々とオーケシスが組織されていった。しかしながら、「ダンスの学校」と呼ばれることを好ましく思わない学長からは学外での出張パフォーマンスを自粛するよう勧告されることもあった。1910年代後半は未だモダンダンスの勃興期であり、ダンスは単なるエンターテイメントにすぎないという見方や、男女の交流を促進するという観点から好ましくないとする保守的な見方などが入り混じった時代であった。いうなれば、ドゥブラーは教育的な価値を持ったものとして自らのダンス教育論を練り上げるという労苦に加え、このようなダンスに対する偏った見方にも対処する必要があったのである。とはいえ、オーケシスのパフォーマンスは概して好

評であり、ドゥブラーはオーケシスの公演が行われるたびに学問分野を問わず同僚であるマディソン校の教員を招待し、着実に活動に対する理解を広げていった⁸⁰。

第4節 ダンス専攻の設置とカリキュラム

ウィスコンシン大学マディソン校でのドゥブラーの実践が積み重なり、ダンスの授業を履修する学生が増えると、ダンスを教えることのできる教員養成の依頼が出始める。1919年度から1922年度にかけて、ドゥブラーのもとでダンスを学んだ第一世代ともいべき卒業生が誕生するが、彼女たちの中にはワシントン大学やミシガン州立ノーマル・スクールなどの高等教育機関でダンスを教えるものもいた⁸¹。ドゥブラー自身も、自らの薫陶した学生たちはダンスを教えるに足る熱情と技術を持ち合わせていると自負していた⁸²。このような状況を受けて、1926年までには身体教育部門にダンス専攻を設置すべく、部門長や学長との折衝、カリキュラムの作成に取り掛かりはじめる。トリリングとともにダンス専攻の設置を計画していたドゥブラーは「たとえ最初の年にダンス専攻の設置が却下されようとも、2年目、3年目となれば容認されるだろう」と考え、ダンス専攻のコース・オブ・スタディ案を作成し、身体教育部門に提出する。この案は承認され、1926年6月8日には身体教育部門から文理学カレッジ（College of Letters and Science）にダンス専攻の設置が推薦されている⁸³。そこで提出されたダンス専攻の概要を見てみると、卒業単位は124単位とされ、コースを修了した学生は学士（理学—身体教育）（B. S. in Physical Education）を取得するものとされている。一般科目として音楽や美術史が課されているほか、専攻必修科目としてリズム形態と分析、ダンス創作、ダンスの哲学などの科目が課されていた。1926年6月14日の文理学カレッジの特別教授会では、ダンス専攻の推薦の件が議題に挙がったが、身体教育部門の教員が参加していなかったため、審議は次回の教授会に持ち越しとなった⁸⁴。夏季休業明けに再び議論が再開され、1926年10月11日には教育学部⁸⁵の教授会で女性身体教育プログラムのダンス専攻の設置が議論、承認されるが、そこでは身体教育専攻の学生の履修科目とダンス専攻の学生の履修科目が比較されている。

表 3-1 文理学カレッジに提出された 1926 年度の女性身体教育プログラムの一般身体教育専攻とダンス専攻の履修科目対照表

	科目（一般身体教育専攻）	単位数	科目（ダンス専攻）	単位数
一般科目	英語	6	英語	10-12
	言語学	8-14	言語学	8-14
	一般科学（化学、動物学、物理学）	19	一般科学（生物学もしくは化学）	10
	特別化学（運動生理学、物理学、化学、解剖学、衛生学、診断）	24	特別科学（運動生理学、解剖学）	10
	歴史学もしくは数学	6-8	歴史学もしくは数学 ⁸⁶	6-8
	心理学 ¹⁸⁷	3	心理学 1	3
	教育（11 もしくは 41 と 90） ⁸⁸	5	教育（11 もしくは 41 と 90）	5
			哲学	9
			スピーチ	10-14
			音楽	5-10
			美術史	6
	小計	71-79	小計	82-101
特別科目	デパートメント指定科目	28	デパートメント指定科目	23
選択科目	一般選択科目	14-22	一般選択科目	0-13
	特別選択科目（デパートメント指定）	0-3	特別選択科目（デパートメント指定）	0-6

出典：University of Wisconsin Department of Physical Education Women's Division(1926).L&S Document 34—1926-27. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-3.

表 3-1 に見られるように、ダンス専攻の履修科目は一般身体教育専攻のそれと比べてとき以下のような特徴がある。まず英語、哲学、スピーチ、音楽、美術史といった科目については一般身体教育専攻よりもダンス専攻の方が取得必要単位数が多く設定されていることがわかる。逆に、科学関連科目（化学、動物学、生物学、物理学、運動生理学、解剖学、衛生学等）についてみると、一般身体教育専攻に比してダンス専攻の方が取得必要単位数が 23 単位も少ない。ここにはこれまで見てきたようなドゥブラーのダンス教育観が反映されているといえよう。ドゥブラーは決して運動生理学や解剖学を軽視していたわけではない。学生を床に寝そべらせ、重力の制約から解放した状態で人体

の構造や関節の可動範囲を探求させたり、ダンスを身体の運動として分析しようと独自の視点を用いたりしたのは先に見た通りである。また、ドゥブラーの授業ではしばしば骨格模型が用いられ、人間の身体構造についてのレクチャーがなされていたし⁸⁹、感覚器官や神経系についても深い理解を示していた。

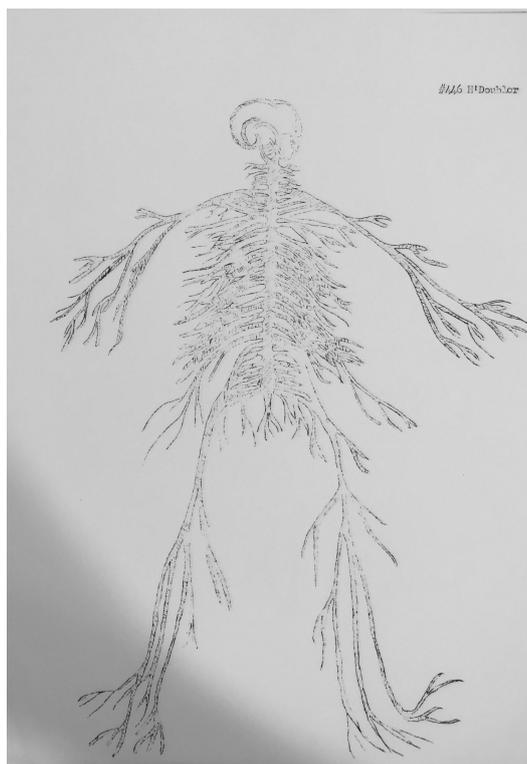


図 3-2 ドゥブラーが授業で用いていたと考えられる人体図 (The University of Wisconsin-Madison. (date unknown). Muscle Spindle-Matthews. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.より引用)

しかし、ドゥブラーはダンスを単なる身体の運動以上のものとして考えようとしていた。ダンスにはダンサーの想像的／創造的な力が現れているというのがドゥブラーの考え方であった。そのような力を高めるためには科学関連科目や実技科目で運動に関する専門的な知識や技能を身につけるだけでは十分ではなく、人文学的な科目の学習を通して幅広い教養・芸術的素養を育成することが不可欠であると考えていた⁹⁰。

教育学部で承認されたダンス専攻の設置案は文理学院に提出され、1926年10月18日には文理学院の教授会で審議される。教授会ではトリリングからダンス専攻の概要とともに、一般身体教育専攻と比較した際のカリキュラムの特徴について説明がなされた。教授の一人からは、ダンス専攻設置の趣旨だけを承認し、詳細について

は文理学カレッジ長とダンス専攻の責任者とで後日詰めることが提案されたが、セレリー文理学カレッジ長の働きかけでこの提案は却下され、提出されたカリキュラム案にコース番号を付け加えるという条件で、この案は承認された⁹¹。こうして1926年10月、ウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育プログラムに全米初となるダンス専攻の誕生が決定する。学生たちは翌1927年の春学期から受け入れられることとなった⁹²。

表 3-2 1926-27 年度のウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育プログラムダンス専攻の学生の授業履修例

第一学年			第二学年		
学期	科目名	単位数	学期	科目名	単位数
1	英語 1a 第一学年作文	3	1	心理学 1 心理学入門	3
1	外国語	4	1	生理学 1 人体生理学	4
1	生物学もしくは化学	5	1	スピーチ 1 スピーチの基本	3
1	歴史もしくは数学	3-4	1	英語 33 もしくは 30 文学	2-3
1	身体教育 20 一般技術	0	1	身体教育 60 リズムの形態及び分析	1
	小計	15-16	1	選択	2-3
			1	身体教育 20 一般技術	0
				小計	15-16
2	英語 1b 第一学年作文	3	2	身体教育 120 人体解剖学	6
2	外国語	4	2	スピーチ 2 スピーチの基本	3
2	生物学もしくは化学	5	2	英語 33 もしくは 30 文学	2-3
2	歴史もしくは数学	3-4	2	身体教育 49 フォークダンス	1
2	身体教育 20 一般技術	0	2	選択	3-4
	小計	15-16	2	身体教育 20 一般技術	0
				小計	15-16
第三学年			第四学年		
学期	科目名	単位数	学期	科目名	単位数
1	教育 11 精神の発達もしくは教育 41 教育心理学	3	1	音楽 65 鑑賞	1
1	美術史	3	1	音楽 67 バジエントリ	3

1	身体教育 56 運動感覚学	3	1	身体教育 146 ダンスの理論	1-3
1	哲学	3	1	身体教育 90 教育と適応	3
1	スピーチ 16 ドラマティック表現	2	1	教育 90 指導技術	2
1	選択	2	1	論文	2
1	身体教育 20 一般技術	0	1	哲学	3
	小計	16	1	身体教育 20 一般技術	0
				小計	14-16
2	美術史	3	2	音楽 65 鑑賞	1
2	スピーチ 16 ドラマティック表現	2	2	哲学	3
2	スピーチ 19 ドラマティック制作	3	2	身体教育 165 ダンス創作	2
2	哲学 25 人間と自然との関係	3	2	論文	2
2	選択	5	2	選択	8
2	身体教育 20 一般技術	0	2	身体教育 20 一般技術	0
	小計	16		小計	16

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1927a). *op. cit.*。なお科目名の横の数字は授業番号。

女性身体教育プログラムの1926-27年度の便覧を参照すると、ダンス専攻の学生が履修していた授業の組み合わせの一例を知ることができる。女性身体教育プログラムで卒業要件となる取得単位数は身体教育デパートメント、教育学部、文理学カレッジの教授会で議論された通り、4年間で124単位である。表3-2を見るとわかるように、多くの授業がスピーチや哲学などの一般教育科目であり、身体教育の専門科目は一学年あたり1-3科目と少ない。ウィスコンシン大学マディソン校は州立の4年制研究大学であり、アメリカの多くの研究大学がそうであるように学部レベルでの一般教育に力を入れていた。その傾向はダンス専攻が設置された1920年代から既に明らかであった。また、ダンス教員の養成を目指す専攻の目的を反映して、教育心理学や指導技術の科目の履修も求められていたことがわかる。当時、教員を志す学生は、ノーマル・スクールのみならずウィスコンシン大学が提供するコースの中で、州によって認定されたものを卒業することで、州教育長から免許状を付与されることとなっていた。女性身体教育プログラムも州による認定を受けており、卒業生はウィスコンシン州内の公立学校で教壇に立つことが可能であった⁹³。履修科目の中に音楽関連の科目が多いことも特徴的である。一般身体教育専攻の学生が履修していた授業には、これらの音楽関連の科目は見られない。

ドゥブラーのダンス教育論ではダンスと音楽との関係や、身体に内在するリズムが非常に重要視されており、ダンス専攻のカリキュラムにもその点が反映されていると言える。

1927年に発行された身体教育デパートメントの同窓生向けの会報の中では、新設されたダンス専攻の授業の内容が説明されている。「リズムの形態と分析」では、様々な自然な身体のリズムや、それらのリズムと基礎的な活動との関係を研究・分析し、最終的には多様な音楽とダンスとの関係の究明へと学生を向かわせると謳われている。また、「ダンス創作」の授業ではリズム、調などの音楽的要素や、歩行、走行、スキップなどの基礎的な動きを組み合わせ、最終的には適切なダンスへと昇華させていくとされている。「ダンスの哲学」では自由な身体のコントロールとバランス、自然でリズムカルな運動を通じた思考と感情の表現などの主題を考察し、さらには芸術、心理学、教育を下支えする原理について議論するとされている。これら授業科目は全てドゥブラー自身が担当した⁹⁴。

このようにドゥブラーが構想したダンス専攻の履修科目群を検討してみると、ドゥブラーがダンスのもつ特徴を考慮しながら、身体教育の枠に縛られることなく比較的自由にカリキュラムを構築していたことがわかる。ダンス専攻は女性身体教育プログラムの一部であり、ウィスコンシン州によって認定された教員養成プログラムであったことは既に見てきたが、ウィスコンシン大学マディソン校の各教員養成プログラムは一般教育科目と「心理学 1 心理学入門」や「教育 41 教育心理学」などの専門必修科目（15単位分）を除いては、柔軟にカリキュラムを組むことが可能であった。

また、ダンス専攻の設置に関する一連の議論をみると、ダンスを独立した学問領域として扱おうとする動き、すなわちデパートメント設置の議論は行われていなかったことが指摘できる。あくまでも女性身体教育プログラムの下位領域として、新しい内容を付加するという形で専攻の設置は構想されていた。同校のダンス専攻の設立は高等教育機関における世界で初めての試みであったが、カリキュラムの構想や専攻の独自科目の担当はドゥブラーが一手に担っており、教職員の層の厚さと言う観点から見るとデパートメントとしての独立を議論することはあまりにも時期尚早であった。また、美術史や音楽などの一般教育科目を重視しながらも、ダンス専攻の学生が履修する科目群は既存の一般身体教育専攻と重複している部分も多く、あくまでもそのカリキュラムは上位組織である身体教育デパートメントに上手く接合するように構想されていた。その背景には、同校の女性身体教育プログラムがウィスコンシン州内外の公立学校および高等教育機関でダンス教育を担う人材の輩出において先導的な役割を果たしていたことが挙げられる。

表 3-3 1925年度から1935年度までウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育デパートメントの卒業生の進路

卒業年度	25-26	26-27	27-28	28-29	29-30	30-31	31-32	32-33	33-34	34-35	35-36
カレッジ、大学、ノーマル・スクール	59	73	81	90	99	115	122	125	130	139	144
公立学校（初等、高等、職業学校）	34	38	39	52	61	63	73	68	78	91	93
私立学校（初等、中等、ダンススタジオ含む）	13	6	6	5	13	12	12	28	15	31	22
理学療法士、病院勤務（薬剤師含む）	4	2	7	9	14	19	28	31	34	45	49
身体教育以外の教育職	0	0	0	3	3	2	7	8	5	6	7
社会レクリエーション・サービス	9	16	13	15	12	19	18	19	25	27	24
ビジネス	0	0	0	3	3	5	8	6	9	6	5
大学院進学、旅行	6	10	7	15	10	16	20	19	14	7	11
結婚、無職	37	49	70	81	99	120	124	130	157	180	190
教職以外	3	2	0	12	19	11	19	34	24	24	23
報告なし	24	16	13	0	0	0	2	1	10	6	7
死亡	0	0	1	1	2	2	2	2	4	4	5
計	189	212	237	286	335	284	436	471	505	566	580

出典：Author and date unknown. Classification of types of positions held by graduates of the Department of Physical Education for Women, University of Wisconsin, over an eleven year period. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.

1997/001.

表 3-3 には 1925 年度から 1935 年度までのウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育部門の卒業生の進路状況を示している。年度によってばらつきがあるものの、結婚に伴い職を離れたものを除くと、卒業生の進路のうち大多数はカレッジ、大学、ノーマル・スクールといった高等教育機関であったことがわかる。それに次いで公立学校で教鞭をとるものも多い。ウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育プログラムは 1912 年の設立以来、1930 年代に至るまで多くの女性身体教育者を育成してきたことで評判を集めていたが⁹⁵、ダンス専攻の設立以後、初等中等教育機関のみならず、高等教育機関においてダンスを教える教員も数多く輩出してきた。ダンス専攻の最初の卒業生の中には、マイアミ大学やオハイオ州立大学でダンスの教鞭をとるものもいた⁹⁶。その後 1938 年までに輩出された卒業生のうち、13%にあたる 44 名が大学で教鞭をとり、その分布も 23 の州にまたがっていた⁹⁷。ダンス専攻で学んだ学生は、ドゥブラーが醸成した哲学や方法論を通じて専門性を大いに高め、全米でダンス教育の興隆に寄与していったのである。

1931 年にウィスコンシン州教育省によって発行された *A Manual of Physical Education for the Public Schools of Wisconsin* では、「リズムカル・アクティビティズ (rhythmical activities)」の項目が追加されており、たとえば第一学年では「大きく、優しく手を叩く」「a. 歩く b. 走る c. ギャロップ d. スキップ e. スライド f. ジャンプのビートを区別し反応する」などの達成目標が掲げられている⁹⁸。先に指摘したように、ドゥブラーのダンス教育論の特徴は運動感覚の獲得とリズムの重視にあるのだが、このころまでに出版されていたドゥブラーの著書である *A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing* (1921) や *Dance and Its Place in Education* (1925) をひも解くとこれに非常に似通った箇所が確認される⁹⁹。また、*A Manual of Physical Education for the Public Schools of Wisconsin* の謝辞の中ではドゥブラーの直接の上司に当たり、当時ウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育部門の部門長であったトリリングの名前や同校の卒業生の名前が多く記されている。これらの資料や先に言及したドゥブラーによる授業の内容を考慮すると、ドゥブラー自身の名前はここには記されていないものの、彼女の開発した実践がウィスコンシン州の公立学校におけるダンス教育実践にも多かれ少なかれ影響を与えていたと見ることはできるのではないだろうか。

以上、ダンス専攻設立期にウィスコンシン大学マディソン校においてダンスがどのように取り入れられ、カリキュラムの中に位置付けられたのかについて見てきた。ドゥブ

ラーの構築したダンス専攻のカリキュラムは運動生理学や解剖学など、身体や身体の運動に関する科学的な知識・技能の習得を可能にする科目群のほか、音楽や美術、歴史などの人文系科目群も多く含むものであった。こうした科目構成には、ドゥブラーのダンス教育観が反映されており、身体教育的要素と芸術的要素を併せ持つダンスの特色を活かすものであったといえる。世界初となるダンス専攻を設立するにあたりどのようにカリキュラムを構築するかは、ダンスを学問としてどのように形作っていくのかという課題にもつながる。ドゥブラーがウィスコンシン大学マディソン校にダンス専攻を設立して以後、他の大学にもダンス専攻が次々と設立されていった。また、1960年代以後は芸術系の独立したダンス・デパートメントも登場し始め、ダンスは一つの学問領域としてのアイデンティティを高めていく。1960年代に構想されたダンス専攻のカリキュラムではよりダンス・テクニックが重視され、実践的なトレーニングが求められるようになるが¹⁰⁰、それら後続のダンス専攻やダンス・デパートメントに比して、ドゥブラーが構想したカリキュラムは、ダンスのもつ学際性を活かしながら、技術や理論の基礎を広く学ぶことを可能にする科目構成であったと言える。学問としてのダンスの歴史を考えたとき、彼女の構築したカリキュラムは、ダンスの技術的・理論的基盤を構成する要素を包括的に捉え、かつ初めて具体化したものとして評価することができるのではないだろうか。

第5節 ドゥブラーの引退とダンス・プログラムの「芸術化」

前節に見てきたように、ドゥブラーのリーダーシップのもとで設立されたダンス専攻の目的は、公立学校および高等教育機関においてダンスを教える教員の養成におかれており、その根本となる哲学はダンスが全人的な発達に寄与するべきとするドゥブラー流のアマチュアリズムであった。しかしながら、その後ルイズ・クロッパー (Louise Kloepper) を教員として迎え、ドゥブラーが教員を退くと、ダンス・プログラムは次第に質的な変容を遂げていく。

クロッパーがウィスコンシン大学マディソン校にやってきたのは、1942年のことであった。プロのダンサーとしてのキャリアを持っていたクロッパーだったが、将来のことを考えて大学で学び、大学で教鞭を取りたいと考えていた。クロッパーがウィスコンシン大学マディソン校で学びたい旨を伝えるレターを受け取ったドゥブラーは、クロッパーに速やかに同校を訪れるよう促した¹⁰¹。もともと学生としてダンス・プログラムで学ぶことを希望していたクロッパーだったが、既にモダンダンスの経験が豊富であり、1943年からティーチング・アシスタントとして働き始め、モダンダンスのクラスを担当するようになる。クロッパーが働き始めたころ、ダンスを教える教員はドゥブラーと

彼女のアシスタントしかおらず、クロッパーの経験と技術は歓迎された¹⁰²。「ここで(学生として) 学ぶはずのことを教えることになった」ことに対して、クロッパーのみならず教育学部長にも戸惑いがあったという¹⁰³。

ドゥブラーは動きの模倣を嫌い、当時開発されつつあった種々のモダンダンスのテクニックを彼女の教育実践に取り入れることはなかった。そんな彼女がなぜプロのダンス・カンパニーで活躍していたクロッパーを教員として迎え入れたのかについては、些か疑問が残る。ドゥブラーのもとで学び、のちにユタ大学で教鞭をとったエリザベス・ヘイズは「ハンヤ・ホルム舞踊団からやってきたルイーズは、アプローチにおいてドゥブラーと似通っていたが、よりテクニカルでよく組織化されたアプローチを用いていた」とクロッパーについて語っている¹⁰⁴。また Hagood と Llyod は、概念的かつ即興的なマリー・ヴィグマンの方法論と本稿でもこれまでに確認してきたドゥブラーの方法論は似通っており、そのことがクロッパーのウィスコンシンへの適応を可能にしたと考察している¹⁰⁵。たしかに、クロッパー自身が後年のインタビューでドゥブラーの方法論とヴィグマンの方法論が「時間と空間とエネルギー、すなわち動きの質に関連している点」が似通っていたと語っていることも合わせて考えると、彼らの考察も首肯できる¹⁰⁶。プロのダンサーとしての訓練を受け、自らが探究するものに対して別角度からアプローチしてきたクロッパーのことを、ドゥブラーも一目置いていたのであろう。

さて、クロッパーが教鞭を取り始めた頃の 1946-47 年度のダンス専攻のカリキュラムを見ると、ダンス専攻が開始した 1926-27 年度からは幾つかの点で違いが看取できる。

表 3-4 1946-47 年度のウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育デパートメントダンス専攻の学生の授業履修例

第一学年			第二学年		
学期	科目名	単位数	学期	科目名	単位数
1	英語 1a 第一学年作文	3	1	心理学 1	4
1	歴史	3	1	解剖学 36 人体解剖学	6
1	スピーチ 5 ボイス・トレーニング	2	1	音楽 1a	2
1	身体教育 35a ダンス実践	1	1	身体教育 36a ダンス実践と技術	1-2
1	物理学 65 物理学一般	4	1	身体教育 40a グループダンス	1
1	身体教育 30	1	1	身体教育 60 リズム形態と分析	2
1	選択	0-2		小計	16

	小計	14-16	2	身体教育 56 運動生理学	3
2	美術教育	2	2	スピーチ	2
2	英語 1b 第一学年作文	3	2	英語 30b, 32b, 33b, もしくは 40b	3
2	歴史	3	2	身体教育 160 ダンス創作 (初級)	3
2	動物学 1 動物生物学	5	2	身体教育 36b ダンス実践と技術	2
2	身体教育 35b ダンス実践	2	2	身体教育 31b 身体教育理論、実践、技術	1
	身体教育 30b 身体教育実践	1		小計	16
	小計	16			
				第二学年終了後 4 週間のスポーツセッション	4
	サマー・セッション			哲学	2
				心理学	2
				美術史	2
				スピーチ	2
				小計	8
	第三学年			第四学年	
学期	科目名	単位数	学期	科目名	単位数
1	美術史 107	2	1	教育 69	3
1	生理学 1	4	1	スピーチ	2
1	教育 73 子どもの本質とニーズ	3	1	身体教育 61 ダンスのまとめ	2
1	英語	3	1	身体教育 165 ダンス創作 (発展)	3
1	身体教育 133 ダンスの伴奏	2-3	1	身体教育 168 身体教育の管理	2
1	身体教育 37a ダンス実践と技術	2	1	身体教育 181 論文	2
	小計	15-17	1	身体教育 38a ダンス実践と技術	2
				小計	16
2	教育 75 学習の本質と指導	4	2	教育 69	3
2	哲学	3	2	美術史	2
2	身体教育 146 ダンスの理論と哲学	3	2	教育 74 学校と社会	3
2	身体教育 176 セラピー体操	3	2	健康教育	2-3
2	身体教育 40b 子どものためのリズム	1	2	身体教育 181	2

	ム				
2	身体教育 37b ダンス実践と技術	2	2	選択	0-2
	小計	16		身体教育 38b ダンス実践と技術	2
				小計	15-17

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1947). Bulletin of the University of Wisconsin-Madison: General Announcement of Courses 1946-48. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1. なお科目名の横の数字は授業番号。

卒業に必要な総単位数は 1926 年度と同じ 124 単位で変わりはない。しかしながら、科目内容や割合は、1926 年度のカリキュラムとは大きく異なっている。ダンス専攻の目的は、ダンスの技術だけではなく、心理学、芸術、教育などの専門知識を備えた包括的な視点からダンスの指導を行うことのできる教員の養成におかれていた。この目的を反映し、哲学やスピーチなどの一般教育科目も確保されているものの、これらの一般教育科目の単位数は 1926 年度のカリキュラムと比べて減少しており、その代わりにダンスに関わる単位を 22-28 単位履修することとされた。専門性の高い「よく準備が整ったダンス教員 (well-prepared teachers of dance)」を育てようとする意図が読み取れる。ダンスに関わる科目のほとんどが実技演習を伴うことから、1 セメスターあたりの学生の負担を軽減するべく、4 年間 2 セメスターの授業履修に加えて、サマー・セッションでの単位履修が推奨された。各科目の担当者を見てみると、「リズムの形態と分析 (Rhythmic Form and Analysis)」や「ダンスの理論と哲学 (Theory and Philosophy of Dance)」といった理論を重視する科目をドゥブラーが担当したのに対し、クロッパーは「ダンス創作初級／発展 (Elementary / Advanced Dance Composition)」や「コンテンポラリーダンス (Contemporary Dance)」などの実技系の科目を担当していた。アマチュアリズムの視点から概念的なアプローチを重視するドゥブラーと、ダンス・カンパニーで豊富な実技経験を積んだクロッパーは、ダンス専攻の中で意外にも互いの強みを活かし共存していた。

このころまでにウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムからは、多くの高校教員や大学教員が誕生していた。1950 年の学内誌 *U. W. News* では全米の高校やカレッジ、大学からダンス専攻の卒業生を教員として迎えたいとの問い合わせが殺到しているものの、卒業生に対して教員の需要が多すぎるため、やむなく断りを入れざるを得ない状況が報告されている。クロッパーは、ダンス専攻の卒業生が高校、カレッジ、大学でダンスを教えることができるだけでなく、ハンヤ・ホルムの舞踊団に加わったロ

ビン・グレゴリー (Robin Gregory) のようにプロの舞踊団に「ウィスコンシンの息吹」を吹き込むことができる」と語っており、教員養成だけでなくダンサーの養成にも自信と手応えを感じていたことが窺える¹⁰⁷。また、1951年の学内誌 *U. W. News* はダンス専攻の卒業生たちが全米各地の学校に赴任したことを伝えており、その就職先もウィスコンシン州内を始め、ニューヨーク州、イリノイ州、オクラホマ州、ユタ州など多くの州に分布している。中でもイリノイ州ウィネトカのニュー・トライヤー高校は、ダンス専攻が設立されて以来、「ウィスコンシン育ちのダンス専攻卒業生 (Wisconsin-trained dance majors)」を採用してきたと伝えられている。卒業生が当時得てきた高い評価を示していると言えよう。「(ダンス専攻の) 卒業生たちは高校や大学で『Wisconsin Idea in dance』(筆者注：原文ママ) を実現するよう求められている」とのドゥブラーのコメントも紹介されているが、彼女自身が自らの実践に確かな手応えを感じていたのであろう¹⁰⁸。また、ウィスコンシン州教育省が行った調査によると、ウィスコンシン州内の高校生にとって、同校の女性身体教育部門の目的は中等教育機関における身体教育教員養成ではなく、高等教育機関におけるダンス教員の養成と捉えられており、高校の身体教育教員を目指す生徒の進路選択肢に入っていなかったことが報告されている¹⁰⁹。女性身体教育部門の中でもダンス専攻はアメリカを代表するダンス・プログラムとして注目を集めていた。

さて、教養科目の減少と、大学卒業後、社会において即時性のある知識を提供する専門科目の重視はダンス専攻に限らず、この時期の大学カリキュラム全般に見られる傾向であった。その大きな要因として挙げられるのが復員兵援護法 (G.I.ビル) の制定である。本法は主に第二次世界大戦によって就学機会を奪われた層を対象に、大学通学のための補助金、授業料等を援助することを定めたものであったが、これにより大量の復員軍人がキャンパスで学ぶようになった。1946-47年度のウィスコンシン大学の入学者は、前年の2倍以上に当たる18,598名であった¹¹⁰。また、復員軍人の多くは高校卒業後すぐに大学に入学してきた層よりもはるかに多くの経験をしてきており、失われた時間を取り戻そうと熱心に学業に励んだ。彼らが卒業後すぐに社会で役に立つ実用的・職業的知識の提供を大学に求めたことで、大学側も彼らのニーズを反映したカリキュラムへの見直しを行わざるを得なかったのである¹¹¹。さらに、それまでの白人男性を中心とした大学の学生層が大きく変化したことは、その後の高等教育人口の増加を招く要因ともなった。大学で学んだ経験をもつ親は自分の子どもたちにも高等教育を受けさせたいと考えるようになるのが自然であり、彼ら復員軍人世代の子どもたちにあたる1960年代から1970年代のベビーブーマー世代の多くが高等教育機関への進学を志した¹¹²。

1954年には、長年に渡ってダンス専攻を率いてきたマーガレット・ドゥブラーが退

職する。このころ、女性身体教育部門の下部プログラムであったダンス専攻の授業を担当する教員たちは、インフォーマルな組織としてダンス部会（Dance Division）を形成しており、形式的に部会長（Chair）を置いていた。ドゥブラーの在任中は彼女が部会長を務めていたが、引退に伴ってルイズ・クロッパーとメアリー・フィー（Mary Fee）が共同部会長としてダンス専攻を率いていくこととなった。メアリー・フィーはもともとイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で学んでいたが、そこでドゥブラーの最初の教え子の一人が担当していたリズムの授業をきっかけにダンス教育に興味を持った。1949年の夏にウィスコンシン大学マディソン校で授業を履修するが、そこでリズムの授業を担当していたのがルイズ・クロッパーであった。フィーはウィスコンシン大学マディソン校ではダンス専攻の学位が提供されていることを知り、フルタイムの学生として学ぶことを決める。1953年に修士学位を取得すると、女性身体教育部門の教員となり、ドゥブラーの後を引き継いでリズム分析などの理論的な科目を担当するようになった¹¹³。

ダンス教育法やダンス理論の開発において大きな貢献をしたドゥブラーが引退したダンス専攻であったが、後任のクロッパーは当初その穴を埋める為に何か特別なことをしようとは考えていなかったようである。ダンス専攻の目的はダンス教員の養成に置かれており、1950年代には上演・振付に重点をおいたプログラムも置かれていなかった。教員もクロッパーのようにプロのダンス・カンパニーに在籍した経験を持つものは例外であった。しかしながら、次第にダンスの経験を多く積んだ学生が増えるようになると、ダンス教育に関する専門的な知識に加えて、ダンス作品の創作経験やプロのダンス・カンパニーの在籍経験がダンス専攻の教職員になる資質として重視されるようになる¹¹⁴。

このころ、ダンス専攻の教職員だけでなく、学生たちのニーズも変化していった。1926年の設立以来、ダンス専攻ではダンス教員の養成にその目的が置かれてきたが、ダンサーあるいは振付家としてのキャリアを展望する学生たちに向けて「応用専攻（Applied major）」と呼ばれるダンスの上演に重きをおいた専攻が1960年に設置されることとなった。応用専攻の学生はダンス作品の上演に関する授業はもちろんのこと、コミュニティ・シアターにおけるダンスやダンス批評、ダンス・セラピーの科目を履修し学ぶことができた。一方で、ダンス教育専攻で取得できるウィスコンシン州内の公立学校で教鞭をとるための免許状は取得することができないとされた。またダンス教育専攻に比して英語や科学などの一般教育科目や、教育に関する科目の必修単位数が少なく、その代わりに「運動とそのリズム構造」や「ダンス創作」など、ダンサー向けの科目をより多く履修することとされた（表 3-5 参照）。

表 3-5 応用専攻の学生に履修が求められた専門科目

科目名	単位数	担当教員
ダンス理論と実践	10-14	各教員
運動とそのリズム構造	2	メアリー・フィー (Mary Fee)
音楽とダンスの構造的連関	4	ジョセフ・ハウズ (Joseph Hawes)
ダンスの理論と哲学	3	メアリー・フィー (Mary Fee)
ダンス創作 (独舞)	2-3	ルイーズ・クロッパー (Louise Klopper)
ダンス伴奏 (パーカッション)	2	ルイーズ・クロッパー (Louise Klopper)
選択 (合計で 30 単位になるように)	2-7	各教員

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1965). Bulletin of the University of Wisconsin School of Education Announcement of Courses 1965-67. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

このように応用専攻ではダンス作品の上演や振り付けに関する科目をより多く履修できるようになったのだが、すでに学生たちは自主的にダンスの創作を学ぶ機会を得ていた。すなわち、前節でも触れた「オーケシス」の活動である。ダンス専攻が設立されて以来、学生たちは、ダンス教育法だけでなく、ダンスの創作や上演についても意欲的に学ぼうとし、毎週水曜日の夜に課外活動として行われていた「オーケシス」にも参加していた。そもそも、ダンス専攻内外の学生が創作技術や上演技術を高めることを目的として結成され、しばしばドゥブラーのレクチャー・デモンストレーションにも帯同したオーケシスであったが、振り付けは学生自身が行っていた。しかしながら、次第に学生による振り付けや創作に飽き足らず、より高度な経験を提供する必要性が提起され、1960年代になってからは、アンナ・ナジフ (Anna Nasif) など創作経験豊富な教員が、学生に振り付けを行い、コンサートで上演するようになっていった¹¹⁵。必然、教職員による振り付け作品に経験値の高い上級学年の学生が参加するようになり、下級学年の学生同士が互いに振り付けを行うようになると、皮肉なことに、オーケシス活動を維持する必要性が弱まっていった。このような理由からダンス専攻がダンス教員養成だけでなくダンサーや振付家の育成を目指すようになった1960年代に、オーケシスの活動は廃止されてしまった¹¹⁶。

1960年代のダンス・プログラムの変容は、学部レベルだけでなく大学院レベルでも起こっていた。1964年、女性身体教育部門に修士 (理学) 学位に加え、修士 (芸術学) (Master of Fine Arts) 学位を取得できる課程が設置される。修士 (理学)

学位の必要取得単位数が 24 単位であるのに対して、修士（芸術学）学位の必要取得単位数は 40 単位であり、2 年間のコースにおいて、学生は振付や舞台制作を集中して学び、舞台芸術の専門家として、あるいは高等教育機関のダンス教員としてのキャリアに向けて研鑽を深めることとされた。このころまでには高等教育機関でダンスの教員となるために、修士（芸術学）以上の学位を取得していることが必須条件とされるようになっていた¹¹⁷。また、このコースでは修士論文の執筆の代わりに①ダンス作品の振付、②ダンス作品の舞台制作、③振り付け及び舞台制作、④上演芸術の媒体としての運動の哲学に関連したレクチャー・デモンストレーションのいずれかを行うことが修了の条件とされた¹¹⁸。

このように、ルイズ・クロッパーが赴任しドゥブラーが引退して以後、ダンス・プログラムは 1960 年代にかけて質的な変容を迎えた。その特徴を一言で表すならば「上演芸術としてのダンスの側面を強調したカリキュラムの芸術化」と言えるだろう。その背景には上演芸術としてのダンスを学びたいという学生が増えたこともあるが、プロのダンサーとしてのキャリアを持つクロッパーがウィスコンシン大学マディソン校に赴任したことが大きい。すなわちダンス・プログラムを担当する教員集団の興味関心の変化がそのダンス・プログラムの質的な変容を促したのである。ダンス専攻を設立したドゥブラーはアマチュアリズムの視点からダンスを捉え、ダンス教員養成をミッションとして専攻を設立したが、クロッパーが部長に就任してからは上演家・振付家の輩出を目指したプロフェッショナリズムとしてのダンス教育もウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムで実践されるようになった。ドゥブラーが築いた遺産を引き継ぎながら、プロフェッショナリズムとしてのダンス教育を付加する形でダンス・プログラムは展開していったのである。

¹ H'Doubler, M. (1998[1940]). *Dance : A creative art experience*. Madison, WI : The University of Wisconsin Press. p.66.

² 舞踊文化と教育研究の会編. (2008). 松本千代栄撰集 5 舞踊教育の開拓. 明治図書. p.60.

³ 身体の調子を整えるために行われる、主に女性向けの体操。日本では美容体操や健康体操などと訳された。

⁴ Lee, M. (1983). *A history of physical education and sports in the U.S.A.* Canada: John Wiley & Sons. pp.90-92.

⁵ Wagner, A. (1997). *Adversaries of Dance: From the Puritans to the Present*. Chicago: University of Illinois Press. p.249. 1887 年、サージェント (Sargent, D. A.) が設立したハーバード・サマースクールでは身体教育にダンスが含まれており、そこに講師として 1894 年に招聘されたのがギルバートであった。

⁶ Marks, J. E. III. (1957). *America Learns to Dance: A Historical Study of Dance Education in America before 1900*. New York: Dance Horizon. p.101.

-
- ⁷ Kraus, R. (1991). *History of the dance in art and education*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc. pp.294-p.299.
- ⁸ Natural Dance や Interpretive Dance などと呼ばれていた (Lee, 1983, p.136)。
- ⁹ Chapman, S. A. (1974). *Movement education in the United States: Historical developments and theoretical bases*. Philadelphia: Movement Education Publications., Hagood, T. K. (2000). *History of Dance in American Higher Education: Dance and the American University*. New York: Edwin Mellen Pr.
- ¹⁰ Hawkins, A. (1954). *Modern dance in higher education*. New York: Bureau of Publications. p.6.
- ¹¹ Wood, T. D. (1927). *The new physical education : A program of naturalized activities for education toward citizenship*. New York: The Macmillan company.
- ¹² Chapman. (1974), *op. cit.*, p.27.
- ¹³ Hawkins. (1954), *op. cit.*, p.7.
- ¹⁴ Hagood. (2000). *op. cit.*, p.76.
- ¹⁵ *Ibid.*, p.78. コルビーは 1931 年にティーチャーズ・カレッジを退官するが、その後任となったのがオドネル (Mary O'Donell) であった。彼女はベニンントン・スクール・オブ・ダンス (The Bennington School of Dance) に招聘されたモダンダンスの Big4 (グレアム (Martha Graham)、ハンフリー、ヴァイドマン (Charles Weidman)、ハンヤ・ホルム (Hanya Holm)) をティーチャーズ・カレッジに招きデモンストレーションをさせることに成功している。彼女はマーサ・ヒル (Martha Hill) と連携しながら芸術としてのダンスの方向を模索する中、身体教育のなかに徐々に拡大しつつあったダンスを組織的に研究する体制づくりが必要であると考え、ドゥブラーとも連携しながら APEA (the American Physical Education Association) の下部組織としてダンス部門を創設することに成功する。
- ¹⁶ Altmeyer, A. J. (1958). The Wisconsin Idea and social security. in *Wisconsin Magazine of History*. pp.19-25.
- ¹⁷ ウィスコンシン大学拡張部の活動については五島敦子. (2008) .アメリカの大学開放 : ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開. 学術出版会. に詳しい。
- ¹⁸ 1911 年度にはアシスタントとして、1911 年度から 1915 年度にかけてはインストラクターとして働いていた (The University of Wisconsin-Madison. (1975a). H'Doubler, Margaret · Course materials (1933, 1971-1975). The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5/1)。
- ¹⁹ Lee. (1983). *op. cit.*, p.178.
- ²⁰ Barr, H. A. (1942). History of the athletic conference of American college women 1917-1922. the University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.
- ²¹ 後に The Athletic Federation of College Women となる。
- ²² Brennan, M. A. (2007). H'Doubler on H'Doubler. in Wilson, M. J., Hagood, T. K., & Brennan, M. A. *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York: Cambria Press., p.18.
- ²³ H'Doubler, M. (1972). University of Wisconsin-Madison archives oral history project : Interview # 609 H'Doubler, Margaret, by Brennan, M. A., p. 4.
- ²⁴ Genther, B. S. (1951). Dance Program. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5.
- ²⁵ H'Doubler. (1972). *op. cit.*, p.5.
- ²⁶ *Ibid.*, p.22.
- ²⁷ H'Doubler, M. (2012[1921]). *A Manual of Dancing*. Tennessee: General Books LLC. p. 1.
- ²⁸ Hagood, T. K. & Brennan, M. A. (2006). The early years, 1928-1932: Interview with Hermine Sautoff Davidson. in Wilson, M. J., Hagood, T. K., & Brennan, M. A., *op. cit.*, pp. 57-58.

-
- 29 Rose. (1950). *op. cit.*, p.63.
- 30 Remley. (1975). *op. cit.*, p.183.
- 31 H'Doubler., M. (1998). *op. cit.*, p.86.
- 32 Rose. R. J. (1950). *op. cit.*, p.53.
- 33 H'Doubler. (2012[1921]). *op. cit.*
- 34 H'Doubler, M. (1940). *Dance: A Creative Art Experience*. Wisconsin: University of Wisconsin Press. p.177. ドゥブラーが *Dance: A Creative Art Experience* を著したのはデューイの *Art as Experience* が出版された 6 年後のことである。
- 35 H'Doubler, M. (1925). *The dance and its place in education, with suggestions and bibliography for the teacher of the dance*. New York: Harcourt, Brace and Company. p.8.
- 36 H'Doubler. (1998[1940]). *op. cit.*, p.66.
- 37 Dewey, J. (2005[1934]). *Art as Experience*. New York: Penguin group., p.48.
- 38 デューイによると、経験とは「生き物が自分の生活環境と相互作用する結果」である。経験は絶えず身の回りに起こっているが、それらの漫然とした経験は<一つの>経験 (an experience) とは区別される (*Ibid.*, p.45.)。
- 39 *Ibid.*, p.44.
- 40 H'Doubler. (1998[1940]). *op. cit.*, p.50.
- 41 *Ibid.*, p.54.
- 42 *Ibid.*, p.54.
- 43 このように美的なものを経験論に引きつけてとらえるという視点は、デューイやドゥブラーが初めて提起したものではない。すでに 18 世紀にはカントが『判断力批判』の中で趣味判断が主観的にならざるを得ないことを指摘しており、このカントの主張に依拠して多くの論者が美的経験について論じてきたが、ここでは思想的起源ではなく、デューイとドゥブラーが美的なものとの関係を同様に捉えていたということに注目したい。
- 44 Dewey (2005[1934]), *op. cit.*, p.67.
- 45 *Ibid.*, p.72.
- 46 *Ibid.*, p.78.
- 47 *Ibid.*, pp.78-79.
- 48 H'Doubler (1998[1940]), *op. cit.*, p.52.
- 49 *Ibid.*, p.56.
- 50 *Ibid.*, p.56.
- 51 *Ibid.*, p.71.
- 52 この点はデューイが芸術制作において感情 (an emotion) が美的感情 (esthetic emotion) へと変容していくとした点と重なる。
- 53 *Ibid.*, p.112.
- 54 *Ibid.*, p.113.
- 55 *Ibid.*, p.147.
- 56 *Ibid.*, p.114.
- 57 *Ibid.*, p.114.
- 58 「満足」と「経験」はイコールではない。ドゥブラーによれば満足 (satisfaction) とは人が何かを経験するときに、その経験を占める質である (*Ibid.*, p.112.)。すなわち「満足」と「経験」は置換可能ではなく、感情的満足は感情的経験もしくは美的経験を占める質ということになる。
- 59 アマチュアであってもプロと同等の技術をもつものもいるが、ドゥブラーは卓越した技術をもつプロのダンサーにアマチュアの学生を対置していた (*Ibid.*, p.65.)。
- 60 *Ibid.*, p.64.
- 61 ドゥブラーが *Dance: A Creative Art Experience* のなかで創造的芸術経験 (creative art experience) という語を用いているのはこの箇所のみである。本稿では創造的芸術経験を頻出する芸術活動 (art experience) と同じ概念と捉え、芸術制作に関わる概念とし

て説明した。

⁶² 価値 (value) についてドゥブラーは「芸術が表現する価値は感情的な価値であり感情的な意識によって把捉される」(*Ibid.*, p.114.) と述べている。創造的芸術経験において「美的価値が再体験される」とは、端的に言う素材としての感情的経験や美的経験を占める感情が芸術制作の際に想起されるということになる。

⁶³ *Ibid.*, p.64.

⁶⁴ *Ibid.*, p.115.

⁶⁵ Dewey (2005[1934]), *op. cit.*, p.48.

⁶⁶ *Ibid.*, p.47.

⁶⁷ 「芸術的・美的経験 (artistic-esthetic experience)」と表現している箇所はある (*Ibid.*, p.51.)。

⁶⁸ もちろん絵画や彫像の制作の過程を上演芸術 (performing arts) として提示する芸術表現も多数存在するが、デューイは *Art as Experience* のなかでそのような表現を想定して論を展開していない。また上演芸術について言うのであれば音楽や演劇もダンスと同じような特徴を持つものとして検討される必要があるだろう。後述するドゥブラーの論を用いて音楽や演劇を考えると、それらが上演芸術である限りにおいて①演者が自らの美的経験から表現を生み出す (演者にとっての芸術経験)、②観客が演者の発した表現を鑑賞する (観客にとっての美的経験)、③ (②と同時に起こる) 演者自らの表現が演者にとっての美的経験となる、という3つのポイントを満たしてはいるものの、演者にとって表現媒体が身体ではなく音それ自体や言語 (概念) となることは、リズムとそれを捉える運動感覚を鍵概念に演者と観客とのコミュニケーションを捉えるドゥブラーの論の射程からは外れるように思われる。

⁶⁹ ドゥブラーはリズムについて問われた際、「それは私のペットです (that's my pet)」と答えたという。それほどにまでリズム概念について深く探求し、興味と愛着を持っていったのだろう (H'Doubler. (1972). *op. cit.*, p.16.)。

⁷⁰ H'Doubler(1998[1940]), *op. cit.*, pp.128-129.

⁷¹ *Ibid.*, p.86.

⁷² *Ibid.*, p.87.

⁷³ *Ibid.*, p.85.

⁷⁴ *Ibid.*, p.86.

⁷⁵ *Ibid.*, p.84.

⁷⁶ H'Doubler. (1972). *op. cit.*, p.29.

⁷⁷ *Ibid.*, p.7.

⁷⁸ Remley. (1975). *op. cit.*, p.190.

⁷⁹ オーケシス (Orchesis) とは運動科学を表すギリシャ語であり、またギリシャ演劇における群舞隊を指す (H'Doubler, M. (1951). *Orchesis statement of principles. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.*)。

⁸⁰ オーケシスは1931年のある日、ドゥブラーはマディソンを出発し、13名の卒業生とともにニューヨークを訪れる。New York Times 誌のダンス批評家であるジョン・マーティン (John Martin) の招きに応じて、ダンスについての講演とデモンストレーションを行うのがその目的であった。ドゥブラーのダンス教育論を、卒業生たちが実際に具現化することによって、理論と実践を統合しようという試みである。この卒業生の中には、以下の表に示すように、既に高等教育機関でダンスの教鞭をとっているものも含まれていた。ドゥブラーの教え子たちがアメリカ中に展開してダンス教育の実践を行っていたことを示すとともに、ドゥブラーとの親密な関係を築いていたことを示すエピソードであるといえよう。

表注 3-1 ニューヨークでのレクチャー・デモンストレーションに帯同したドゥブラーの教え子たち

名前	高等教育機関名
ジュネーブ・ワトソン (Geneve Watson)	オハイオ州立大学
マリオン・シュトレン (Marion Streng)	バーナード・カレッジ
ドロシー・シンプソン (Dorothy Simpson)	ニュージャージー女性カレッジ
アグネス・マッコール (Agnes McCall)	ウェスト・ヴァージニア大学
イオン・ジョンソン (Ione Johnson)	イリノイ大学

出典 : Trilling, B. (1932). Dance news coverage at Wisconsin. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.

⁸¹ Remley. (1975). *op. cit.*, p.190.

⁸² Gray. (1978). *op. cit.*, p.71.

⁸³ Department of Physical Education. (1926). Letters and science document 33, June 8, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-3.

⁸⁴ Special Letters and Science faculty meeting. (1926). Minutes: Special Letters and Science faculty meeting, Monday, June 14, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-2.

⁸⁵ 1908年からウィスコンシン大学では教員養成が行われていたが、1919年6月に理事会によって教育学部の設置が承認され、文理学科カレッジの下部に位置付けられた。1926年頃には高校教員、校長、教育長、指導主事 (supervisors) の他、農業、家政経済、工作、身体教育の各教員や学校図書館司書の養成も行われていた(The University of Wisconsin-Madison. (1927a). Bulletin of The University of Wisconsin Catalog 1926-1927. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.)。

⁸⁶ ダンス専攻の学生には数学よりも歴史学の履修が推奨された(The University of Wisconsin-Madison. (1927b). Physical Education Alumnae Association Bulletin. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5/00-4.)。

⁸⁷ 内容は「心理学入門」である。

⁸⁸ 教育 11 の内容は「精神発達」、教育 41 の内容は「教育心理学」、教育 90 の内容は「指導技術」である。

⁸⁹ Ross. (2000). *op. cit.*, p.150.

⁹⁰ ドゥブラーの生徒であったエノスは、ダンス専攻が承認された翌朝に、学生が多くの人文科目が履修できるようになったことに対して喜びを露わにしていたドゥブラーの姿を回想している(Ross. (2000). *op. cit.*, p.188.)。

⁹¹ Regular Letters and Science faculty meeting. (1926). Minutes: Regular Letters and Science faculty meeting, Monday, October 18, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-2.; H'Doubler. (1972). *op. cit.*, p.14.

⁹² Hagood. (2000). *op. cit.*, p.99.

⁹³ Callahan, J. (1928). *Laws of Wisconsin relating to common schools*. Wisconsin: Department of Public Instruction. ただし1年目の免許状の期限は1年間であり、2年目には再び1年間の期限つき免許状が授与される。倫理的な人格を備え、無事に2年間の実務経験を終えると終身免許状へと切り替えられることになっていた(The University of Wisconsin-Madison. (1927). *op. cit.*)。

⁹⁴ The University of Wisconsin. (1927b). *op. cit.*

⁹⁵ 1925年度から1935年度までの女性身体教育プログラムの卒業生の進路をまとめた報告書によると、卒業後に仕事を続けている卒業生のうち、約4割が高等教育機関で教鞭を取

-
- っていた (The University of Wisconsin-Madison. (1937). Alumnae placement status, types, names. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.)。
- ⁹⁶ Gray. (1978). *op. cit.*, p.111.
- ⁹⁷ *Ibid.*, p.167.
- ⁹⁸ Callahan, J. (1931). *A manual of physical education for the public schools of Wisconsin*. Wisconsin: Department of Public Instruction. p. 16.
- ⁹⁹ H'Doubler. (2012[1921]). *op. cit.*, pp.8-9.; H'Doubler. (1925). *op. cit.*, p.160.
- ¹⁰⁰ 例えば 1966-1967 年に行われた「ダンスに関する発展会議 (The Developmental Conference on Dance)」では、将来ダンサーを目指すか教師になるかに関わらず、高い技術を習得する必要性が提起されている (Temple University Libraries Digital Collections. Impulse: annual of contemporary dance 1968. URL: <http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2477/show/2432> 最終アクセス日 2016 年 11 月 26 日)。
- ¹⁰¹ Gray. (1978). *op. cit.*
- ¹⁰² Klopper, L. O. (1976). UW-Madison Archives oral history project: Interview #180 Louise Klopper, by Brennan, M. A. and Davidson, H. Date: November 30 of 1976.
- ¹⁰³ Klopper, L. O. (1979). UW-Madison Archives oral history project: Interview #180 Louise Klopper, by Pelt, M. V. Date: February 15 of 1979.
- ¹⁰⁴ Haggood, T. K. & Llyod, M. L. (2006). The middle years, 1932-1942: Interviews with Elizabeth R. Hayes. in Wilson, M. J., Haggood, T. K., & Brennan, M. A., *op. cit.* p.76.
- ¹⁰⁵ *Ibid.*, pp.86-87.
- ¹⁰⁶ Klopper. (1976). *op. cit.*
- ¹⁰⁷ The University of Wisconsin news Service. (1950). Feature story 8/3/1950. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5.
- ¹⁰⁸ The University of Wisconsin News Service. (1951). U. W. News 11/7/1951. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.
- ¹⁰⁹ The Wisconsin State Department of Public Instruction. (1952). *Report to the University of Wisconsin School of Education*.
- ¹¹⁰ Hove, A. (1991). *The University of Wisconsin: A pictorial history*. Wisconsin: the University of Wisconsin Press. p.188.
- ¹¹¹ *Ibid.*, p.188.
- ¹¹² Cowley, W. H. & Williams, D. (1991). *International and Historical Roots of American Higher Education*. New York: Garland Publishing, Inc. p.188.
- ¹¹³ Fee, M. (1987). University of Wisconsin-Madison Archives oral history project Interview #612 Mary Fee, by Brennan, M. A. Date: August 22 of 1987.
- ¹¹⁴ Klopper. (1979). *op. cit.*
- ¹¹⁵ *Ibid.*
- ¹¹⁶ *Ibid.*
- ¹¹⁷ *Ibid.*
- ¹¹⁸ The University of Wisconsin-Madison. (1963). Bulletin of the University of Wisconsin Graduate School Announcement of Courses 1963-65. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

第4章 第二次世界大戦後から 1970 年代にかけてのアメリカの文化政策とダンス

本章ではまず、先行研究でも言及されている第二次世界大戦後から 1970 年代にかけてのアメリカの文化政策およびダンス教育者や上演家・振付家らの組織的な活動についてまとめ、先行研究で言及されている「ダンスの芸術化」を促した外在的要因について述べる。また、そのような動きを受けてウィスコンシン大学マディソン校のダンス部会の教員たちが独立したデパートメント設置に向けた活動を行っていたにも関わらず、同校のダンスがアマチュアリズムに立脚し身体教育としての側面を依然として強く持っていたがために教員間での意見の一致を見ず、デパートメントの設立には至らなかったことを示す。

第1節 冷戦期の芸術政策

第二次世界大戦が終わり冷戦が始まると、アメリカはソビエト連邦とあらゆる分野において覇権を争うようになり、政治、経済だけでなく文化においても激しい競争状態へと突入した。アメリカの文化政策自体はこの時期に始まったものではなく、第二次世界大戦期には南アメリカに対して、第二次世界大戦直後はドイツに対して多くの学生、教育者、技術者等を派遣していた。しかしながら、冷戦初期にはソ連のプロパガンダに対抗するという大義名分において、連邦政府は積極的に文化交流プログラムを支援した¹。

戦後のアメリカの芸術文化支援において大きな役割を果たしたのは、主に個人や財団による寄付金であったが、1953年にアメリカ大統領に就任したアイゼンハワー大統領(Dwight Eisenhower)は文化政策を特に重要視し、積極的にパフォーミング・アーツを支援した。1956年には国際文化交流法が成立し、111の興業が89か国へと派遣された²。国際交流プログラムにおいて派遣するダンサーの選出を担っていたのは全米劇場アカデミー(the American National Theater and Academy)のダンス・パネルであり、そのメンバーには振付家や財団関係者、さらに芸術としてダンスを教える高等教育機関であるジュリアード音楽学院のディレクターのマーサ・ヒルも名を連ねていた(表4-1参照)³。

表 4-1 1955 年度のダンス・パネルのメンバー

名前	職業・役職	所属
ルシア・チェイス (Lucia Chase)	ディレクター	バレエ・シアター財団
エミリー・コールマン (Emily Coleman)	音楽・ダンス編集者	ニュースウィーク
アグネス・デ・ミル (Agnes de Mille)	振付家	
ハイマン・フェイン (Hyman Faine)	事務総長	アメリカン・ギルド・オブ・ミュージカル・アーティスト
マーサ・ヒル (Martha Hill)	ディレクター	ジュリアード音楽学院ダンス学部
ドリス・ハンフリー (Doris Humphrey)	教師、振付家	
リンカーン・カースティン (Lincoln Kirstein)	ジェネラル・ディレクター	ニューヨーク・シティ・バレエ
ウォルター・テリー (Walter Terry)	ダンス批評家	ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン
ベサビー・ド・ロスチャイルド (Bethsabeé de Rothchild)	ディレクター	ロスチャイルド財団

出典：Prevots, N. (1998). *Dance for export: cultural diplomacy and the cold war*. Connecticut: Wesleyan University Press. p.147.

このころ国外へと派遣されたダンサーやカンパニーはアメリカン・モダンダンスの草創期に活躍したマーサ・グレアムやホセ・リモンを始め、アメリカン・バレエ・シアターやニューヨーク・シティ・バレエ、ジョフリー・バレエなどのバレエ団が名を連ねていた⁴。グレアムやリモンが派遣されたのはアメリカを代表する上演芸術としてモダンダンスに焦点があてられたからであり、バレエ団の派遣はロシアというバレエ大国に比肩するだけのバレエ団がアメリカにも存在することを顕示する目的をはらんでいた。どのダンス・カンパニーやバレエ団を派遣するかが議論される際に最も重要視されるのは、それらがアメリカの文化を代表するものとしてふさわしいか否かであり、アメリカに起源をもたないダンサーが多いカンパニーや、マース・カニングハム (Merce Cunningham) などの前衛的なダンサーは忌避される傾向があった⁵。

1950年代の積極的な対外文化政策にあわせて、アメリカ国内においても芸術拠点の設立を求める動きが強まっていった。その中心となったのはウィリアム・フルブライト (J. William Fulbright) 上院議員 (民主党、アーカンザス州) とフランク・トンプソン Jr. (Frank Thompson Jr.) 下院議員 (民主党、ニュージャージー州) であった。フルブライト上院議員はその国の首都にパフォーミング・アーツのための国立の文化センターをもたないのはアメリカだけであると指摘し、対外政策だけでなく国内における芸術支援の必要性を訴えた⁶。1958年9月にはナショナル文化センターの設立を定めた法案が可決される。

このようにアイゼンハワー大統領の文化政策は政治的な色彩を帯びたものであったものの、ダンスが芸術としての地位をアメリカ国内外で高める絶好の機会となったことも事実である。特にモダンダンスは自由と民主主義を象徴するアイコンとして重宝された。モダンダンス・カンパニーの国外派遣は彼らの生活の基盤を確立するだけではなく、モダンダンスのアメリカ国内における認知を高めるきっかけにもなった⁷。また、国立のバレエ団を持つソ連とは異なり、アメリカが支援したのは民間のカンパニーやバレエ団であったが、基本的に連邦政府の芸術政策は民間の活動を支援することによる触媒効果を狙ったものであった⁸。

アイゼンハワー大統領時代からダンスをその範疇に含む芸術政策が打ち出されたものの、1960年代初頭の芸術団体を取り巻く財政的状况は決して芳しいものではなかった。1965年3月にロックフェラー財団によって提出されたレポートである *The Performing Arts: Problems and Prospects* ではアメリカにおける芸術の未来にとって連邦政府の支援が決定的な役割を果たすことが指摘されている⁹。民間芸術を活性化させるための積極的な芸術政策が待たれていた。

先に見たように、連邦政府のパフォーミング・アーツに関する文化政策は、アメリカの文化的威信を示す国際交流プログラムと、ナショナル文化センターの設立決定に代表される国内文化への支援の二本柱であった。1961年に就任した民主党のケネディ大統領 (John F. Kennedy) は、芸術文化に対して積極的に関心を示し、アイゼンハワー大統領時代に設立が決定されたナショナル文化センターへの支援を継続したほか、1963年には芸術に関する大統領諮問機関を設置するなど積極的に芸術文化支援策を打ち出した¹⁰。残念ながらケネディ大統領は同年暗殺されてしまうが、ケネディ大統領に替わって就任した民主党のジョンソン大統領 (Lyndon Baines Johnson) もまた積極的な芸術政策を展開した。

1964年9月3日にはジョンソン大統領によって *The National Arts and Cultural Development Act of 1964* が可決され芸術評議会 (The National Council on the Arts:

NCA) が設置される。同会議の設置にあたっては、アメリカ国内における芸術文化の育成・発展を連邦政府が積極的に支援することが定められた。翌月には 5 万ドルの予算がつけられる¹¹。翌年 4 月 9 日から 10 日にかけては NCA 初となる会合が開かれた。

これらの法整備を受けて 1965 年 9 月 29 日、ジョンソン大統領が The National Foundation on the Arts and Humanities Act に署名する。初年度となる 1965 年度には副大統領のハンプリー (Hubert Humphrey) によって深刻な財政難に陥っていたアメリカン・バレエ・シアターに対して 10 万ドルの助成が行われたほか、マーサ・グレアム・ダンス・カンパニーに対しても助成金が出される。マーサ・グレアムは当時世界中から招聘を受けていたが、NEA から助成を受けたことによって国内にとどまって全国ツアーを行うことを決断し、結果として多くのアメリカ国民が彼女のすぐれた作品を鑑賞する機会を得ることとなった。翌 1966 年度には助成を得て活動する振付家やダンス・カンパニーの数は急増し、アルビン・エイリー (Alvin Ailey)、マース・カニングハム、ホセ・リモン (José Limón)、アルヴィン・ニコライ (Alwin Nikolais)、アンナ・ソコロウ (Anna Sokolow)、ポール・テイラー (Paul Taylor) らに対し 9.3 万ドルが助成された。1967 年度はダンスに対する助成金は 17.7 万ドルにまで拡大し、コネティカット・カレッジで行われたアメリカン・ダンス・フェスティバルやワシントン州アート・コミッションのサマー・レジデンシーへの助成に至るまで幅広い団体に対して助成金が付与された¹²。さらに 1968 年にはダンス・ツアー・プログラムがイリノイ州など大都市圏以外にも拡大した。アーティストにとっては自らの芸術作品の創作やトレーニングに集中する時間と資金を得ることができた一方で、多くの観客にアメリカが誇るモダンダンス・カンパニーの作品を見る機会が提供された。またアメリカン・ダンス・カンパニー・アソシエーションの設立やジョフリー・バレエ・センターの設立などが NEA の助成金により促進され、助成金を得るために必要なマネジメント体制の確立も進んだ。NEA の創設によりプロフェッショナル・ダンスの需要と供給の両方が刺激されることとなったのである¹³。

第 2 節 高等教育機関におけるダンスのアイデンティティの模索

このように NEA の創設に伴って打ち出された様々なプログラムによって、多くのダンス・カンパニーがその恩恵を受け、作品創作や上演に打ち込める体制が整備されていくとともに、これまでダンスとあまり縁のなかった層をも観客層や政策の受益者として取り込むことで、アメリカ国内におけるダンスが大いに興隆し始めた。

1950 年代から 1960 年代の、上述のような連邦政府による芸術文化政策の影響もありアメリカ国内外でダンスが興隆し始めたが、そのような動きは教育機関にも影響を及

ぼし、高等教育においても芸術としてのダンスのありようを模索する動きが強まる。このころ、ドゥブラーが切り開いた身体教育におけるダンスと、マーサ・ヒルらによるベニントン・スクール・オブ・ダンス（Bennington School of the Dance）における芸術としてのダンス教育実践¹⁴とが並存する状態ではあったが、ダンスがアメリカ国内外で認知度を徐々に高めつつあった時代にあつて、高等教育におけるダンスは徐々に芸術領域へと向かう準備を整えつつあった。象徴的なのがアメリカ・健康・体育・レクリエーション連盟（American Alliance for Health, Physical Education, and Recreation: AAHPER）のダンス部会などのダンス教育者団体で相次いで開催された、芸術としてのダンスの方向性を模索する会議である（表 4-2 参照）。

表 4-2 1960 年代に開かれた主なダンス教育に関する会議

会議名	年月日	場所	主催者
運動に関する会議（Conference on Movement）	1961 年 6 月 11-18 日	ノースカロライナ大学 女性カレッジ、グリーン スボロ校	全米ダンス・セクション （ The National Section on Dance of AAHPER）
教育の中の芸術に関する全米評議会（The Conference of the National Council on Arts in Education: NCAIE）	1963 年 9 月	オーバーリン・カレッジ （オハイオ）	教育の中の芸術に関する全米会議（NCAIE）
学問としてのダンス会議（The “Dance as a Discipline” conference）	1965 年 6 月 20-26 日	コロラド大学ボルダー 一校	ダンス部会（the Dance Division of AAHPER）
ダンスに関する発展会議（The Developmental Conference on Dance）	1966 年 11 月 24 日-12 月 3 日、1967 年 5 月 28 日-6 月 3 日	カリフォルニア大学ロ サンゼルス校（UCLA）	アルマ・ホーキンス （Alma Hawkins）
アメリカン・ダンス・シンポジウム（The American Dance Symposium）	1968 年 8 月 20-23 日	カンザス州ウィキタ	カンザスダンス評議会 （The Kansas Dance Councils Inc.）

出典：Hagood. (2000). *op. cit.*より筆者作成

まず、1961年にはダンス教育者の全米規模の研究会であるアメリカ・健康・体育・レクリエーション連盟のダンス・セクションが「運動に関する会議」を開催する。上部組織であるアメリカ・健康・体育・レクリエーション連盟からはあまり積極的な支援は得られなかったが、ダンス・セクションの中で学問としてのダンスの在り方が模索され議論された¹⁵。身体教育としての側面と芸術としての側面を併せ持つダンスは、同協会のなかでレクリエーション部会に位置づけられていたが、レクリエーション部会にフィットしていたわけではなく、独立した部会化を目指す動きが強まる。1965年になると同セクションはアメリカ・健康・体育・レクリエーション連盟のダンス部会（Dance Division）となり、同年6月20日から26日にかけて「学問としてのダンス会議（The Dance as a Discipline Conference）」を開催する。会議の目的は「芸術的な学問、上演芸術、ノンバーバルな学習形態としてのダンスの学問的な意味を考察すること」であった¹⁶。同会議ではマーガレット・ドゥブラーがキネティック・アプローチに関する講演を行うとともに、カリフォルニア大学のアルマ・ホーキンス（Alma Hawkins）が「ダンスは他の学問領域と同じように、理論的な枠組みや知識の体系を備えているか」と問いを投げかけた。同会議はそれまでに類を見ないほどの多くの高等教育におけるダンス教育者がダンスの学問としての自立を目指して意見交換を行った場であった¹⁷。

このように芸術としての独立を目指した会議が相次いで開催された1960年代において、ダンス及びダンス教育に関する知的プラットフォームとして議論の場を提供したのが、*Impulse* 誌であった¹⁸。1948年、ウィスコンシン大学マディソン校でドゥブラーの教えを受け、ポストモダンダンスの草分け的存在として活躍したアンナ・ハルプリン（Anna Halprin）が、ウェランド・ラスロップ（Welland Lathrop）とともに立ち上げたスタジオの年報として始まった *Impulse* 誌は、ベニントン・スクール・オブ・ダンスでも教鞭をとっていたマリアン・ファン・タイル（Marian Van Tuyl）のリーダーシップのもと1951年に編集方針に大幅な変更が加えられ、ダンス教育や政府の芸術政策、コミュニティ・ダンス等を論じる機関誌として生まれ変わった¹⁹。同誌は当時のダンサー、ダンス教育者、研究者に広く読まれており、ベニントン・スクール・オブ・ダンスにおいて中心的な役割を果たしたマーサ・ヒルを始め、アメリカ・健康・体育・レクリエーション連盟ダンス部会の元会長であるルース・マレー（Ruth Lovell Murray）、アイゼンハワー政権時代に行われた国際交流プログラムのダンス・パネルのパネリストの一人であるアルヴィン・ニコライ、アルマ・ホーキンス、ホセ・リモン等が原稿を執筆している。同誌では毎年特集記事が組まれており、1965年には前年に行われた「教育のなかの芸術に関する全米評議会」の報告記事がリップピンコット（Gertrude Lippincott）

によって書かれている。同会議のなかで「ダンスは独立した芸術でありそのように認識されるべきである」との声明がなされ、17人の各ダンス教育者団体の代表者（National Section on Dance、National Dance Teachers Guide、Dance Notation Bureau、Dance Films、Impulse Publications）によって署名がなされた²⁰。同会議の声明は教育におけるダンスの独立した芸術としての地位をアメリカの歴史上初めて表明しただけでなく、ダンス教育に関する幅広い組織の協同の端緒となったという意味において重要であった²¹。また1968年には1966-67年に行われた「ダンスに関する発展会議」に関する特集記事が組まれており、具体的なカリキュラムの内容や学部教育及び大学院教育における目標、教育組織、ダンス学部の質を担保するうえでのスタンダードの作成、研究組織の在り方などが論じられている。ここでは、芸術領域として独立したダンス・デパートメントを構想するうえで彼らが実際にどのような議論を行っていたかを見ていこう。

ダンス・デパートメントのカリキュラムについては以下のようなモデルが提示された（図4-1参照）。

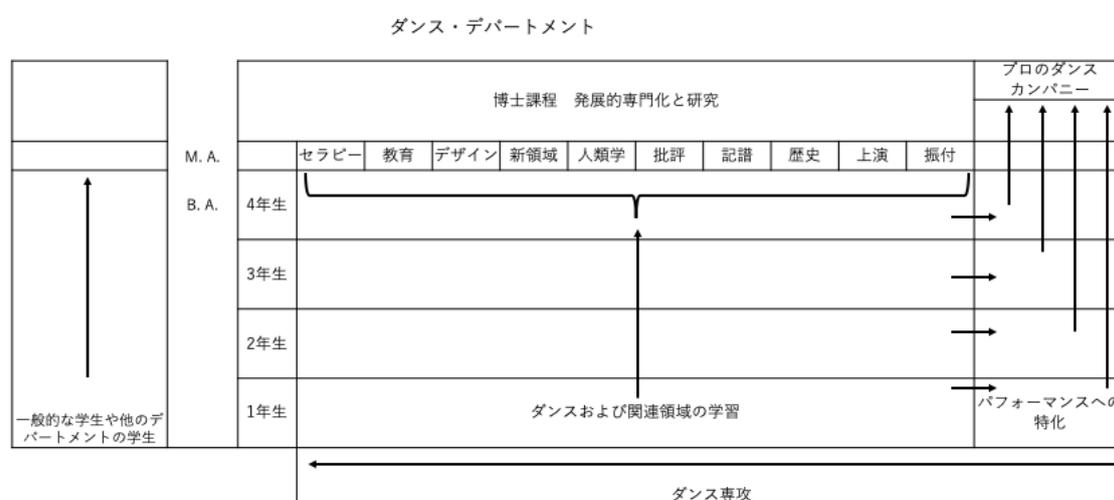


図 4-1 「ダンスに関する発展会議」で議論されていた高等教育機関におけるダンスのモデル（Temple University Libraries Digital Collections. Impulse: annual of contemporary dance 1968. p.99. テンプル大学によって公開されている Impulse デジタル・アーカイブより引用

（URL:<http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2477/rec/18>）

中央部分には大学院でのより専門的な学びにつながる学部生のカリキュラムが描か

れている一方で、モデルの右側では上演・振付を集中的に学びたい学生が、プロのダンス・カンパニーへと就職する道筋が構想されている。ダンス専攻の学部生は4年間のカリキュラムのなかでテクニック、ダンス創作、ダンス史、舞踊譜、エスノグラフィー、ダンス教育、ダンス・セラピーなどを学び、卒業後はそれらの分野の専門家及びダンサーとして活動するか、大学院にてより専門性を高めるかを選択する。このモデルに基づいて、「ダンスに関する発展会議」ではダンス・デパートメントで学ぶ学生のカリキュラムについての議論が行われたのだが、カリキュラムに関する論点として大きく以下の2点があった。一つは、プロのダンス・カンパニーを目指す学生が大学においてダンスを学ぶことの意味である。ダンス史家で *International Encyclopedia of Dance* の編者としても知られるセルマ・ジーン・コーエン (Selma Jeanne Cohen) はプロのダンス・カンパニーで踊ることを志す若者については、4年間のダンス・デパートメントでの学習は必要ないとした上で、ロシアやデンマークのダンス学校で行われている徒弟制のように、若くても十分に才能があるダンサーについては、順次プロのダンス・カンパニーに入れるようにすればよいのではないかとの考えを示した。これに対しては、ダンス・プログラムの全てを上演家を目指す学生向けにする必要はなく、学生の興味に応じてカリキュラム上の強調点を変える案が示された。ダンス専攻卒業生と労働市場とのミスマッチを指摘する研究は近年も存在するが (Montgomery&Robinson 2003, Risner 2010)、この時期既に高等教育機関におけるダンサー養成の是非が問われていたことは注目してよい。また、この点にも関わることだが、ダンス専攻の学生に対して、スタジオにおける実技トレーニングをどの程度課すかということも大きな論点になっていた。以下に *Impulse* 誌上に座談会形式で掲載されている議論の一部を示す。

アルマ・ホーキンス：ダンス専攻の学生はスタジオでどのくらいの時間を過ごすべきか。(中略)

ユージン・ローリング：人間は1日に4時間半は実技を学ぶことができる肉体的エネルギーを持っている。最低でも3時間は実技トレーニングを行うべきだ。

エリザベス・ヘイズ：大学では〔1日に〕3時間または4時間半の実技トレーニングを課すのは難しいように感じる。それはプロのカンパニーで求められる量、上演家を目指す人々に求められる時間であり、すべてのダンス専攻で共通のコアとして設定すべき時間ではない。(中略)

ウィリアム・ベールズ：アメリカのすべての高等教育機関に〔実技トレーニングの時間数を〕義務として課すことはできない。プログラムには〔1日〕1時間半の実技クラスがなくてはならないと、最低限の時間数を推奨することはできるし、それ以上の

〔スタジオでの実技トレーニングによる〕経験が望ましいと勧めることはできる。すべてのカレッジや大学がそれぞれの基準を設定するだろう。(中略)

セルマ・ジーン・コーエン：我々は最低限、1時間半の実技クラスを持つべきであると明確にするべきだ。²²

誌上座談会では、ダンス専攻の学生に等しく1時間半～4時間半の実技クラスを課すべきか、それとも学生の専攻によって実技クラスの分量を調整するべきかという点で意見が分かれている。プロのダンサーとしてのキャリアを歩むためには、当然ながら日々トレーニングを行う必要がある。実技トレーニングのコマ数のスタンダードをめぐる議論は、高等教育機関のダンス・プログラムにおいてどのような人材の養成を目指すべきかというダンス・プログラムのミッションに関わる議論とつながっていた。ここでは、プロの上演家・振付家の輩出を目指すべきとする意見(セルマ・ジーン・コーエン)と、公立学校やスタジオでダンスを教えるダンス教師、ダンス・セラピスト、批評家/歴史家などダンスを専門とする多様な人材の輩出を目指す意見(エリザベス・ヘイズら)とが混在していた。誌上座談会で明確な結論が導き出されたわけではないが、この頃までにはプロの上演家・振付家の輩出が、唯一ではないにせよ、アメリカの高等教育機関のダンスの目的の中心として位置付けられていたことが指摘できる。議論は、ダンス専攻の学生に共通のトレーニングを課すべきか否かへと発展し、アルマ・ホーキンスは次のように議論のまとめを行なっている。

アルマ・ホーキンス：結論として、〔ダンス専攻の学生の〕学部での運動に関する授業の履修要件は、学生によって異なる履修を可能とするような柔軟性を持っているべきではあるが、上演家・振付家または教師としての専門性に興味を持っているダンス専攻生は4年間を通しての「核となる」経験をすべきである、というまとめでよい。

一同：同意。²³

ダンス専攻の学生の興味は様々であり、卒業後のキャリアも多様なものが考えられる。しかしながら、上演家・振付家として、あるいは教師として踊ることを生業とする以上は一定の実技トレーニングを課すべきであるということが確認されたのである。ダンス専攻の学生の専門化は大学院レベルで図られるべきであるとし、学部レベルでは柔軟性を持ちながらもダンスの基礎を学ばせるという方針で一致をみたが、ここでいう基礎を構成する要素としては「踊るという経験」が主として考えられていた。

また「ダンスに関する発展会議」では、ダンスを専門的に学んだ学生が身につけるべき能力についても、以下のように具体的に検討されていた（表 4-3 参照）。

表 4-3 「ダンスに関する発展会議」で議論されていたそれぞれのダンスに関する専門職が必要とする能力

ダンサー	<ul style="list-style-type: none"> a. 優れたダンス・アーティストや異なる文化の技術や理論の理解 b. 様々な状況下で上演される作品のスタイルとレパートリーの経験 c. 歌うこと、演じること
振付家	<ul style="list-style-type: none"> a. ダンサーの項であげたもの b. 創作作品における経験 c. 映画やテレビ、大規模な舞台、音楽劇場で求められる技術
教師	<ul style="list-style-type: none"> a. 児童・生徒の発達 b. 学習の心理学 c. 様々な年齢集団にダンスを教える際の原則 d. 経営
ダンス・セラピスト	<ul style="list-style-type: none"> a. 行動科学 b. 精神的にハンディをもつ個人を相手にした経験 c. 身体的にハンディをもつ個人を相手にした経験
映像技師	<ul style="list-style-type: none"> a. 静止写真、映画、テレビの制作 b. 映画を撮る経験
ダンス・ノーテーター（舞踊譜士）	<ul style="list-style-type: none"> a. 発展的な記譜 b. ダンス作品を記譜する経験
批評家／歴史家	<ul style="list-style-type: none"> a. 歴史と文学 b. 批評史 c. 歴史学的方法論と書誌学 d. ジャーナル執筆や歴史学的書物執筆の経験
音楽家、ダンス音楽作曲家	<ul style="list-style-type: none"> a. 音楽史 b. 民族音楽学 c. 様々な楽器での即興 d. ダンス創作の経験
民族学者	<ul style="list-style-type: none"> a. 人類学、民俗学、神話学 b. 民族音楽学

	c. 民族舞踊
テクニカル・スタッフ	a. 舞台デザイン b. 照明デザイン c. 衣装の歴史 d. 衣装のデザイン e. ステージ・マネジメント f. 上述の領域における技術的な経験

出典：Hawkins, A. et al. (1968). The undergraduate dance major curriculum. in *Impulse: annual of contemporary dance 1968*. Temple University Digital Collections. pp.110-111. より引用

これらの専門分化が想定されていたのは主に大学院レベルであるが、ダンスに関する専門職の種類とそれぞれにおいて必要とされる能力に関する議論が深められていたことが窺える。

ホーキンスは「ダンスに関する発展会議」のなかで、ダンス・デパートメントが驚くべきスピードで誕生しているとし、「ダンスは人間の経験の重要な領域として、そして歴史や言語、英語と同じように学問として認識されている。予算援助によりダンス・デパートメントが設立されつつあるという事実はダンスを学問として考える価値があり、高等教育における構造のなかに居場所を見つけていると経営陣が考えていることを示唆している」と、高等教育におけるダンスの現状を明るい展望をもって論じている²⁴。また、ホーキンスは高等教育機関のダンスの目的は学校でダンスを教える教員の輩出やプロの世界で活躍する上演家・振付家の輩出に矮小化されるべきではなく、文化的遺産の伝承、個人の社会的成熟、学問の境界の再構築という、教育の3つの目的に沿った形で「学問としてのダンス」の役割を考察するべきであると述べた²⁵。もはや身体教育やレクリエーションの付属物としてではなく、学問的独自性を有する分野としてダンスを位置付け、その内容や目的を究明することがこれらの会議の目的であった。

第3節 会議後のウィスコンシン大学マディソン校におけるダンス

1960年代までに設立された高等教育機関におけるダンス専攻の多くはいまだにダンスを身体教育の一部として位置付けていたが、1970年代になると *Impulse* 誌で論じられていた通り、ダンスを身体教育ではなく芸術に位置づける高等教育機関が数多く誕生する。これら高等教育におけるダンスの在り方を論じた会議に刺激され、ウィスコンシ

ン大学マディソン校のダンスや州におけるダンス教育も新たなあり方を模索するようになる。1960年代のウィスコンシン州の多くの公立学校において、学校ダンスは身体教育として扱われていたのだが、「ダンスに関する発展会議」に参加したメンバーらによってダンスを芸術教育として扱おうとする動きが生まれる。1965年の「学問としてのダンス会議」の後、それまでマディソンやミルウォーキーなど地域的な存在にとどまっていたダンスに関する組織を統合しようと、1966年にはウィスコンシン大学スティーブンス・ポイント校において「ダンスを通じた国際理解に関する会議 (Conference on International Understanding Through Dance)」が開催される。この会議を通じ、芸術形態であり文化的な表現であるすべてのタイプのダンスの理解を促進する目的で州レベルでのダンス組織であるウィスコンシンダンス会議 (The Wisconsin Dance Council: WDC) が誕生する²⁶。

クロッパーらは WDC の活動を通じてウィスコンシン州内におけるダンスの興隆を目指すのみならず、ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンス部会の地位向上に向けて精力的に活動するようになる。1967年2月9日に行われたダンス部会の運営会議では、女性身体教育デパートメント長であるハルヴァーソン (Lolas Halverson) に身体教育デパートメントの組織改編について意見書を提出することが決まる。その約一ヶ月後の3月7日にはクロッパーからハルヴァーソンに向けて以下のような意見書が提出された。

1967年3月7日

To: ロラス・ハルヴァーソン デパートメント長
女性身体教育デパートメント

From: ルイズ・クロッパ 准教授 ダンス部会長

我が国の様々な大学においてダンス・デパートメントは独立した地位を得るに至り、また州内の大学にもそのような動きが見られること（ウィスコンシン大学ミルウォーキー校、ウィスコンシン州立大学スティーブンス・ポイント校でも身体教育デパートメントと芸術デパートメントで承認される予定である）を鑑み、ウィスコンシン大学マディソン校女性身体教育デパートメントのダンス部会は、アイデンティティを求めて以下の組織体制の検討を要請するものである。

1. 女性身体教育デパートメントの組織を以下のように定義すること：
 - I. 女性身体教育デパートメント
 - A. 専門部会
 - B. 一般部会 (a. 選択 b.必修)
 - C. ダンス部会 (男女共学)
2. それぞれの部会に部会長を置くこと
3. ダンス部会は独自のレターヘッド付き便箋を使用すること

図 4-2 クロッパからハルヴァーソンに提出された意見書 (The University of Wisconsin-Madison. (1969). Memorandum. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.より引用)

この意見書を読むと、他大学におけるダンス・プログラムの地位の変化が意見書の動機として挙げられていることがわかる。クロッパの提案はこの時点ではダンス部会をデパートメントとして独立させることではなく、非公式に存在してきたダンス部会を女性身体教育デパートメントの下に明確に位置付け、身体教育学を専門とする他の部会と同等の地位を得ること、公認の部会長職を置くことに主眼が置かれていた。続く 1967年4月13日のダンス部会の運営会議では、ハルヴァーソンから意見書に対する返答が

示されているが、新部会の所在地や組織運営に専門的に携わる職員の配置などについて具体的な提案がなされた²⁷。

1926年に身体教育デパートメントにダンス専攻が設置されて以来、初めて独立した体制をもった正式な「ダンス部会」の設置が目指されたのであるが、1969年になるとダンス部会ではなく独立した「ダンス・デパートメント」の設置が審議されるようになる。しかしながら、この時点ではそのような組織体制を実現するための明確なビジョンが設定されていたわけでもなく、審議に必要な情報も揃っていなかった。最終的な結論は1969年12月16日に行われたダンス部会の教員とペッツォルト副教育学部長との会議で示されることとなる。この会議の様様をマッカーティー教育学部長らに報告しているペッツォルト副教育学部長の書簡が、当時の議論がどのようなものであったかを物語っているので参照しておこう。

書簡ではまず、ダンス・デパートメントの独立を求める正式な提案書が教育学部長宛てに提出されていないことが指摘され、提案書なしでは今後の審議は不可能との判断が示された。提案書には独立が必要な理由やデパートメントで提供されるプログラムの内容、教職員や予算の詳細が明記される必要があり、もし今後デパートメントとしての独立を求める場合には、そのような提案書を作成して女性身体教育デパートメントに提出するようペッツォルト副教育学部長から提案がなされた。

また、この時期に教育学部内では初等教育プログラムと計量心理学プログラムがデパートメントとして独立を望んでおり、これらのグループの提案が承認されるまではダンス・デパートメントを創設することは政治的に得策でない可能性もあることを考慮する必要があるとの所感も示された。

「ダンス・デパートメントが独立することで教職員のアイデンティティは明確になるであろう」と、ペッツォルト副教育学部長個人の考えも示されているが、デパートメントの独立に付随するデメリットも同時に考慮しなければならないと指摘されている。具体的には、小規模なデパートメントは大所帯のデパートメントに比べて必然的に予算獲得に困難を強いられること、ダンス部会が使用しているラスロップ・ホール (Lathrop Hall) をデパートメントとして独立して以後も使用し続けられる保証がないことが、ダンス・デパートメントとして独立した際に浮上するであろう課題として挙げられている。

ダンス・デパートメント設立のための委員会が設置されているわけではなく、また関係者間での明確な合意にも至っていないことから、ペッツォルト副教育学部長は当時の議論を「説明段階」とであると記している。将来的には芸術学部や舞台芸術学部の設立のような形でのダンス・デパートメントの独立も考えられるとの可能性が示されていたが²⁸、当時の段階での独立構想は時期尚早と判断され、提案は白紙に戻される結果となっ

た²⁹。

この時期のダンス部会の独立を目指した動きは、ウィスコンシン大学マディソン校のダンスにとって、どのような歴史的含意を持つものであるか確認しておきたい。前章で示した通り、1926年にドゥブラーがリーダーシップをとってダンス専攻を設立した際、そのミッションは初等中等教育機関及び高等教育機関で教鞭をとるダンス教員の養成に置かれていた。ドゥブラーの引退後、クロッパーらが目指した方向性は、ダンス教員の養成という機能を維持しつつも、将来ダンサーや振付家を目指す学生たちに向けて、応用専攻や修士（芸術学）学位（M. F. A.）取得が可能なプログラムを付加的に開設するというものであった。注目すべきは、1960年代後半になってデパートメントとしての独立を試みた際、ダンス教員の養成あるいは上演芸術家の輩出のどちらかにミッションを偏らせるのではなく、その両方を包含しつつ地位向上を図ろうとした点である。クロッパーが独立に向けて行動し始めた1960年代後半、既に独立したデパートメントとしての地位を得ていたユタ大学やカリフォルニア大学ロサンゼルス校のダンス・デパートメントでは、そのミッションがダンサーや振付家などの上演芸術家の輩出に置かれていた。「学問としてのダンス会議」や「ダンスに関する発展会議」に参加したクロッパーらは実際に下記のような表を作成して、他の大学におけるダンスの状況を参考にしながらダンス部会の充実を議論していた。

表 4-4 1970年当時のウィスコンシン大学マディソン校および他大学のダンス・デパートメントの状況

大学（代表者）	常勤 教員	学部 生	大学 院生	PH. D. プ ログラム	所属デパートメント
カリフォルニア大学アーバイン校（ユージン・ローリング）	3	72	4	なし	ダンス・デパートメント（上演芸術学部）
UCLA（アルマ・ホーキンス）	9	135	65	なし	ダンス・デパートメント（上演芸術学部）
オハイオ州立大学（ヘレン・アルカイア）	10	98	12	なし	ダンス・デパートメント（上演芸術カレッジ）
イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校（マーガレット・アーランガー）	7	93	20	なし	ダンス・デパートメント（上演芸術カレッジ）

メリーランド大学 (ドロシー・マデン)	9	65	0	なし	不明
ユタ大学 (エリザベス・ヘイズ)	4	170	21	なし	ダンス・デパートメント (上演芸術学部)
フロリダ州立大学 (ナンシー・スミス)	4	40	18	なし	ダンス・デパートメント
ハワイ大学 (カール・ウォルフ)	2	不明	不明	なし	演劇デパートメント
オハイオ大学 (シャーリー・ウィマー)	4	30	0	なし	ダンス学部 (上演芸術カレッジ)
ウィスコンシン大学マディソン校 (ルイーザ・クロッパー)	5	52	24	あり	女性身体教育デパートメント

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1970). Dance 1968-69. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

表 4-4 に明らかなように、常勤教員と学部生の人数から見ると、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムの規模はこの表の中では中程度ということになる。しかしながら、他大学においては上演芸術カレッジや上演芸術学部の中でダンス・デパートメントが設置されているのに対し、ウィスコンシン大学マディソン校では依然として女性身体教育デパートメントの下位プログラムとしてダンス・プログラムが存在しているに過ぎなかった。このように他の大学においては既に「ダンス・デパートメント」が置かれている状況を参酌しつつも、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス部会は、「ダンス教員養成の先駆的存在」としてのアイデンティティを積極的に保持しようと努めた。一方で、ダンス部会が掲げるミッションの多義性は、ダンス・デパートメントとしての独立するための積極的な意義付けを困難にしていたと考えられる。女性身体教育デパートメントの下部組織としての位置付けを脱するためには、ダンス部会が女性身体教育デパートメントとは全く異質な存在であることを強くアピールする必要があったとも考えられ、教員養成機能を保持することはダンス部会が際立った個性を発揮する上での障壁となっていた可能性は指摘できる。

実際、ダンス部会内部でも女性身体教育デパートメントからの独立を目指すのではなく、むしろ女性身体教育デパートメントと歩調を合わせることの必要性を訴える教員もいた。ラバノテーションや運動感覚学の研究者であるブレナンは、ダンスと身体教育はそれぞれにデパートメントとして独立することで果たすことのできる目的がある一方

で、二つの領域には互いを利する共通の興味が存在するとし、その理由を4点あげている。すなわち、①運動が全人的成長にとって重要であるというような共通の哲学に基づいて、ダンスと身体教育が歴史的に大学の中で発展してきたこと、②運動の教育 (Movement Education) としての身体教育はダンスと目的や方法が似通っている点があること、③女性身体教育デパートメントの身体教育専攻のカリキュラムにおいて、ダンスを経験させることが学生にとって必要であるとの認識が教員の中にあること、④運動科学だけでなく行動科学の知見を取り入れた身体教育の研究からダンスの研究は利するところがあり、知識の共有が双方にとって有益であることである³⁰。当時、ダンス部会の中にも、ブレナンのようにダンスの教育的役割を重視し、身体教育とダンスの共通性を強調するとともに、組織としての連続性を重視する立場が存在し得た背景には、ダンスが芸術的側面と体育的側面を併せ持つ領域として認識されていた事実がある。学問としてのダンスの二面性のうち、そのどちらが強調されるかは、その時々ダンス・プログラムをめぐる社会的状況や学内組織の状況によって変化するが、1972年の教育修正法第9篇 (タイトル IX) の施行に伴い、ウィスコンシン大学マディソン校において身体教育デパートメント及びダンス部会の上位機関である女性身体教育デパートメントは組織再編を迫られることになる。次章では1970年代の変遷について見ていこう。

¹ Mulcahy, K. V. (1999). Cultural diplomacy in the post-cold war world. in *the Journal of Arts Management*. vol.29(1). p.13.

² Cummings Jr., M. C. (1991). Government and the Arts: An Overview. in Benedict, S. (ed.) *Public Money and the Muse: Essays on Government Funding for the Arts*. New York: The American Assembly. p.44.

³ Prevots, N. (1998). *Dance for export: cultural diplomacy and the cold war*. Connecticut: Wesleyan University Press. p.42.

⁴ *Ibid.*, pp.99-100.

⁵ *Ibid.*, p.91.

⁶ *Ibid.*, p.128.

⁷ *Ibid.*, p.135.

⁸ 片山泰輔. (2006). アメリカの芸術文化政策. 日本経済評論社. p.71.

⁹ Bauerlein, M. (2009). *National Endowment for the Arts: A History 1965-2008*. Washington: the National Endowment for the Arts. p.15.

¹⁰ 片山. (2006). *op. cit.*, p.94.

¹¹ *Ibid.*, p.95.

¹² Bauerlein. (2009). *op. cit.*, p.20.

¹³ *Ibid.*, p.174.

¹⁴ ベニントン・スクール・オブ・ダンスは、1928年にベニントン・カレッジの学長に就任したロバート・リー (Robert Leigh) が当時ニューヨーク大学で教鞭をとっていたマーサ・ヒルに打診したことをきっかけに、1934年の夏からサマー・プログラムとしてスタートした。モダンダンスの草創期に活躍したマーサ・グレーム、チャールズ・ヴァイドマン (Charles Weidman)、ドリス・ハンフリー、ハンヤ・ホルム (Hanya

Holm) がモダンダンス・テクニクを担当し、基礎的なテクニクやダンス・コンポジションはヒル自身が担当していた。またダンス史およびダンス批評を担当していたのは、1927年にニューヨーク・タイムズ誌のダンス批評家に指名されたジョン・マーティン (John Martin) であった。サマー・プログラムとしてではあったが上演家・振付家を志す多くの学生が受講し、アメリカの高等教育における芸術としてのダンス実践の先駆けとして位置付けられる (McPherson, E. (2013). *The Bennington School of the Dance: A History in Writings and Interviews*. North Carolina : Mcfarland & Co Inc Pub.)。

¹⁵ *Ibid.*, p.190.

¹⁶ Smith, W. N. (ed.) (1967). *Focus on dance: Dance as a discipline*. Washington: American Association for Health, Physical Education, and Recreation. p.2.

¹⁷ *Ibid.*, p.195.

¹⁸ 1990年代に Human Kinetics Publishers 社より発刊されている同名のジャーナルとは異なる媒体である。

¹⁹ Hagood, T. K. & Kahlich, L. C. (2013). *Perspectives on Contemporary Dance History: Revising Impulse, 1950-1970*. New York: Cambria press. p.xx.

²⁰ Lippincott, G. (1965). Report of the Arts in Government, Education, Community 1965. in *Impulse: annual of contemporary dance 1965*. Temple University Digital Collections. p.8.

²¹ Hagood. (2000). *op. cit.*, p.191.

²² Hawkins, A. et. al. (1965). The undergraduate dance major curriculum. in *Impulse: annual of contemporary dance 1965*. Temple University Digital Collections., pp.102-103.

²³ *Ibid.*, p.104.

²⁴ Hawkins, A. (1968). A look to future. in *Impulse, annual of contemporary dance 1968*. Temple University Digital Collections. p.97.

²⁵ Smith. (1967). *op. cit.*, pp.10-11.

²⁶ ウィスコンシンダンス会議ホームページより (wisconsin舞蹈council.org)。WDC の設立は後の 1978 年のダンス教育ガイドラインの作成へとつながっていく。同ガイドラインは公立学校におけるダンス教育の指針となるものであり、その作成は州教育庁や他の芸術教育団体等と共同し WDC が主導する形で行われた。ウィスコンシン州は、その後他の州でも進められる州レベルでのダンス教育ガイドラインの作成を先駆ける存在となった。

²⁷ The University of Wisconsin-Madison. (1969). Memorandum. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

²⁸ 1969年から1970年にかけて、教育学部に位置づけられていた芸術デパートメントからダンス部会に対して芸術学部の設立構想が示され、ダンス部会の教員たちもその構想に賛同していた。しかしながら、結果的にこの構想は実現されず、芸術デパートメントもダンス部会も共に教育学部の下部組織として維持されることになった。

²⁹ The University of Wisconsin-Madison. (1970). Dance 1968-69. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

³⁰ *Ibid.*

第5章 身体教育デパートメントの改組とダンスのアイデンティティの模索

ダンス部会の部会長を務めたクロッパーは、男女身体教育デパートメントの統合期を振り返り、デパートメント内からではなくデパートメント外からもたらされた議論であったと回想している¹。ウィスコンシン大学マディソン校では 1976 年の統合デパートメントの設立まで、男女別の身体教育デパートメントが設置されており、相互に独立した運営を行っていた。しかしながら、1970 年代になると、クロッパーの回想に見られるように男女別デパートメントの廃止と統合・改組の動きが全米を席卷し、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス部会も独立したデパートメントの設立を目指すのか、統合デパートメントの下位組織としての生き残りを目指すのか、選択を迫られていた。

本章では、1972 年のタイトル IX の成立を受け、ウィスコンシン大学マディソン校の男女身体教育デパートメントの統合がどのように進められたのか、その中でダンス部会の教員たちはどのように自分たちのアイデンティティを模索していたのかを検討する。結果として、ダンス・プログラムは新設された身体教育・ダンス・デパートメントの下位プログラムとして位置付けられることになるのだが、その背景には新たにダンス・デパートメントとして独立するよりも、「教育」を媒介項として身体教育とダンスの親和性を強調し、身体教育の枠組みにとどまることで安定した地位を確保しようとしたダンス部会の教員たちの思惑があったと推察される。

第1節 タイトル IX の成立と男女身体教育デパートメントの統合

これまでに見てきたように、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムは、1926 年のダンス専攻の設置以後、女性身体教育デパートメントにおいて提供されてきた。1970 年代になると、男女平等を促進する連邦法の成立を受けて、女性身体教育デパートメントが解体され、ダンスを取り巻く状況が大きく変化する。

1972 年、教育修正法第 9 篇（タイトル IX）の成立により、連邦政府の財政援助を受けているすべての教育機関において性差別や男女別教育プログラムが禁止された。その内容は以下の通りである。

アメリカに住むいかなる人も、性別に基づき、連邦政府の援助を受けているいかなるプログラムや活動においても排除されたり、差別されたり、恩恵を受けられなかったりしてはならない。²

続いて 1974 年には教育機会均等法が制定され、州政府が人種や性別によって生徒に平等な教育機会を与えないことを禁止した。このような動きは高等教育機関の身体教育のありようにも大きな影響をもたらした。同法の成立以前には男性が新しい施設や設備を使う一方で、女性が男性の「おさがり」を使っていたり、男女のスポーツチームにおいて男性が新しいユニフォームを身に纏う一方で、女性が授業用のユニフォームを試合でも使用していたりということが珍しいことではなかった³。すなわち「分離しているけれども平等」という概念のもと、男女間での待遇の違いが当然視されていたのである。ウィスコンシン大学マディソン校においても例外ではなく、それまで男子学生と女子学生の間には、キャンパスにおける体育施設の使用やプログラム参加の機会の平等性の点において著しい差異が存在していたが、1972 年のタイトル IX の成立を受けて男女間の不平等が見直されるようになる。ウィスコンシン大学の総長であるエドウィン・ヤング (Edwin Young) は 1972 年から 1973 年にかけて学内の女性競技スポーツに関する委員会を立ち上げ、特にそれまで男女間で不平等であった体育施設の使用や学事歴の見直しについて諮問した。ヤング学長の諮問を受けて委員会は提言を行い、結果としてそれまで男性のみに利用が制限されていた施設にロッカーやシャワールームを設置し、競技スポーツだけでなく、レクリエーション活動を行う女子学生をも考慮に入れた環境改善がなされることとなった⁴。1974 年にはそれまで行われていなかった、バスケットボール、クルー、クロスカントリー、フェンシング、フィールドホッケー、ゴルフ、体操、水泳・ダイビング、テニス、陸上競技、バレーボールの 11 種目が女性の大学間対抗試合でも行われるようになった⁵。

タイトル IX の施行以前、ウィスコンシン大学マディソン校では、男性の教職員と女性の教職員の間で様々な差異が存在していた。下記の表は 1969-70 年度のウィスコンシン大学マディソン校における教員の人数及び平均給与を、男女別に比べたものである。

表 5-1 1969-70 年度のウィスコンシン大学マディソン校における教員の人数及び平均給与額の男女差

職位	教員数						平均給与 (アメリカドル)			全体平均
	人数			F. T. E. ⁶			男性	女性	差額	
	男性	女性	合計	男性	女性	合計				
教授	382.03	10	392.03	374.26	9.5	383.76	19,598	16,184	3,744	19,514
准教授	160.35	8.52	168.87	158.55	8.52	167.07	13,423	12,265	1,148	13,364
助教授	241.5	29.91	271.41	238.21	29.91	268.12	11,059	10,840	219	11,034
専任講師	25	13.45	38.45	25	11.45	36.45	9,249	8,886	363	9,135

出典：Author and date unknown. Interim report on study of status of academic women. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.より筆者作成

表に明らかなように、教員数を見ると、圧倒的に男性教員の方が多いことが読み取れる。この傾向は職位が上がるにつれて顕著であり、講師だと男女比は約 1.85 倍であるのに対し、助教授だと約 8.07 倍、准教授で約 18.82 倍、教授では約 38.2 倍にも達している。また、平均給与額の差を見ると、男性教員は女性教員に比して高めの給与を得ていたことがわかる。特に教授の給与を比較すると、男性教授は女性教授の給与に比して 21%ほど多く給与を支払われている。もちろん、給与比較の際には性差のみならず学歴や経験、研究分野における業績等が考慮されるべきであるが、少なくとも 1970 年当時、ウィスコンシン大学マディソン校の教員は圧倒的に男性で占められており、マイノリティである女性教員は給与面で見ても男性に比して冷遇されていたことは指摘できよう。

さて、ウィスコンシン大学マディソン校では、このような男女間の格差を是正するため 1970 年ごろから調査が開始され、保健教育福祉省 (Department of Health, Education, and Welfare) の指導のもと、格差是正処置計画の作成が進められた。ここでは女性教員を積極的に雇用することや、女性が結婚していることを理由にした昇進や給与面での差別の禁止、産休・育休の保障、昇進やテニユアに関する取り決めとともに、学生が享受する教育プログラムにおいて、女性的な役割を身につけさせることを目的としているものを見直すことなどが提案された⁷。また 1971 年 2 月 16 日には学部長会から各デパートメント長に対して教職員間の男女格差是正を促すメモが配られ、男性教員と女性教員の給与を比較し、同一の条件で適正に給与が決定されているかを確認することや、女性教員の職位が適正であるか確認すること、女性教員が結婚していることを理由に昇進や昇給を拒否する状況がないようにすることなどが指示された⁸。

このような動向の中で、それまで男女別に存在していた男性身体教育デパートメント⁹と女性身体教育デパートメントのあり方についても見直しが進められる。1971年には男性身体教育デパートメント内に設置されたデパートメント再組織委員会において、議長から組織再編の方向性として①現状維持（別々のデパートメント組織を維持）、②男性身体教育デパートメント内における組織再編、③統合デパートメント、④別々のデパートメント組織を維持したまま授業を共学で行う、という4つの可能性が提示された。会議では中西部の他大学の状況も紹介されており、別々のデパートメント構造を維持している大学としてはウィスコンシン大学マディソン校のほか、アイオワ大学、パーデュ大学が挙げられており、逆に男女の身体教育デパートメントが統合された大学としてはミシガン大学、ミシガン州立大学、ノースウエスタン大学、オハイオ州立大学が挙げられている。当時の身体教育デパートメントの教員たちが他大学の動向を見ながら、これまで通り男女別々のデパートメント構造を維持するべきか、デパートメントを統合するべきかを慎重に議論していた様子が窺える¹⁰。これ以後も身体教育デパートメントの統合についての議論が進められていくが、前述したようにこのころの身体教育デパートメントは男女別々に運営されており、その議論も男女それぞれのデパートメントの中で別々に進められていった。

1973年には男女身体教育デパートメントの代表からなる合同委員会が組織され、翌1974年4月26日には男性身体教育デパートメントの学部プログラムの説明が女性身体教育デパートメントの教員に対して、また女性身体教育デパートメントの学部プログラム及びダンス・プログラムについての説明が男性身体教育デパートメントの教員に対してそれぞれなされた¹¹。ダンス・プログラムについての説明の機会が一般身体教育プログラムと別個に設けられていたことを鑑みると、男性身体教育デパートメントの教員にとってダンス・プログラムが「異質」なものとして認識されていたことが推察できる。

このように男女身体教育デパートメントの統合が模索され始めた渦中、ダンス部会は女性身体教育デパートメント内で新たな提案を行う。1974年5月13日の女性身体教育デパートメント教授会において、デパートメント名称をそれまでの女性身体教育デパートメント（Department of Physical Education for Women）から身体教育・ダンス・デパートメント（Department of Physical Education and Dance）へと変更する案が、ダンス部会長のフィーを中心とするダンス運営委員会よりなされた。元々の案はデパートメント名称に「ダンス」の名前を加えることを求めるものであったが、女性（women）の表記を名称から取り除くことが提案・承認され、最終的にはデパートメント名称を身体教育・ダンス・デパートメントとすることが全会一致で承認された¹²。続いて、スローン女性身体教育デパートメント長からマッカーティー教育学部長に対し、デパートメ

ント名称の変更を求めるレターが提出された。レターの中では、女性身体教育デパートメントの名称変更は、デパートメントの強みをより正確に反映し、国内及び国際的にも高い評価を与えられているウィスコンシン大学マディソン校のダンスへの認知を永続的に高めるものであると、デパートメント名称変更の理由が述べられている¹³。1974年8月6日にはマッカーティー教育学部長からヤング学長へと女性身体教育デパートメントの名称変更を提案するレターが提出された¹⁴。

この年の8月には男女身体教育デパートメント長とマッカーティー教育学部長を交えた会議が集中して行われた。その中で、男女身体教育デパートメントの統合に関する議論は継続されるものの、現時点では両デパートメントはそれまでと同じように別々に運営されていく方針が示された。この時、コンタクトスポーツを除く授業を男女共習で行うことや、施設の使用権は男女平等に行使されることなどが確認されている。新学期が開始された1974年9月には女性身体教育デパートメントの教授会の中でこの議論が報告された¹⁵。9月23日にはマッカーティー教育学部長から男女両身体デパートメント長に対し、男女身体教育デパートメントの統合が教員に受け入れられているか、もし受け入れられているとすれば、どのような組織構造が望ましいと考えているかを問うレターが出され、組織構造の変更を最も円滑に行えるのは予算編成のタイミングであることから、12月15日までに正式な結論を出すように指示が出された¹⁶。

これを受け、1974年10月には、男女身体教育デパートメントの統合に関する議論がいよいよ大詰めを迎える。10月24日、女性身体教育デパートメントでは、デパートメント統合についての熟議を引き続き継続するか、デパートメント統合を前提に議論を進めるのかについて意見が交わされた。結論は出ず、最終投票は10月31日に行われることとなった。教授会では以下の動議が提出された。

女性身体教育デパートメントの身体教育及びダンスの教員は今日、統合を男女身体教育デパートメントの教員の目的とすることに賛成し、速やかに〔統合デパートメントの〕形式と内容について議論を始めることに賛成する。それぞれのデパートメントは意思決定を行うにあたって均等に代表を選出する。例えば、それぞれの統合計画は採択される前にそれぞれのデパートメントにおいて承認されなければならない。¹⁷

意思決定における男女身体教育デパートメントの平等性を明示しているところを見ると、統合により女性身体教育デパートメントの教員たちが不利な立場に置かれることを警戒していたことが推察される。この動議に対しては一人を除いて全員が賛成し、可決されることとなった。また、統合デパートメントの形式と内容について議論する委員

会には教員 3 名、学生 1 名を選出し、教員の内訳は身体教育部会から 1 名、ダンス部会から 1 名、女性身体教育デパートメント長とすることも提案・可決された¹⁸。Verbrugge (2012) は、20 世紀前半のアメリカの高等教育機関において、女性の身体教育者が「二次的な地位 (second-class status)」しか与えられておらず、過重な労働負荷が課されている割に自律性が十分に与えられていなかったと指摘している¹⁹。男女身体教育デパートメントの統合にあたり、女性身体教育デパートメントの教員たちが男性と対等に意見交換し、意思決定に携わることのできる体制をいかに確保するかが、彼女たちにとっての重要課題であった。

さて、このころの教育学部及び男女身体教育デパートメントの教員構成と給与に関する資料を見ると、先に見た 1969 年度のウィスコンシン大学マディソン校全体の状況と比べて異なる点が看取できる。

表 5・2 1975 年度の教育学部教員の男女別 F.T.E. 及び年間給与額

職位		男性		女性		差額
		F. T. E.	年間給与額 (アメリカドル)	F. T. E.	年間給与額 (アメリカドル)	
教授	最高	81.92	34,990	9.57	27,820	7,170
	中央値		22,578		22,179	△399
	最低		16,153		19,000	△2,847
准教授	最高	24.08	20,520	2.75	19,010	1,510
	中央値		17,146		17,851	△705
	最低		15,250		16,900	△1,650
助教授	最高	19.85	18,862	13.75	19,010	△148
	中央値		15,094		15,334	△240
	最低		11,925		13,000	△1,075
専任講師	最高	1.6	14,500	1.95	12,580	1,920
	中央値		13,250		12,327	923
	最低		12,000		12,000	0
任期付講師	最高	14.29	14,940	16.48	17,000	△2,060
	中央値		12,376		11,724	652
	最低		9,381		10,000	△619

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1975b). Report on the status of women and

minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.より筆者作成

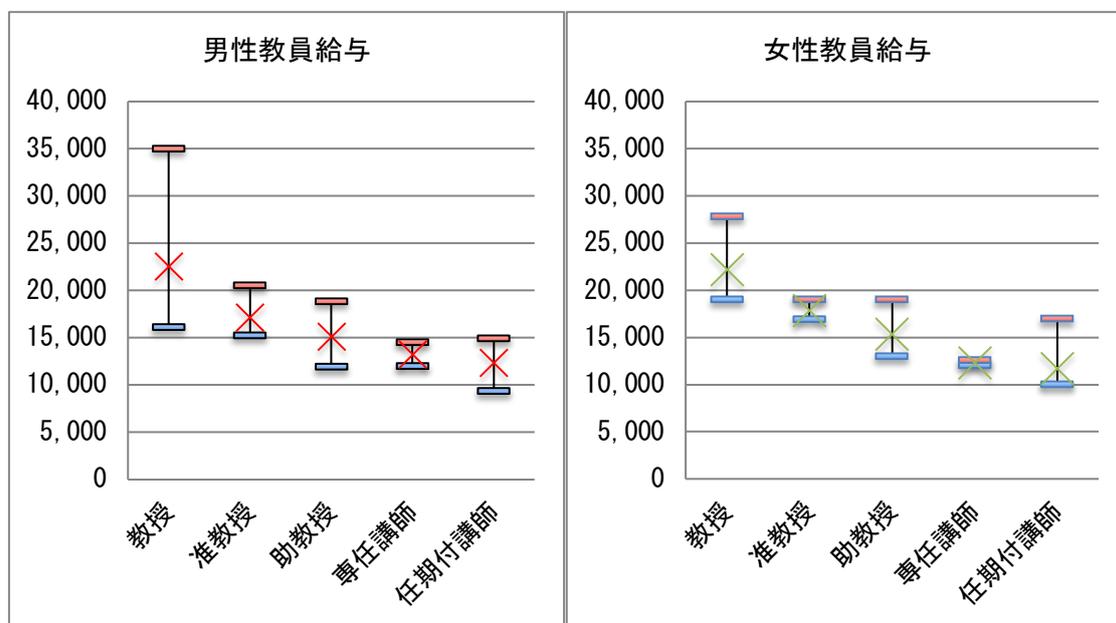


図 5-1 1975 年度の教育学部教員の職位別給与 (The University of Wisconsin-Madison. (1975b). Report on the status of women and minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.より筆者作成)

表 5-2 及び図 5-1 には 1975 年度のウィスコンシン大学マディソン校教育学部の男女別 F.T.E.と年間給与額を示してある。依然として教授、准教授のほとんどが男性で占められており、全体として女性教員の職位は低いことが読み取れる。しかしながら、給与面での差異はそれほどなく、中央値で比較すると教授、専任講師、任期付講師では男性教員の給与の方が高いものの、准教授及び助教授では女性教員の給与の方が高くなっている²⁰。教育学部の中でも男女身体教育部門の教員の F.T.E.と年間給与額を比較したものが以下の表とグラフである。

表 5-3 1975 年度の男性身体教育デパートメントの男性教員及び女性身体教育デパートメントの女性教員の F.T.E.と年間給与額

職位		男性身体教育デパートメント		女性身体教育デパートメント	
		F. T. E.	年間給与額 (アメリカドル)	F. T. E.	年間給与額 (アメリカドル)
教授	最高	7. 04	26, 025	6. 42	27, 820
	中央値		20, 618		22, 401
	最低		16, 153		19, 200
准教授	最高	2. 25	18, 200	1	19, 010
	中央値		17, 770		19, 010
	最低		17, 200		19, 010
助教授	最高	4. 15	15, 100	4. 5	18, 020
	中央値		13, 885		15, 528
	最低		11, 925		14, 000
専任講師	最高	1	12, 000	1. 5	12, 580
	中央値		12, 000		12, 290
	最低		12, 000		12, 000
任期付講師	最高	4. 48	14, 940	6. 98	14, 220
	中央値		12, 240		11, 957
	最低		9, 381		10, 000

出典 : The University of Wisconsin-Madison. (1975c). Report on the status of women and minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.より筆者作成

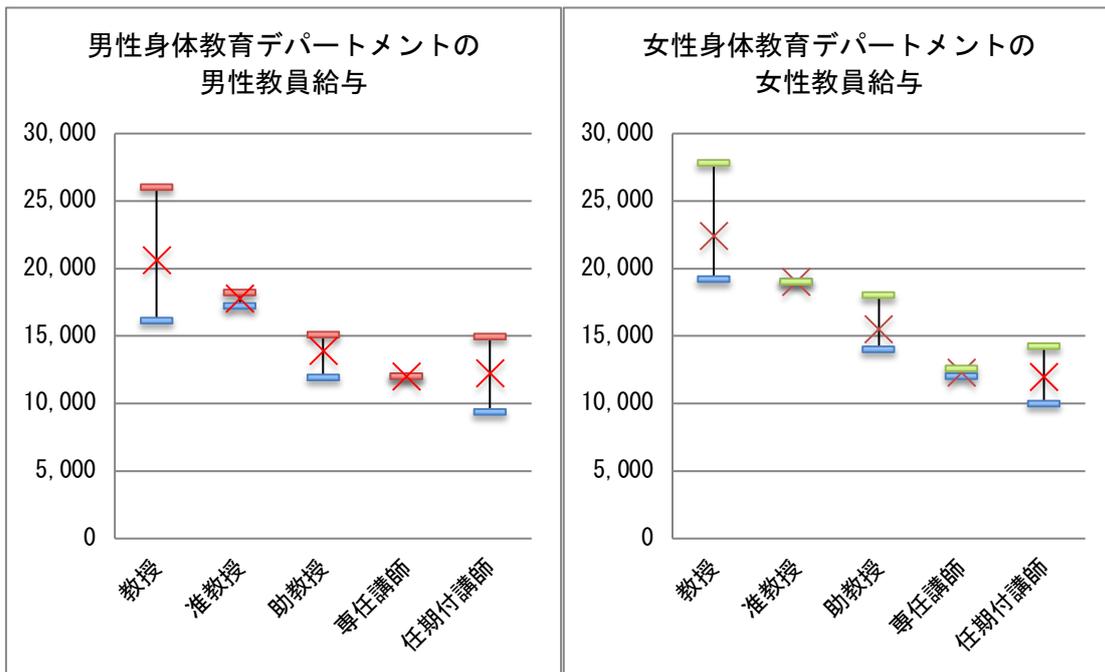


図 5-2 1975 年度の男性身体教育デパートメントの男性教員及び女性身体教育デパートメントの女性教員の職位別給与 (The University of Wisconsin-Madison. (1975c). Report on the status of women and minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.より筆者作成)

表 5-3 と図 5-2 に明らかなように、男性身体教育デパートメントの男性教員と女性身体教育デパートメントの女性教員の F.T.E.はほとんど差がなく、教授職、准教授職の大半を男性教員が占めるという教育学部全体の傾向は見られない。職位別給与の中央値を比較しても、むしろ全体として女性教員の方が給与が高いことが読み取れる。このように、男女身体教育デパートメントの統合の議論が大詰めを迎えていた 1975 年ごろ、女性身体教育デパートメントの女性教員たちは、少なくとも給与面においては「二次的な地位」ではなく、男性教員に伍するだけの十分な人数も揃っていた。この事実は、統合後も対等な立場で意思決定を行うことができるのではないかの期待を抱かせ、統合へ向けて女性身体教育デパートメントの教員たちの背中を後押しするものであったのではないだろうか。

第 2 節 ダンス部会のアイデンティティ・ポリシー

さて、1974 年 12 月には男女身体教育デパートメントから 4 名の教員、1 名の学生がそれぞれ選出されて合同デパートメント統合委員会を組織し、統合デパートメントの在り方についての実質的な議論が進められていった。1975 年 5 月 12 日の会議では統合

に向けたスケジュールが設定され、1975年12月1日までに新デパートメントで提供するプログラムに関するワーキングペーパーを作成し、翌1976年3月までに最終計画の審議を完了させることが示された²¹。1974年末から1976年にかけて、デパートメント統合に関する議論は徐々にではあるものの既定路線として確実に進められていった。そのような中、ダンス部会の教員たちは1960年代末から続いていたデパートメントとして独立するべきか否かの議論を行っていた。1975年10月2日には、この年に新たに就任したジョン・パーマー教育学部長を交えてダンス部会の教授会が行われ、ダンス部会のデパートメントとしての独立の可能性が議論されている。パーマー教育学部長からは独立したデパートメントとなった場合には予算が著しく削減されることや、組織としての柔軟な運営が難しくなるのではとの懸念が示された²²。この時、ダンス部会の教員でテニユアをもつ教員は教授2名（メアリー・フィー、アンナ・ナジフ）、准教授1名（ティボー・ザナ(Tibor Zana)）のみであり人員不足は明らかであった。これ以後のダンス部会の関心はデパートメントとしての独立よりもむしろ、新しく組織されるデパートメントの中でいかに自分たちの存在感を確保し、高めていくかに移っていった。1976年1月27日にはダンス部会から統合委員会に対し、次のような要求書が送られている。

1976年1月27日

To: 統合委員会

From: ダンス部会

少数派グループとして、ダンス部会の教員は二つの身体教育デパートメントの統合を考慮する前に、ダンス・プログラムの要求が統合の前提条件として考慮されるべきであると感じている。

1. ダンス部会はその教員とプログラム構造に関する意思決定に関して自律性を保証されるべきである。
2. ダンス部会には運営と将来の成長のために必要となる、適切な職位を与えられた十分な数のフルタイムの教員が所属しているべきである。ダンスの授業、学生及び教員の振付・上演、教育、ダンスシアター、セラピーの三つのプログラムと大学院教育補助、大学院研究を高いレベルで行うのに十分な数の教員を保持しているべきである。
3. 上級者向けのダンスの授業に十分な数の受講生を確保するために、ダンス・プログラムに入学する初学者学生の数に制限が設けられるべきではない。十分な数の初学者学

生がいることが（ダンス・プログラムの）受講生の減少を埋め合わせるのに必要不可欠である。

4. a) 学生がコンサートの経験を通して個々の（学修を）達成するための機会を与え、
 - b) 学生と教員がそのようなコンサートを通して大学及び広くはコミュニティに対して十分な文化的貢献を果たし続けることができるよう、ダンス部会に十分な劇場スペースと施設を与えるための準備がなされるべきである。
5. 適切な運営活動のために、理事会が承認した独立したダンス学位プログラム（の設置）が進められるべきである。
6. ダンス部会は教員、教育施設、スペース、制作、それぞれの目的を達成するために必要な予算を持っているべきである。

cc: ジョン・パーマー教育学部長
 エドウィン・ヤング学長
 ムリエル・スローン女性身体教育デパートメント長
 カイ・ピーターセン男性身体教育デパートメント長
 男女身体教育デパートメント教職員

図 5-3 1976年1月27日にダンス部会から統合委員会に出された要求書(Dance Division, (1976). Physical Education and Dance Department January 27, 1976. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.より引用)

女性や非白人などのマイノリティへの配慮が大学内で高まっていたことを意識してか、身体教育領域内におけるマイノリティとして自分たちを位置付け、統合委員会に要求を出している。内容をみると、教員人事や提供するプログラムを決定する自律性、ダンスを専門とする教職員の確保、スペースや施設、予算の拡充、学位プログラムの設置など要求は多岐に渡っている。ダンス部会が位置付けられていた女性身体教育デパートメントではダンス部会に予算が割り振られ、教職員の昇進システムも一般身体教育部会の教員とは異なるやり方で運営されるなど、一定の自律性が認められていた。ダンス部会の教員にとって、統合後の新デパートメントにおいても上述の権限が認められるかどうかは大きな懸念材料であった。

また、新デパートメントにおけるダンス部会のプレゼンスを巡るこの時期の動きの中で象徴的なのが新デパートメントの名称に関する議論である。既に見たとおり、女性身体教育デパートメントの中ではデパートメント名称を新しく身体教育・ダンス・デパー

トメントとする案が可決され、学長に提出されていた。学長を補佐する立場にあるシェイン副学長からは、女性身体教育デパートメントの名称変更はデパートメント統合の議論とセットで行うべきであり、時期尚早であるとの意見が示されていたが、女性身体教育デパートメントの教員たちはデパートメント統合の議論とデパートメント名称変更の議論は別問題であると主張し、あくまでも身体教育・ダンス・デパートメントという名称にこだわり、シェイン副学長に名称変更の案件を理事会に提出するよう求める動議を可決した²³。1976年1月23日には、男女身体教育デパートメント合同の教授会が行われ、合同デパートメント統合委員会が提出した報告に基づいて議論が行われたが、その中で新デパートメントの名称については「**Human Movement (Kinetics)**」がデパートメントの内実を表すものとしてふさわしいのではないかという意見が出された。この提案に対し、ダンス部会の教員たちは強く反対し、デパートメント名に「ダンス」を盛り込むことを主張した²⁴。名称変更に関する議論は、男女各デパートメント内で持ち帰り検討されることになったのだが、1976年2月27日に行われた男性身体教育デパートメントの教授会では様々な候補の中から「身体教育・ダンス・デパートメント」が13票を集め、最多得票を得て可決された²⁵。他の候補としては「身体教育デパートメント」が5票、「身体文化デパートメント」及び「**Human Movement Studies** デパートメント」がそれぞれ1票を集めている。男性身体教育デパートメントの教員の中には、デパートメント名称に「ダンス」を加えることに対して快く思っていなかった教員もいたことが推察される。最終的にデパートメント名称に関する結論は1976年4月22日の合同デパートメント教授会で出されるのだが、「身体教育・ダンス・デパートメント」の名称に対し、33名が賛成、5名が反対を表明し、賛成多数で可決されることとなった²⁶。デパートメント名称はヤング学長にも許可され、正式に「身体教育・ダンス・デパートメント」が新デパートメントの名称になることが決まった。

身体教育的要素と芸術的要素を併せ持つダンスは、いわば身体教育分野の中では「鬼子」であり、ダンスを専門としない教員にとっては理解しがたい面もあっただろう。しかしながら、ドゥブラーのリーダーシップのもと世界初のダンス専攻を伴ってスタートしたウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラム、そしてそれを担当するダンス部会の教員の存在は、タイトルIXの施行を受けて、男女の身体教育デパートメントが統合されるという異常事態の中で、むしろ女性身体教育デパートメントのオリジナリティを担保する存在として改めて注目されたのではなかろうか。

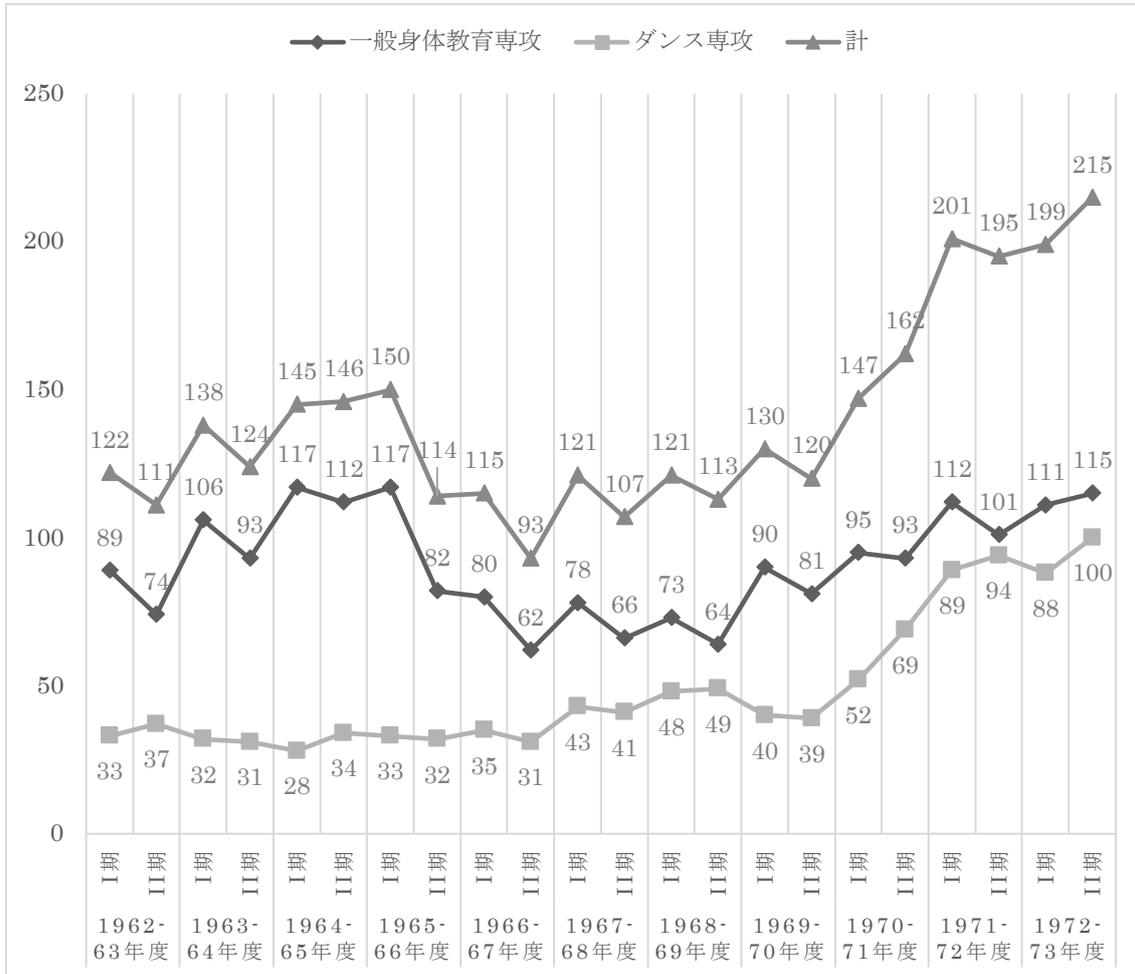


図 5-4 1962年度から1972年度にかけての女性身体教育デパートメントにおける予備入学者数の推移 (Date unknown. Preliminary undergraduate enrollment summary. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.より筆者作成)

上のグラフに示すように、女性身体教育デパートメント内においては一般身体教育専攻で学ぶ学生の方がダンス専攻で学ぶ学生よりも数が多かったが、特に1970年代に入ってからダンス専攻の学生伸び率が高く、女性身体教育デパートメント内の半数弱を占めるようになってきたことがわかる。学生数という面から見ると、ダンス・プログラムは女性身体教育デパートメントの中で重要な存在になっていった。また、女性身体教育デパートメントの一般身体教育部会の教員たちにとっても、新デパートメントで男性身体教育デパートメントの教員と対等に渡り合うために頭数を確保する必要があったはずであり、ダンス部会がデパートメントとして独立する事態は回避せねばならなかった。一方、ダンス部会の教員たちは、予算や組織規模の問題からデパートメントとしての独立を断念せざるを得ず、女性身体教育デパートメントに残らざるを得なかったため、

男女身体教育部門の統合を巡る議論の中で自分たちの存在が埋没しないよう腐心していた。ダンス部会の教員も一般身体教育部会の教員も、統合を巡る駆け引きの中で「二次的な地位」を脱するためには、「人間の運動」という共通項を軸として身体教育とダンスの垣根を取り払い、団結して事態に対処する必要があった。1930年から1962年まで女性身体教育部門で教鞭をとっていたルース・グラソウ（Ruth Glassow）によれば、1920年代以来、男性身体教育部門では競技スポーツが重視されたのに対し、女性身体教育部門ではすべての人に対して身体教育ができることを模索するという根本的な哲学の相違があったという²⁷。また、1976年度に発行されたダンス専攻の学生向けのハンドブックでも次のようにダンスと身体教育の近接性が強調されていた。

近年、人間開発の領域における発達においては、全人格的成長における運動の重要性に焦点が当てられてきた。すなわち、身体教育とダンスにおいては、人間の身体の運動、それを決定づける物理法則、そしてその受容と統制のメカニズムについての基礎的な研究により重きが置かれるべきであるということの意味している。そこでの課題は、身体教育とダンスにおいて学生が固定観念化された一連の運動のパターンを模倣するのではなく、学生が自発的で創造的になるような方法で運動経験を提供することである。運動技術の研究は関連する知識の統合を引き起こす時に極めて重要になる。身体教育・ダンスの教員あるいは教員候補として、または経験のある芸術家あるいは気鋭の芸術家として、わたしたちはプログラムのすべての参加者が、彼（女）の中に蓄積された知識と資源を、完全なる自己実現に向かって使用するよう促される環境を構築したい。²⁸

ダンスと身体教育とは、ともに学生の全人格的発達という教育的概念に寄与できるという点で共通の価値を持つものとされた。このように「教育」という媒介項を挟んでダンスと身体教育の親和性について語るという方向性は、ドゥブラーがダンス専攻を設立して以来、繰り返して用いられてきた表現であった。競技スポーツを重視し、ダンスを女性のみが履修すべきレクリエーション的内容としか考えなかった一部の男性身体教育部門の教員に対して、敢えて「ダンス」を冠した部門名称を訴えたことは、ウィスコンシン大学マディソン校における身体教育を再構築する上で、「人間の運動」を座標軸に据えるとともに、それを担う存在として女性身体教育教員の存在感を増そうという思惑の表れだったのではなかろうか。

第3節 新デパートメントにおけるダンス・プログラムとダンス部会

1976年7月1日、紆余曲折を経て、男女身体教育デパートメントは統合し、新しく身体教育・ダンス・デパートメントとして再出発した。新デパートメント長には前男性身体教育デパートメント長であったカイ・ピーターセン(Kay Petersen)が就任した²⁹。新デパートメントになってからのカリキュラム、運営面での変化について見ておこう。

男女身体教育デパートメントの統合後のカリキュラムではダンスに関する科目の扱いはどのようになっていたのであろうか。身体教育・ダンス・デパートメントが統合されて初めて作られた1977年度のカリキュラムを見てみよう。まず、ダンス専攻の学生が履修するカリキュラムである。ダンス専攻は①ダンス教育プログラム、②上演・振付プログラム、③ダンスセラピー・プログラム³⁰の3つのプログラムから構成されている。それぞれのプログラムにおいて取得必要単位数は120単位であるがその科目構成は異なっている。ダンス教育プログラムについて見てみると、36単位のリベラルアーツ科目に加え、「フォークダンス」「バレエ」「ダンス・テクニク」「子どもの為のクリエイティブダンス」「ダンス創作の理論と哲学」などの科目を含むダンス関連科目が50単位、「身体教育の教授」などの教育関連科目が13-21単位、「生理学」「解剖学」などの科学関連科目が12単位、「芸術史」などの芸術関連科目が9-12単位、それぞれ課されていた。上演・振付プログラムは1960年に設置された応用専攻から発展してできたプログラムであり、「ダンスとプロの舞台芸術」に強い興味関心を持つ学生を対象としていた。カリキュラム構成はダンス教育プログラムと概ね似通っているが、教育関連科目の履修要件がない分、選択科目が多い構成となっている。ダンスセラピー・プログラムではダンスに関する科目が36単位分と少なめであり、代わりに「ダンス・セラピー入門」「ダンス・セラピー実践のダイナミクス」などのダンス・セラピー関連科目の履修が16単位分課されている。また「心理学入門」や「行動病理学」などのダンス・セラピー実践を理論的に下支えする科目の履修が12単位分必修化されていることも特徴的である。³¹

このように見ると、男女身体教育デパートメントの統合後もダンス・プログラムのカリキュラム自体には大きな変化がないように思える。3つのプログラムのそれぞれの特徴を活かしたカリキュラム構成となっており、学生は自らの特性や興味関心に応じてプログラムを選択することが可能であった。ダンス・プログラムは新たな身体教育・ダンス・デパートメントでもその下位プログラムとして存在し、ダンスを専門的に学びたい学生のニーズを受け入れる体制は存続した。

一方、身体教育専攻の学生など、ダンス専攻以外の学生のダンス関連科目の履修には重大な変化が見られる。男女身体教育デパートメントの統合以前には、女性身体教育デ

パートメントの一般身体教育専攻の学生に「大人のためのダンス教育」や「ダンス創作」など、8-9単位分のダンス科目の履修が義務付けられていた。このような体制はダンス専攻以外の学生にもダンスをまとまって学習する機会と経験を与え、教育機関において教鞭を取るのに十分な能力を形成させることに寄与した。しかしながら、統合したデパートメントではダンス専攻以外の学生の必修科目は「フォーク・スクエアダンス」など2単位分にとどまり、選択履修を含めても3単位までと履修要件が大幅に緩和された。統合された身体教育・ダンス・デパートメントでは男女共習にふさわしい内容であるか否かを基準にカリキュラムの精選が行われたが、ダンスは女性向きの科目であると考えられ、共習体育にそぐわないとされたためである³²。その結果、ダンス専攻以外の学生はダンスの経験も興味も持たないまま課程を卒業することとなった³³³⁴。このように男女身体教育デパートメントが統合したことに伴い、ウィスコンシン大学マディソン校のダンスをめぐる環境は少なからず変容し、特にそれはダンス専攻の学生以外の、ダンス関連科目の履修機会の減少という形で現れた。タイトルIXの施行に伴い、少なくとも法的には男女平等が謳われてはいたものの、共習で行われる授業におけるダンスの優先順位はスポーツや体操といった他の領域に比して低く、皮肉なことにダンスの履修機会の拡大ではなく縮小へと道を開く結果となったのである。ドゥブラーが構想したような「すべての人にとってのダンス」というアイディアはむしろ後退し、ダンスを専門的に学びたい人にとってのプログラムという様相を強めていったと見ることができるだろう。

また運営面において、女性教員の間では幾つかの点で不満が高まっていたようである。デパートメントを統合するに際し、調査委員会を中心に新デパートメント長の就任依頼が行われていたが、第一候補であったヘンリー・モントーヤ (Henry Montoya) が就任を拒否したため、選出は難航を極めていた。結果、1976年度のデパートメント長は先にも述べたように前・男性身体教育デパートメント長のカイ・ピーターセンが務めることになったのだが、人事に関する方針や手続き、デパートメントやプログラムの責任者の男性への偏り、施設などにおいて女性教員は不利な立場に置かれているとの告発が大学の平等活動委員会 (Equity Action Committee) に対してなされている³⁵。タイトルIXの成立を受けて統合した多くの身体教育デパートメントでは、男性のリーダーの元で女性がアシスタントを務めるという構図が至るところで発生していた。男女間での意思決定権の平等などを前提に進められた統合ではあったものの、現実には統合デパートメントの中で女性が「二次的な地位」に甘んじていたのである。そのことに対する不満は、元来、芸術分野として独立したデパートメントを目指すダンス部会の中でも強まっていたようである。統合前は人間の運動に関する研究を進める教員集団として身体教

育とダンスの共通項を見出していたダンス部会の教員たちは、競技スポーツを重視する旧・男性身体教育デパートメントの教員たちと対峙する中で、アイデンティティの揺らぎを感じていた。その後のダンス部会は再び芸術系デパートメントとしての独立を目指していく。次章で見るように、1980年代になるとアンナ・ナジフのリーダーシップのもと、ダンスの上演芸術としての特質を強調し、デパートメントとしての独立を目指す動きが再び活発化し始める。

Bonbright (2007) はタイトル IX の成立を受けて、それまで身体教育デパートメントに位置付けられていたダンスが芸術カレッジや芸術学部位置付けられるようになったと指摘しているが、少なくとも本章で見てきた議事録などから浮かび上がるウィスコンシン大学マディソン校のダンス部会の姿は、そのようなケースには該当しない。同校のダンス部会は1972年のタイトル IX 施行以前からデパートメントとしての独立を模索していた。また、実際には予算を失う危険性や教員組織の不十分さから身体教育分野にとどまる選択をしたことを考えると、彼らにとってタイトル IX の施行は芸術分野への飛翔のチャンスというよりは、むしろそれまでの大学内での地位を失うリスクですらあったと考えられる。分離しているからこそ晒されることのなかった男性身体教育教員からの圧力に対峙するために、ダンスと身体教育との近接性やダンスが身体教育に対して果たす役割を強調し、身体教育分野にとどまることの積極的意義を打ち出す必要に迫られた面もあったとみるのが妥当ではないだろうか。

¹ Kloepper, L. O. (1979). *op. cit.*

² ED. gov, Title IX and Sex Discrimination, U.S. Department of Education URL: https://www2.ed.gov/about/offices/list/ocr/docs/tix_dis.html 最終アクセス日 2016年11月26日

³ Durrant, S. M. (1992). Title IX- Its power and its limitations. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*. pp.60-64.

⁴ Saunders, K. (1980). Women's athletics at Madison and Title IX. in Swoboda, M. J. & Robrets, A. J. *Women emerge in the seventies*. The University of Wisconsin Collection. pp.81-92.

⁵ The University of Wisconsin-Madison. (1985). *Wisconsin Women's Intercollegiate Sports 1984-85 10th Anniversary*. The University of Wisconsin Collection.

⁶ フルタイム当量 (Full-Time Equivalent) とはフルタイムで働く常勤職員の仕事率を1として、ある仕事に割り当てられたマンパワーを表す単位。

⁷ Author unknown. (1971). Tentative proposals for UW Affirmative Action Plan. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.

⁸ Deans of UW-Madison. (1971). Draft memo from Deans to Department Chairmen. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.

⁹ 「男性身体教育デパートメント」は正式には「身体教育デパートメント (Department of Physical Education)」と訳出すべきであるが、本研究では男女の身体教育デパートメントの区別を明確にするために「男性身体教育デパートメント」の表記を用いる。

-
- ¹⁰ Wolf, J. G. (1971). Minutes Departmental Reorganization Meeting Committee Tuesday, December 14, 1971 8:30AM. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹¹ The University of Wisconsin-Madison. (1974). Minutes of April 26, 1974 meeting of the Departments of Physical Education-Women and Men. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹² The Department of Physical Education for Women. (1974a). Department Faculty Minutes May 13, 1974 1:00-3:00 Lounge 1. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- ¹³ Sloan, M. R. (1974). A letter to Dean Donald J. MaCarty. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹⁴ *Ibid.*
- ¹⁵ The Department of Physical Education for Women. (1974b). Department Faculty Minutes 9/19/74 Seminar Rm 3:30-5:00. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹⁶ MaCarty, D. (1974). Memorandum to Professors Leonard A. Larson, Muriel R. Sloan September 23, 1974. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹⁷ The Department of Physical Education for Women. (1974c). Motions and substitute motions re integration approved by the Department of Physical Education-Women 10/31/74. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143. またこの動議の理論的根拠 (rationale) として以下の文言が付け加えられた。「女性身体教育デパートメントの教員は統合を目的とすることに賛成する。熟議の焦点は最優先の問い、すなわち、私たち (教員) が最善の方法で学生を支援するためにはどのようにすればよいか、にある。目的は男女両方 (の学生) にとって最適なプログラムを開発することであり、その次にプログラムを円滑に運営し、高めるための運営構造を作り上げることである。」
- ¹⁸ The Department of Physical Education for Women. (1974d). Department Faculty Special Meeting Minutes October 31, 1974 7:00-9:00 a. m. Seminar Room. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ¹⁹ Verbrugge. (2012). *op. cit.*, p.46.
- ²⁰ データが入手できなかったので定かではないが、一般に年齢の高い教員の給与は高くなる傾向があることから、女性の准教授及び助教授の年齢層が高かったことが予想される。
- ²¹ The Department of Physical Education. (1975). Minutes of Faculty Meeting, May 13, 1975. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ²² Dance Division. (1975). Dance Division Faculty Committee Meeting October 2, 1975 3:30- Dance Complex. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.89/79.
- ²³ The Department of Physical Education for Women. (1975). Department Faculty Minutes 2/20/75 3:30-5:30 Seminar Rm. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ²⁴ The University of Wisconsin-Madison. (1976a). Minutes of joint meeting of Faculties Physical Education and Dance January 23, 1976 3:30p.m., Room 840, WARF. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ²⁵ The Department of Physical Education. (1976). Minutes of February 27 Faculty Meeting (Men). The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ²⁶ The University of Wisconsin-Madison. (1976b). Joint Department Faculty Meeting April 22, 1976, 4:30-6:00, Unit II 1160. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- ²⁷ Glassow, B. R. (1982). UW-Madison Archives oral history project: Interview #44 Ruth B. Glassow., by Snail, L. L. Date: February 1976.

²⁸ The Undergraduate Professional Program Committee. (1976). Handbook for Dance majors. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

²⁹ Palmer, J. (1976). Memo to: University of Wisconsin-Madison Deans, Directors, and Departmental Chairmen. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.86/60.

³⁰ ダンス専攻が設立された当初から、マーガレット・ドゥブラーはダンスセラピーの実践を授業の中に取り入れていたという。1940年代後半から1950年代前半には、大学院生が教職員と共同でメンドータ州立病院を訪問し、ダンスの動きを用いた治療を模索していた。このような経緯もあり、1972年度からダンスセラピープログラムが開講された。しかしながらその寿命は短く、1983年度に同プログラムは閉鎖されている。

³¹ The University of Wisconsin-Madison. (1977). Bulletin of the University of Wisconsin School of Education 1977. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

³² Tyack, D. & Hansot, E. (1990). *Learning together: A history of coeducation in American schools*. New York: Russell Sage Foundation. p.294.

³³ Brennan, M. A. (2013). Impulse 1965. in Hagood, T. K. & Karlich, L. C. *op. cit.*, pp.317-318.

³⁴ 身体教育デパートメントを卒業する学生の多くが、初等中等教育学校で体育教員として教鞭を取っていたことを考えると、このことはウィスコンシン大学マディソン校だけでなくウィスコンシン州内の学校ダンスにも大きな影響を与えたものと推察することができる。日本で用いられているが学習指導要領のような、国が定める大綱的基準を持たないアメリカの学校教育において、学校教育で教える内容に何を含めるかという決定権は学区に委ねられている。また教職員の任免に関する権限も各学区に付与されている。学区が任用する体育教員がダンスを教えることのできる資質や能力を有していなければ、学校において子どもたちがダンスを履修する機会は著しく制限されてしまう。ウィスコンシン州内の教育機関におけるダンスの履修状況を調査した Cowan(1990)の研究によれば、1978-79年にはウィスコンシン州では約50%の学校でダンスが身体教育の一部として教えられていたものの、1987年から1989年にかけてダンスを教えていた学校は小学校が5校、中学校が4校、高校が16校にとどまっている (Cowan, K. (1990). *The current states of dance education in Wisconsin and developmental influences. A doctoral dissertation submitted to the University of Wisconsin-Madison Department of Physical Education and Dance.*). ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンス専攻以外の学生のダンス関連科目履修機会の縮小は、1970年代後半から1980年代後半にかけて、ウィスコンシン州内においてダンスを教える学校がこのように大幅に減少した要因の一つであると考えられるのではないだろうか。また、ダンス専攻内のダンス教育プログラムは、ウィスコンシン州教育省から「初等教育及び中等教育の両方で包括的なダンス・カリキュラムを組み、実行する能力を備えた教員」を輩出しようとの評価を受けていたものの、そこで学んだ学生が教壇に立つためには少なくとも身体教育を副専攻としていなければならず、さらに身体教育を副専攻として卒業した教員は卒業後三年以内に身体教育専攻か修士学位を取得しなければならないとされていた。このような当時の教員免許制度を踏まえると、ダンス教育プログラムの卒業生にとって、初等中等教育機関で教鞭をとることは決して平坦な道のりではなかったと考えられる。

³⁵ Brennan, M. A. (Date unknown). Department of Physical Education and Dance Buff Brennan-Equity Action Committee. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.

第6章 ダンスの「芸術化」とデパートメントとしての独立

本章ではまず、1980年代にアンナ・ナジフがダンス部会長になったことで、再びデパートメント設立の議論が再燃したものの、テニユアを持った教員の数が十分ではないとの理由からデパートメントの設立には至らなかったことを示す。1988年には教員間の不仲が発端となってダンス・プログラムの新規入学者受け入れ停止に直面したものの、学際的な IATECH プログラムの設置や教員の意識改革により再び入学生の受け入れを再開する。再開後は、上演芸術としての側面を一層強めるカリキュラム改革が行われ、2007年にテニユア候補の教員2名を採用したことをきっかけに、デパートメント設立の議論が大詰めを迎える。2010年にダンス・デパートメントの設立を可能にしたのは、独立したデパートメントの運営を行うに足る十分な人数のテニユアを持った教員集団（クリティカル・マス）が形成されていたことにあったことを指摘する。

第1節 アンナ・ナジフの独立構想

ダンスの教育的役割を重視し、ダンス部会が新デパートメント内にとどまる上で主導的な役割を果たしたブレナンに替わり、1979年にダンス部会の部会長に就任したアンナ・ナジフはダンス・プログラムの独立構想を積極的に打ち出し、男女身体教育デパートメントの統合に伴って一時停滞していた論議を再燃させた。1955年にウエストヴァージニア大学で学士（音楽学）を取得し、ニューヨークでグレアムやエリック・ホーキンスらのもとでダンサーとしての経験を積んだのち、ナジフは1964年にウィスコンシン大学マディソン校で修士（芸術学）の学位を取得した。1967年からはウィスコンシン大学マディソン校の助教授として、ダンス・テクニクやダンス創作法などを担当し、ダンス教育ではなく上演芸術としてのダンスの授業を担当した¹。彼女はまず、予算が十分でないために、本格的なコンサートができないでいること、ダンス部会が独自に管理運営する劇場がないこと、レッスンの際の伴奏者が十分に雇用できずにいることなど、ダンスの教員が直面していた課題について指摘した。さらにダンス・プログラムの教員に宛てた文書の中で「ダンス界では、ウィスコンシン大学のダンス教員は国内のみならず、世界的にもリーダーシップを発揮してきたと認識されている。我々が今後もリーダーシップを発揮し続けていくために、我々は自律性、すなわちデパートメントとしての地位を得なければならない」と述べ、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムが果たしてきた役割の大きさにもかかわらず、デパートメントとして独立した地位を得るに未だ至っていない現状を嘆いた²。1980年2月にはダンス・プログラムの代表者としての立場から、身体教育・ダンス・デパートメントのデパートメント長であるヘンリー・モントーヤデパートメント長に対し

て、独立したダンス・デパートメントの設立を検討するよう意見書を提出した。意見書ではまず次のようにウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムが果たしてきた機能について述べられている。

ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムは研究者、理論家、芸術家、振付家、教育者、セラピスト、ダンサーを教育している。我々のプログラムは理論と実践の検証に専心しており、また研究とパフォーマンスの両方に（力を）注いでいる。ダンスの制作は、表現を通して芸術性とともにダンス理論と哲学の両側面を融合させるものである。ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムは教育、パフォーマンス、振付、セラピーを通して大学、州、国に貢献している。³

このように、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムはダンサーだけでなくダンスの研究者や教育者といった学術・教育人材をも輩出してきた点が強調され、理論と実践の両方にまたがる多様な人材を育ててきたことが挙げられている。ドゥブラーがダンス専攻を設立して以来、ダンス教育者の輩出がダンス・プログラムの主なミッションとされてきたが、1960年の応用専攻の設置やその後の上演・振付プログラム、ダンスセラピー・プログラムといったダンス・プログラムの多機能化を反映し、この頃には「研究者、理論家、芸術家、振付家、教育者、セラピスト、ダンサー」という多方面への人材育成に貢献するプログラムへと変容していた。続いて、ダンス・プログラムのミッションは、自律性をもった組織として活動することでよりよく実現されると、以下の9点の理由を挙げながら主張している。

1. ダンスは特異性をもっており、その本質から a) デパートメント内の他のプログラム、b) 教育学部や大学内の他のデパートメントから独立であるときに最もよく機能する。
2. 現在の a) 教員、b) 提供されているもしくは計画されているコース、c) 籍のある学生数、d) 組織構造という観点から、自律したデパートメントの設立は妥当である。
3. ダンス（プログラム）は学問としてダンスを修めた運営者を必要とする。
4. 少なくとも21の重要な大学において、すでに独立したデパートメントは設立されている。初めてのダンス学位はウィスコンシン大学において提供された。本プログラムはこれら21の国内のダンス・プログラムの中で独立したデパートメントとなる最後のプログラムである。
5. 自律性を持たせることで学生の卒業要件や学問プログラムに影響はないであろう。

6. 自律性を持たせることで、教育だけでなく人文学の目的に対してより一貫性を持った研究プログラムの設立を支援することにもなるであろう。
7. 自律性を持たせることで、現在提供されているプログラムをより正確に反映した学位の設立を支援することになるであろう。これらの学位には上演・振付専攻を反映した学士（芸術学）（B. F. A.）学位や現在の M. F. A. プログラムの上に接続する博士（芸術学）（D. F. A.）学位が含まれるであろう。
8. 現在の運営構造では、教職員の増加、准教授や教授の終身在職権（テニユア）、ダンス・プロジェクト、昇給、革新的なプログラムといった事柄を、身体教育・ダンス・デパートメントの他のプログラムのニーズに合わせて考えなければならぬため、（ダンスの教職員にとって）満足のいく状態とは言えない。
9. 独立した（デパートメントとしての）地位の検討のための提案は、アメリカにおける以下のようなトレンドとも整合的である：
 - a) 1970年代におけるダンスの観客動員数の増加（1966年には約700万人だった観客動員数が1976年には約2600万人にまで増加した）。
 - b) テレビの影響。
 - c) 独立した全米ダンス組織の設立。
 - d) 学生がロック音楽のコンサートと同程度の頻度でダンス・コンサートを観に行っているという事実。
 - e) ダンスのみを扱う新しいテレビ・プログラムの（放映の）結果、ダンスの観客数が増えていること。
 - f) ダンス研究への新たな関心が、「ダンス研究者（The Dance Scholars）」と自らを呼称する、ダンス史家やダンス批評家からなる組織に見られること。
 - g) カンパニーにおけるダンサーの復権（を支援する）研究者の必要性。
 - h) 多くの個別研究を担当するバレエ教師やモダンダンス教師の必要性。
 - i) ダンスの基金（獲得）の可能性が著しく増大したこと。⁴

これらの理由に加え、1980年3月中にジョン・パーマー学部長との対話の機会を設けることへの要望が付記され、提案書は締めくくられている。前章で見たように、1960年代後半から1970年代初頭にかけて、クロッパーらが中心となって立ち上げた独立構想では、他の大学において独立したダンス・デパートメントが設立されていることがその主な理由とされていたが、ナジフの独立構想でもその点について言及されている。しかしながら、それだけにとどまらず、プログラムの自律的な運営が促進されることや、独自の学位設置に繋がらうといった、デパートメントとして独立する

ことへの積極的な意義付けが行われている点を注視したい。ここで見られる「ダンスの特異性」や「学問としてダンスを修めた運営者の必要性」を強調する語り口は、身体教育の中の「鬼子」としてのダンスを敢えて身体教育の領域内に留めようとした、男女身体教育デパートメントの統合期になされていた語り口とは真逆のベクトルをもったものである。また、新たな学位設立の構想は、ダンス・プログラムに当時存在していた①ダンス教育プログラム、②上演・振付プログラム、③ダンスセラピー・プログラムのうち、②の上演・振付プログラムに対応した学位として、学士（芸術学）（Bachelor of Fine Arts）を設置しようとするものである。1980年に発行されたダンス・プログラムに入学した学生向けのハンドブックでも、以下のように学士（芸術学）学位について言及されている。

新しい学士（芸術学-ダンス）学位は、プロの芸術家になるための並外れた能力を示す学生に、上演・振付の領域でより集中した教育的経験を与えるために設計されたものである。学生は、演劇、芸術、音楽、他のスタジオ芸術の研究に関連づけて、ダンスという上演芸術についての興味と能力を開発することを期待されている。（中略）本プログラムを修了した学生は、彼らが選択した上演・振付領域において成功をつかむための、また修士（芸術学）課程で研究を継続するための、専門的な知識と技術の基盤を構築することができるであろう。⁵

さらには、大学院の博士課程においても既存の Ph. D. 学位に加えて博士（芸術学）（D. F. A.）学位の設置が検討された。博士（芸術学）学位の取得を目指す学生は高度な分析能力を兼ね備えた芸術的素質を持っていることが要求され、56単位の取得と、上演芸術、視覚芸術や詩など複数のメディアを用いた論文の執筆が求められた⁶。これらの新設学位構想はこの時期に設置が実現されることはなかったのだが、ダンス・プログラムの中でもナジフが特に上演・振付という上演芸術としてのダンスの特徴を重要視していたことが窺えよう。

先に見た提案書の内容を見ると、ナジフらはダンス・プログラムが独立したデパートメントとなるに足る規模や独自性を備えていると考えていたことがわかるが、実際にはテニユアをもった教員の数がまだ十分ではなかった。身体教育・ダンス・デパートメントの教員の内訳を見ると、ダンス部会におけるテニユア付き教員の不足は明らかであった（表 6-1 参照）。

表 6-1 1980年当時の身体教育・ダンス・デパートメントにおける教授陣の内訳

	身体教育	ダンス
教授	12名	2名
准教授	4名	0名
助教授	6名（うち2名がテニユア保持）	5名

出典：Dance Faculty. (1980). Dance Faculty Meeting Wednesday, Nov. 12, 1980 8:00a.m. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.より引用

ダンス部会がデパートメントとして独立するためには、少なくとも4-5名の教授が必要とされ、ダンス部会の独立は時期尚早であるとされた⁷。この議論からは、ダンス部会の独立が議論される際に、実際にデパートメントの運営を担えるだけの十分な教員がいるかどうか、すなわち「クリティカル・マス」が形成されているかどうかの一つの大きな焦点となっていたことが窺える。

1980年代を通じて、ダンス部会は身体教育・ダンス・デパートメントの中で一貫してデパートメントとしての独立を主張していた。先に見たナジフの提案書にあるように、その根拠の一つにはダンス・プログラムで学ぶ学生の増加があるのだが、ダンス・プログラムで学ぶ学生数は1981年をピークに緩やかに減少し始め、1987年度の春学期には29名と、1977年度に比べるとかなり人数が落ち込んでしまった。背景には学問の細分化に伴って学生の興味が分散したことや、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムと競合する他大学のダンス・プログラムが数多く誕生してきたことが挙げられる。

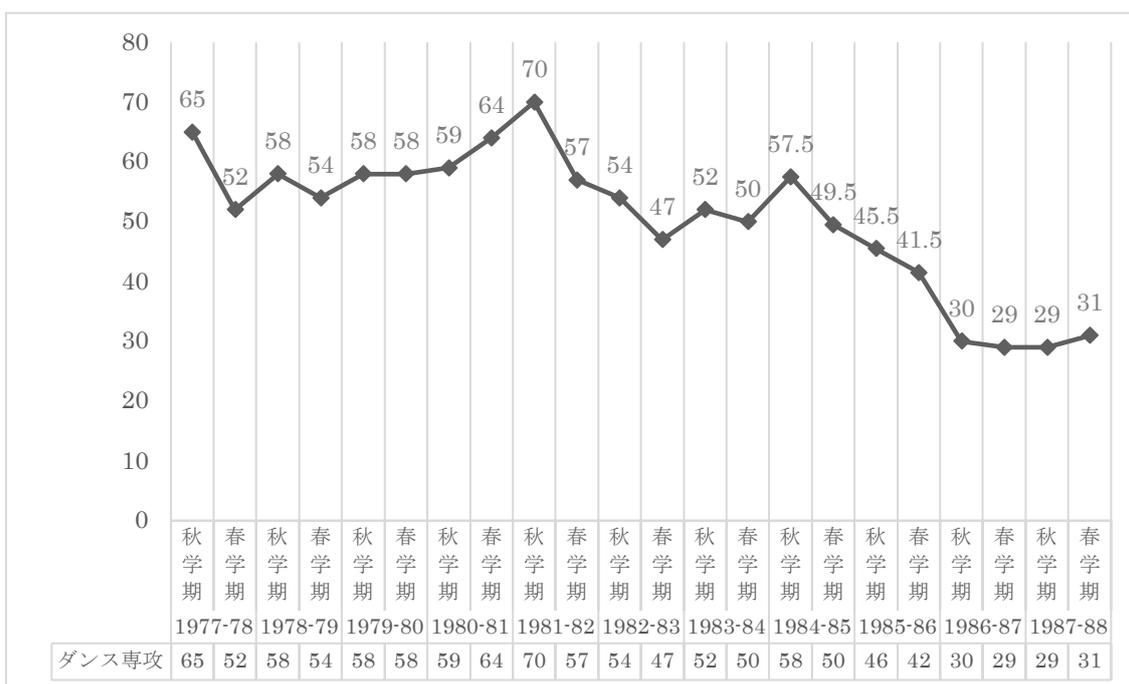


図 6-1 1977 年度から 1987 年度にかけてのダンス・プログラムで学ぶ学生数の推移(The University of Wisconsin-Madison Registrar's Enrollment Reports URL: <https://registrar.wisc.edu/enrollment-reports/>最終アクセス日 2018 年 8 月 19 日) より筆者作成) 8

さらにそれに追い打ちをかけるように、ダンス部会内では教員の不仲が問題となっていった。1984 年から 1986 年にかけてのダンス部会長であり、ダンス部会の方向性を定める委員会である執行委員会の議長を務めていたブレナンは、1986 年 2 月 20 日に身体教育・ダンス・デパートメントのデパートメント長であるカイ・ピーターセンにレターを出し、執行委員会においては生産的な議論がなされていないこと、及び執行委員会の議長職を辞する旨を明らかにした。ブレナンによれば教員間の不仲や関心の違いは数年来にわたって深刻であり、合意に達することはおろか、議題について説明することさえもままならない状況が続いていた⁹。ダンス部会の教員の不仲の問題は学内だけにとどまらず、マディソン市の一般紙においても取り上げられた。1986 年 8 月 27 日付の *Isthmus* 紙では、かつてマーガレット・ドゥブラーのリーダーシップのもとでアメリカ最高峰の質と実績を誇ったウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムが、予算、人員、施設の不足に加えて教員間の不仲のために「暗闇に突入した」と伝えている¹⁰。同紙は、教員間の不仲という問題は大学のデパートメント組織では特段珍しいものではないものの、ダンス・プログラムの場合には教員組織の小ささなどに加え「ドゥブラー思想」という特有の事情が背景にあると指摘している。ドゥブラーはダンス専

攻を設立した当時、モダンダンスの草創期にマーサ・グレームらがダンス・テクニクの定型化を進めていたことに抗い、身体の運動そのものを追求する独特のアプローチの開発を進めたことは先に述べた。同紙によれば、そのような特異な伝統を持つウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムで教鞭をとる教員は「ウィスコンシンで教育を受けたもの」であることが暗黙の前提となっており、1926年のダンス専攻設置以来、50年以上にも及ぶ歴史のなかでテニユア取得の審査を受けた教員はわずか4人にすぎず、そのすべてが不合格となっているという。ここで指摘されているような身内びいきが実際にあったかどうかは定かではないが、教員の昇進などを巡って教員間の対立が深刻化していったことは事実であり、ある教員は他の教員を学生の面前で非難したり、特定の教員のダンス作品に出演した学生の成績を不当に低くしたりするなど、教育活動にも大きな影響を及ぼしていた。事態を重く見たピーターセンデパートメント長は、ジェーン・アイヤー教育学部副学部長をダンス執行委員会の議長にあてがい改善を図ったが、教員間に横たわる溝は埋まらぬままであった¹¹。結果、1988年1月にダンス・プログラムでは学部、大学院共に1988年度の秋学期から新規入学生の受け入れを無期限に停止することがパーマー教育学部長により決定され、1988年2月時点でダンス・プログラムに在籍する学生のみが継続して学修することが許可される事態となった¹²。アンナ・ナジフを中心に進められてきたダンス部会の独立構想は思わぬ形でご破算となった。

第2節 IATECH 専攻の設立とダンス・プログラムの復活

1988年度からの学部・大学院における新規入学生受け入れの停止という事態を受け、アンナ・ナジフは、1988年4月26日にパーマー教育学部長に宛てて決定の再考を求める書面を提出している。その中でナジフは、ダンス部会の教員たちがダンス・プログラム改善のために出されたレビューを真摯に受け止め、互いに意見交換をしたことを報告している。その上で、多くの教員がより優れたダンス・プログラムを構築し、1990年までに自律した地位を得るという考えに賛同していると訴え、教員集団の雰囲気改善と結束をアピールしている¹³。ナジフはその後もこの独立構想を主張し続け、1991年4月にもダンス・プログラムの教員に向けてデパートメントとしての独立にむけた改革案を提示しているのだが、ここではその内容を見ていこう。

まずナジフは「ダンス・デパートメント」のミッションを芸術的な上演・振付を含む研究成果を公衆に共有することに加え、教育と奉仕 (service) にあると定めた。ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムは、歴史的にダンス教師や実演家、振付家、ダンス・プログラムの運営者を多くの著名な大学に輩出してきたことに触れ、質

の高い教師や芸術家、未来のリーダーを育成することも「ダンス・デパートメント」のミッションに含まれると述べる。また「ダンス・デパートメント」では科学的な探求、芸術的な実演と振付、知識の普及に取り組んでいると自負し、新しいアイデアや技術を奨励するために新たに学士（芸術学）と博士（芸術学）の学位の設置を計画していると述べている¹⁴。ナジフは新学位の設置を軸にデパートメントとしての独立を構想し、身体教育・ダンス・デパートメント長や教育学部長と交渉していった。しかしながら、1988年度からの学部・大学院における新規入学生の受け入れが停止されている状況の中で、旧来から提案し続けてきたデパートメントとしての独立や新学位の設置というナジフの主張は、現実味を帯びたものとは言い難かった。ダンス教員の不仲という緊急事態に際してコーディネーターの立場を引き受けたアイヤー副教育学部長が指摘するように、何百人もの学生や教員に悪影響を与えたダンス・プログラムの教員たちが、予算や施設に関する要望を出せる状況にあるはずもなかった¹⁵。

ダンス・プログラムが閉鎖されるという危機的状況のなか、ナジフ以外の教員の中から新たな試みも生まれてきた。1987年にウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムに音楽ディレクターとして赴任したジョセフ・コイカー（Joseph Koykkar）は、芸術デパートメントの助教授とともに、デジタル・メディアやビデオ・アートに焦点を当てた新たなプログラムの開発を模索していた。当時はコンピュータを用いた芸術がそれほど一般的ではなく、高等教育機関においてもメディア・アートを専門的に学べるプログラムはなかった。1989年から1990年にかけて議論を進める中で、ダンス・プログラムの教員の中でもメディア芸術に焦点を当てた新プログラムの開発に興味を持つ教員が現れた。中でもテレビジョンを専門に修士の学位を取得したティボー・ザナはカメラを用いた振付などにも意欲を見せ、コイカーとともにカリキュラムの開発のために議論を重ねた。コイカーやザナらの議論を知ったパーマー学部長も、教員間の不仲が問題となっていたダンス・プログラム内で新しい試みがなされることに好意的であった¹⁶。

新しいプログラムはインターアーツ・テクノロジー（IATECH）プログラムと命名され、育成したい学生像や開講科目について議論が深められていった。その特徴は学際性にあり、美術であれ音楽であれダンスであれ、なんらかの芸術を学んだことのある学生に対して門戸が開かれた。1990年の6月にはザナが同プログラムのコーディネーターとなることが決まり、新入生の受け入れは1991年の秋学期から開始されることとなった¹⁷。IATECH専攻は音楽学部や芸術デパートメントなど、様々なデパートメントに所属する教員が協働して開発されたプログラムでもあったため、どのデパートメントに所属させるかについては議論が継続されたが、ダンス・プログラムの教員が中心的な役割

を果たしていたことから、身体教育・ダンス・デパートメントの下位プログラムとして位置付けられることとなった。

表 6-2 IATECH 専攻受講生の履修科目一覧

領域	科目名	単位数
リベラル・アーツ科目		36 単位
	数学	
	英語 101	0-3
	人文科学	8
	社会科学	8
	科学 (物理 109, 美術における物理は必修 3 単位)	8
	選択科目	10-13
コア科目		22 単位
	167 運動分析入門	1
	242 音と運動の構造的連関	2
	420 上演芸術・視覚芸術のためのサウンド・デザイン	3
	561 運動、コミュニケーション、意味付け	3
	565 テレビのための振付・カメラテクニク	4
	美術 328 視覚芸術におけるコンピュータ	3
	美術 428 コンピュータ・イメージ技術	3
	美術 528 コンピュータを用いた芸術	3
美学基礎科目		12 単位
	哲学 253 芸術の哲学	3
	哲学 453 美学	3
	美術 108 コンテンポラリーアートの基礎	3
	美術 208 美術の現在の動向	3
	音楽 103 世界の音楽文化	2
	美術史 202 ルネサンスから近代芸術へ	3
芸術科目		24 単位 ¹⁸
美術	101 美術入門	3
	102 二次元デザイン	3
	121 美術調査	3

	302 色彩	3
	518 芸術家とビデオ	3
	718 美術パフォーマンス	3
	スタジオ・アート	2-3
ダンス	モダンダンス	1-3
	バレエ	1-2
	芸術家のための運動	3
音楽	113 パフォーマンスにおける音楽	1
	141 リズム、音楽、運動	2
	351 ユーリズムミックス	2
	429 アナログ電子音楽	3
	音楽パフォーマンス	2-3
演劇	150 演技の基礎	3
	366 舞台照明 I	3
	372 舞台とテレビのためのデザイン I	3
その他	ETD 120 デザイン：基礎 I	
選択科目		合計 120 単位になるように

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1991). Bulletin School of Education Effective 1991-93. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1. なお科目名の横の数字は授業番号

表 6-2 に示したように、IATECH 専攻履修生の受講科目は、ダンス・テクニクやダンス教育、運動分析などを主に学ぶこれまでのダンス・プログラムとは明らかに異質である。リベラル・アーツ科目のほか、美術、ダンス、音楽、演劇などの各論、さらに身体表現、音楽デザイン、ビデオ・アートなどのメディアを複合的に用いることを学ぶコア科目などによって構成されており、伝統的な芸術科目のみならず、前衛的な表現技法を学ぶことを可能にしていた。

当時としては画期的な科目からなるカリキュラムを組むことに成功した IATECH 専攻は、1992 年にはウィスコンシン大学マディソン校を会場に国際会議を開くことに成功する。1992 年 2 月 28 日から 3 月 1 日にかけて、ウィスコンシン大学マディソン校の教育科学マルチメディア・プレゼンテーション室とラスロップ・ホールを会場に「ダン

スとテクノロジー会議：未来への胎動 (The Dance and Technology Conference-Moving Toward the Future)」が開催された¹⁹。国内のみならずオーストラリア、カナダ、ハンガリー、スウェーデンなど国外からも発表者が訪れた同会議では、「ラバン記譜法のためのコンピュータ補償システム (ジェノス・フリューゲル (János Fligedi)、ハンガリー科学アカデミー音楽学機構、ハンガリー)」、「ラバン運動分析を用いた運動プロフィールの創作 (メアリー・ブレナン (Mary Brennan)、ウィスコンシン大学マディソン校)」、「ハイパーカードとダンス史：試験的研究 (メアリー・ジェーン・ワーナー (Mary Jane Warner)、ノーマ・スー・フィッシャースティット (Norma Sue Fisher-Stitt)、ヨーク大学、カナダ)」、「コンピュータを用いた振付：「自然言語」の観点からの問題提起 (ペギー・ブライトマン (Peggy Brightman)、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ)」など、合計 25 のプレゼンテーションがなされた。また同会議は全米ダンス連盟 (The National Dance Alliance) との共催でもあった。コーディネーターのザナからヘンリー・トルーバ (Henry Trueba) 教育学部長に充てられた報告書のなかでは、同会議の開催にあたって尽力したスタッフとともに、同会議が成功裏に行われたことが報告されている²⁰。

このように、1980 年代末から 1990 年代初頭にかけて、新規入学生の受け入れ停止と IATECH 専攻の設置という大きな変化を迎えたダンス・プログラムであったが、新規入学生の受け入れ再開に向けても着実に動き出していた。1991 年 11 月 5 日にはザナからトルーバ教育学部長にレターが送られ、身体教育・ダンス・デパートメント²¹においてダンス専攻の新規入学生受け入れ停止の解除が満場一致で可決されたことが報告されるとともに、1992 年度からの 3 年間どのような発展を目指していくかについての計画が提示された。この中では「ダンスとテクノロジー会議」を機にウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムに注目が集まっている時を捉え、1992 年の秋学期からのダンス専攻の新規入学生の受け入れ再開を目指すこと、教員 2 名が職を辞したことに伴い、2 名の新たな教員を雇用することなどが言及された²²。また、ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムが再び世界的な名声を集めるために必要とされたのは、危機に瀕した教員組織を立て直すことのできる新しいリーダーであり、そこで白羽の矢が立ったのがポストモダンダンス研究で名高いサリー・ベーンズ (Sally Banes) であった。ダンス・プログラムの教員は 1992 年 4 月 14 日に投票を行い、ダンス専攻の学生受け入れ再開を機にダンス・デパートメントの設立を目指すこと、ベーンズを新デパートメントのデパートメント長として迎え入れることを満場一致で可決した²³。このように新規入学生受け入れ停止の解除と同時にダンス・デパートメント設立の議論が立ち上がっていたことは、ダンス・プログラムの教員たちにとってデパート

メントの設立が大きな目標であり、悲願であったことを物語っている。ベーンズがウィスコンシン大学マディソン校に赴任すると早々にモーガン身体教育・ダンス・デパートメント長とデパートメント内のリソース分割について話し合いを持った。しかしながら、モーガンデパートメント長はベーンズがダンス・デパートメントの設立にあたり、身体教育・ダンス・デパートメントの予算の分割を主張していたことに対して難色を示し、交渉は難航した²⁴。

ダンス・プログラムの新規入学生受け入れは1993年春学期に再開された。プログラムの再開に伴い開講科目の見直しが行われ、それまで「ダンス技術演習 (Practice of Dance Technique)」とされていた8科目が「モダンダンス・テクニク (Modern Dance Technique)」に、「バレエの理論と演習 (Theory and Practice of Ballet)」とされていた4科目が「バレエ・テクニク (Ballet Technique)」へ統合された²⁵。これらの開講科目の見直しは翌1994年に始まった学士 (芸術学) (Bachelor of Fine Arts) 学位設置の議論への布石であった。新規入学生の受け入れが再開された際、ダンス・プログラムはダンス教育専攻、上演・振付専攻、IATECH 専攻の3専攻を提供していた。このうち、上演・振付専攻はプロの上演家・振付家を目指す学生のために設置された専攻であり、長時間のスタジオでの実習と高いレベルの上演・振付能力の習得を求めた。そもそもウィスコンシン州内外の学校で教鞭を取るダンス教育者の育成を目指して設けられたダンス・プログラムであったが、先述したように第二次世界大戦後アメリカ国内においてモダンダンスの認知度が高まっていったことを受け、身体教育ではなく芸術としてダンスを位置付ける高等教育機関が増え始めた。それらの高等教育機関においては学士 (芸術学) の学位がプロのダンサーを目指す学生に適切な学位であると考えられ、1994年11月時点でミシガン大学やイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、ニューヨーク大学、ユタ大学、オハイオ州立大学など、78の大学が学士 (芸術学) 学位を設けていた²⁶。再開されたウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムにおいても上演・振付専攻の学生が取得する学位として学士 (芸術学) 学位の設置が提案され、ダンス教育専攻の学生が取得する学士 (理学) 学位との差異化が図られた。ダンス・プログラムから提案された学士 (芸術学) 学位の設置は1994年12月16日の教育学部プログラム委員会²⁷で満場一致で可決され²⁸、翌1995年10月の大学アカデミック委員会での可決を経て、1996年11月から提供されることとなった。

表 6-3 1997 年度のダンス・プログラム取得学位別履修科目一覧

学士（理学）-ダンス教育			学士（芸術学）-ダンス		
リベラル・アーツ科目		40 単位	リベラル・アーツ科目		36 単位
ダンス関連必修科目		11 単位	ダンス関連必修科目		11 単位
	200 演劇とパフォーマンスのための批評	3		200 演劇とパフォーマンスのための批評	3
	318 キネシオロジー	3		318 キネシオロジー	3
	329 人体解剖学	5		329 人体解剖学	5
			民俗学		3 単位
ダンス必修科目		52 単位	ダンス必修科目		82 単位以上
	モダンダンス・テクニック	15		モダンダンス・テクニック	18
	バレエ・テクニック	4		バレエ・テクニック	12
	ワールド・ダンス	3		ワールド・ダンス	4
	144 リズム運動研究 I	2		144 リズム運動研究 I	2
	151 即興を通じた表現素材としての運動	2		151 即興を通じた表現素材としての運動	2
	161 ダンサーのための運動理論と基礎	2		161 ダンサーのための運動理論と基礎	2
	167 運動分析入門	2		167 運動分析入門	2
	241 ダンサーのための音楽基礎	2		241 ダンサーのための音楽基礎	2
	243 ダンス伴奏音楽	2		243 ダンス伴奏音楽	2
	255 上演・視覚芸術のための運動創作	2		255 上演・視覚芸術のための運動創作	2
	355 ダンス創作 II もしくは 455 ダンス創作 III	2		351 上演・視覚芸術のためのビデオ・デザイン	3
	432 西洋劇場ダンス史もしくは 265 ダンス調査入門	3		355 ダンス創作 II	2

	ダンス・レパトリー・シアター	4 単位以上		371 子どものための創作ダンス もしくは 372 大人のためのダンス教育	2-3
	161 舞台運営ラボ	2		420 上演・視覚芸術のためのサウンド・デザイン もしくは 103 世界の音楽文化	3
	ダンス関連選択科目	5 単位以上		432 西洋劇場ダンス史 もしくは 265 ダンス調査入門 もしくは 567 ダンス史研究	3
ダンス教育必修科目		19 単位		ダンス・レパトリー・シアター	最低6単位
	371 子どものための創作ダンス	2		455 ダンス創作 III	2
	372 大人のためのダンス教育	3		ダンス関連選択科目	最低5単位
	379 ダンス演習	2		555 創作発展 もしくは 565 ビデオのための振り付けとカメラ技術	3
	474 小学生のためのダンス教育	6		561 運動、コミュニケーション、意味付け もしくは 565 ビデオのための振り付けとカメラ技術	3
	477 中高生のためのダンス教育	6		150 演技の基礎	3
専門教育科目		19 単位		161 舞台運営ラボ	2
	331 子どもから10代までの発達	3		379 ダンス演習	2
	301 人間の能力と学習 他	3		美術史もしくは美学から選択	3-4
	300 学校と社会 他	3		477 中高生のためのダンス教育	6

	316 適応キネシオロジー	3	選択科目	合計 124 単位になるように	
	305 読解教育と言語教育の融合	3	上演	学士 (芸術学) を取得する学生は半即興ソロ作品と群舞作品を上演しなければならない	
	313 小中学校における労働のための教育 もしくは 355 労働のための教育における概念と実践	1			
	514 学校におけるコンピュータ入門 他から選択	3			
人間関係科目					

出典：The University of Wisconsin-Madison. (1997). Undergraduate Catalog 1997-1999. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

表 6-3 には学士 (芸術学) 学位取得を目指す学生と学士 (理学) 学位取得を目指す学生にそれぞれ求められる履修科目の一覧を示している。プロの上演家・振付家を目指す学生向けの学士 (芸術学) 学位では、ダンス教育者やダンス史家、批評家などを目指す学生向けの学士 (理学) 学位に比べて、圧倒的にダンス関連の実技科目が多いことが指摘できる。特にモダンダンス・テクニクは 3 単位、バレエ・テクニクは 8 単位多く履修することが求められている。また、学士 (芸術学) 学位の取得を目指す学生は、学内で行われるコンサートにおいて自身が創作したソロ作品と群舞作品をそれぞれ 1 作品ずつ上演することが卒業要件として課されていた。コンサートで作品を上演するためには、ダンス・プログラムの教員が審査員を務める事前オーディションに通過する必要がある、ダンス創作等の授業の他、授業外においても作品創作やリハーサルのために時間を割くことが必要となる。卒業後にプロとして継続して活動を行うため、スタジオでの集中的な実習を通じて、上演と振付の双方で高い能力を有する実演家の育成を目指した科目構成がなされていた。

このように、学生数の減少と教員間の不仲により 1988 年度からの新規入学生受け入れ停止という制裁措置を受け、一時は存続の危機を迎えたウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムであったが、多様なメディアによる表現を目指し、学際的な科目構成が話題を呼んだ IATECH 専攻の設立を始め、輩出したい学生像の明確化とそれに対応したカリキュラム改革によって、1990 年代後半には新たな装いで再スタート

を切ることとなった。2000年代に入るといよいよ永年の悲願であった独立したダンス・デパートメント設立の議論が加速していく。

第3節 ダンス・デパートメントの設立

2000年代前半に入ると、IATECH専攻に対して疑義を呈する教員が現れ始めた。2003年9月5日には、ダンス・プログラム長²⁹を務めていたジンウェン・ユ（Jin-Wen Yu）が、IATECH専攻のあり方についてチャールズ・リード教育学部長に問い合わせている。そのレターの内容を見ると、専攻設立時の「身体教育・ダンス・デパートメント（当時）と芸術デパートメントの協働による」「視覚芸術、音楽、運動芸術におけるテクノロジーの使用に重きを置いた学際的なコース・オブ・スタディ」を提供するという目標が失われ、芸術デパートメントや音楽学部の教員の協力を得られないまま、2名のダンス・プログラムの教員が運営を取り仕切っている現状が指摘されている。また1999年度から2002年度までの4年間で毎年平均6名の卒業生しか輩出できていないという点についても言及され、ダンス・プログラムの教員と少なくとも他の2つのデパートメントの教員との協働によるIATECH専攻の改善案が示されない場合には、IATECH専攻の新規入学生の受け入れ停止を行うことを進言している。さらに、リード教育学部長に対し、IATECH専攻の問題を「ダンス・プログラムの教員と話し合い」、「教員が新規入学生の受け入れ停止に対してどのように考えているか」を報告するように求めている³⁰。ダンス・プログラム長が、上位組織の責任者にあたる教育学部長に対して、ダンス・プログラムの教員との話し合いの結果の報告を求める、という構図からは、少なくともユがIATECH専攻の継続に大いに不満を持っていたことが窺える。

翌10月に行われた教育学部プログラム委員会では、リード教育学部長がゲストとして参加し、新規入学生受け入れ停止を含めたIATECH専攻の今後の方向性について諮った。ダンス・プログラム長のユの提案を受けてリード教育学部長はIATECH専攻の運営業務がダンス・プログラムの2名の教員だけに偏っていること、残りのダンス・プログラムの教員にとってIATECH専攻の維持が負担となっていることを報告した。芸術デパートメント及び音楽学部の教員からは人員不足のためにIATECH専攻の運営に人員を割く余裕がないとの指摘があり、教育学部プログラム委員会の総意としてIATECH専攻の新規入学者受け入れを停止することが提案された³¹。結果、IATECH専攻の新規入学者受け入れは停止され、さらに2006年の春には在籍していたIATECH専攻生が卒業することを機に、IATECH専攻の廃止が正式に決定された。背景には2005年11月に発表されたダンス・プログラムの外部の審査委員会³²による報告でIATECH専攻に所属する学生が卒業し次第、IATECH専攻を廃止することが勧告されたこと、

また IATECH 専攻の改善に向けて、芸術部門をはじめとする他部門の教員の協力が得られそうになかったことがある³³。異分野の教員たちの協働によって学際的な知識・技術を持った芸術家を育てるという、当時としては極めて前衛的なコンセプトをもとに設置された IATECH 専攻は、1988 年秋学期からの新規入学者受け入れ停止という、いわばダンス・プログラムにとっての危機を救い、ダンス・プログラム「復活」への橋渡しの役割をも担っていたわけだが、再構築されたダンス・プログラムが学士（芸術学）学位の設置やそれに伴うカリキュラム改革を行い、他大学と同様にプロの上演家・振付家の輩出に焦点化するようになるにつれ、次第にダンス・プログラムの「重荷 (burden)」とされていったことはなんとも皮肉なことでもある。

さて、2005 年 11 月に出された審査委員会による報告では、ダンス・プログラムが国内における名声を保ち、さらなる発展を期するために部門として独立することが推奨されていた。2007 年に 2 名の新たな教員を迎えたことをきっかけに、ダンス・プログラム内では部門としての独立に向けた議論が加速していく。2009 年 8 月 26 日にダンス・プログラム長のユは教育学部長のジュリー・アンダーウッド (Julie Underwood) と部門設立に向けたプロセスについて会談した³⁴。2009 年 9 月 22 日にはテニユアを持った教員によって構成されるダンス執行会議でもダンス・部門設立に向けた手続きに入ることが満場一致で可決され、10 月 16 日にはキネシオロジー・部門の教授会もダンス・部門設立を支援することを可決した³⁵。11 月には部門設立の提案書に対してアドバイスを与えるタスクフォースが設立され、そのアドバイスに沿って提案書の見直しが勧められた³⁶。その内容を見てみよう。

部門設立の提案書ではまず、学問領域としてのダンスの歴史的変容について概略的に述べられている。1920 年代のアメリカにおいて発展したモダンダンスは、1960 年代までには芸術領域としてアメリカ社会において認識されていき、高等教育機関に置いても上演芸術領域として位置づけられていった。他大学の状況として「Big 10」³⁷におけるダンスの位置付けが紹介されており、イリノイ大学、アイオワ大学、ミシガン大学、オハイオ州立大学においては芸術系の独立部門となっている他、ミネソタ大学、パーデュー大学、ミシガン州立大学、ノースウエスタン大学においては演劇部門の一部に位置づけられていた。マーガレット・ドゥブラーのリーダーシップのもと、身体教育の一部としてスタートしたウィスコンシン大学マディソン校のダンスであるが、1960 年代からは「教員養成から芸術家の育成へと次第に強調点が変わっていった」と提案書には記されている³⁸。第 3 章でも確認したように、1960 年には上演家・振付家を目指す学生向けの応用専攻 (のちの上演・振付専攻) が設置され、1964

年には大学院において修士（芸術学）学位が設置された。さらに、1996年11月からは学士（芸術学）学位が提供されることになったのだが、これらのダンス・プログラムの「芸術化」を踏まえ、「独立したデパートメントとしての地位は、芸術としてのモダンダンスやコンテンポラリーダンスに強調点を置いた創造的実践と研究を行う学問集団としての現在の機能に沿った位置付けをダンスにもたらすであろう」（下線筆者）と提案書では言及されている³⁹。

また、提案書ではダンス・プログラムの教員構成が変容したことについても触れられている。長年に渡ってダンス・プログラムがキネシオロジー・デパートメント（1976年から1990年までは身体教育・ダンス・デパートメント、それ以前は女性身体教育デパートメント）に位置付けられてきたのは、身体教育につながりを持った教員の存在があったからであり、1990年以前に着任した教員のうち最後の教員（メアリー・ブレナン）が2006年に退職したことで身体教育とのつながりをもつ研究を行う教員がダンス・プログラムにはいなくなったほか、2007年に「上演芸術」もしくは「芸術学」を専門とする教員が新しく雇用されたことで教員の刷新が行われたことが指摘されている。

続けて、ダンス・プログラムが位置付けられてきたキネシオロジー・デパートメントとの関係について言及されている。キネシオロジー・デパートメントに位置付けられているとはいえ、「1990年台前半からダンス・プログラムは独立した『デパートメントのような組織』として機能してきており、施設や予算、運営構造、組織運営、カリキュラムについて完全な権限を行使してきた」という。唯一、キネシオロジーの教員とダンスの教員が共同で行ってきたのが教員の昇進に関わる事項であった。キネシオロジーの教員が社会科学や物理科学、生物学の学内部会を通して評価されるのに対し、ダンスの教員が人文学部会を通して評価されるという学問分野の違いがあり、双方の教員にとって昇進の評価は「不快」かつ「困難」な仕事であった。2009年10月16日にキネシオロジー・デパートメントでダンス・プログラムの独立が審議された際には、卒業生の寄付の問題とダンスの授業が行われているラスロップ・ホールの教室使用について質問が出されたが、卒業生の寄付については適宜分割し、ラスロップ・ホールの使用についても特定の教室を優先的にキネシオロジーの授業にあてがうことで折り合いがついた。キネシオロジー・デパートメントとダンス・デパートメントの分離は小さな変化ではあるが、ダンスにもたらされる影響は大きなものがあり、「身体教育の下位分野という時代遅れ（outmoded）の概念」から脱し、独立したデパートメントの地位を得ることで、学生募集や国内におけるウィスコンシン大学マディソン校ダンス・デパートメントの地位を大きく向上させるだろうと、デパートメントとしての独立後の見通しが述べられている

⁴⁰。

先にも触れたように、デパートメントとしての独立構想の具体化は 2007 年に 2 名の新たな教員を迎えたことが一つのきっかけであった。これにより、2010 年時点でダンス・プログラムにフルタイムで従事している教員は教授 3 名、助教授 4 名、専門技術者（照明や音楽を担当）2 名という陣容となった。この人数はデパートメントとして独立した運営を行うにあたっての「クリティカル・マス」を形成しうるかを検討するために、学内の他の小規模デパートメントの人員の検討が行われた。言語デパートメント（Department of Linguistics）が 6 名の教員から構成されているのを始め、教員が 10 名以下のデパートメントが 10 あることがあげられ、ダンスが独立した場合にデパートメントとしての運営を行うにたる十分な人員が揃っていることを示そうとした。

表 6-4 ダンス・デパートメントの独立が検討されていた当時のウィスコンシン大学マディソン校の小規模デパートメント

デパートメント名	教員数
アフリカ言語・文学デパートメント (African Language & Literature)	8 名
アフロアメリカン・スタディーズ・デパートメント (Department of Afro-American Studies)	10 名
カウンセリング心理デパートメント (Department of Counseling Psychology)	8 名
古典デパートメント (Department of Classics)	8 名
ヘブライ・セム語デパートメント (Department of Hebrew and Semitic Studies)	5 名、3 名の上級講師
言語デパートメント (Department of Linguistics)	6 名
不動産・都市経済デパートメント (Department of Real Estate and Urban Land Econ)	5 名、1 名の客員教授
スカンディナビアン・スタディーズ・デパートメント (Department of Scandinavian Studies)	7 名、1 名の客員教授
スラブ言語・文学デパートメント (Department of Slavic Languages and Literature)	8 名
都市地域計画デパートメント (Department of Urban and Regional Planning)	10 名

出典：Dance Program. (Date unknown). Dance - Department Proposal Info. Jin-Wen Yu

提供

このように、既に学内には少人数の教員によって運営がなされていたデパートメントが存在したことに加え、助教授の地位にあった 4 名の教員がテニユア候補者になっていたこともデパートメントとしての独立に向けてのプラス要因として働いた。ウィスコンシン大学マディソン校においては、新しく着任した助教授を対象にテニユア授与の審査が行われる。着任した助教授はデパートメント長の指名を受けたメンター（もしくはメンタリング委員会）の支援を受けながら、教育、研究、サービスに関する業績をまとめ、デパートメントの執行委員会に提出する。デパートメントの執行委員会から推薦を受け取ると、デパートメント長はテニユア候補者の推薦状を学部長に提出し、学部長から学問領域ごとに分けられた委員会での審査の依頼が行われる。その委員会からテニユア授与の可否に関する審査結果が学部長へと届けられ、プロボスト、理事会からの承認を経てテニユアが授与される仕組みになっている⁴¹。キネシオロジー・デパートメントに位置付けられていた時期には物理学や生物学を専門領域とする教員がダンス教員のテニユア審査に関わっていたが、2010 年から開始された 4 名の助教授のテニユア審査の審査員には、既にテニユアを取得しているダンスの教授のほかに音楽学部や演劇デパートメントの教員等がテニユア審査に加わることとなり、芸術としてのダンスの学問的特性を評価しようとする構成となった。

このように、デパートメント設立に際しての提案書においては、歴史的に身体教育と結びついてきたダンスのデパートメント構造及び教育内容を刷新し、「芸術としての特性」を強調することでダンス・デパートメントのアイデンティティを形づくろうとする方向性が見て取れる。カリキュラム内容に関する提案の中でも「ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムは、現在、芸術領域としてのダンス界において先導者であり革新者である。マーガレット・ドゥブラーの指揮のもとダンスが発展してきたのは身体教育の領域においてである。現在は身体教育領域とのつながりはないものの、ドゥブラーが強調した『考えるダンサー』を育成するという（方向性を）維持していく」⁴²と、身体教育から距離をとるものの「考えるダンサー」の養成というドゥブラー以来の伝統を保持する構えを見せている。

ダンス・プログラムが提出したデパートメント設立に向けての提案書は、2010 年 3 月初旬に教育学部アカデミック計画会議において承認され、続いて 3 月中旬には大学アカデミック計画会議において承認された。その後、大学委員会、教員評議会を経て、2010 年 4 月にダンス・デパートメントの設立が正式に承認されることとなった⁴³。奇しくもダンス・デパートメントが使用するラスロップ・ホールが建築されてから 100 年

目の佳節であった。

このようにダンス・デパートメントの独立に至るまでの議論を資料に沿って検討すると、独立したデパートメントとして十分な運営が行えるだけの人員、すなわち「クリティカル・マス」が形成されているか否かが、大きな焦点になっていたことがわかる。ユラは、「クリティカル・マス」を形成する十分な教員が揃っていることを示すために、当時のウィスコンシン大学マディソン校内の小規模デパートメントについても検討していた。音楽学部や演劇デパートメントの教員の力を借りながら、2010年から始まったダンスの4名の助教授のテニュア審査の体制が組み立てられていたことも、「クリティカル・マス」が形成されていることを示すのに有効であった。

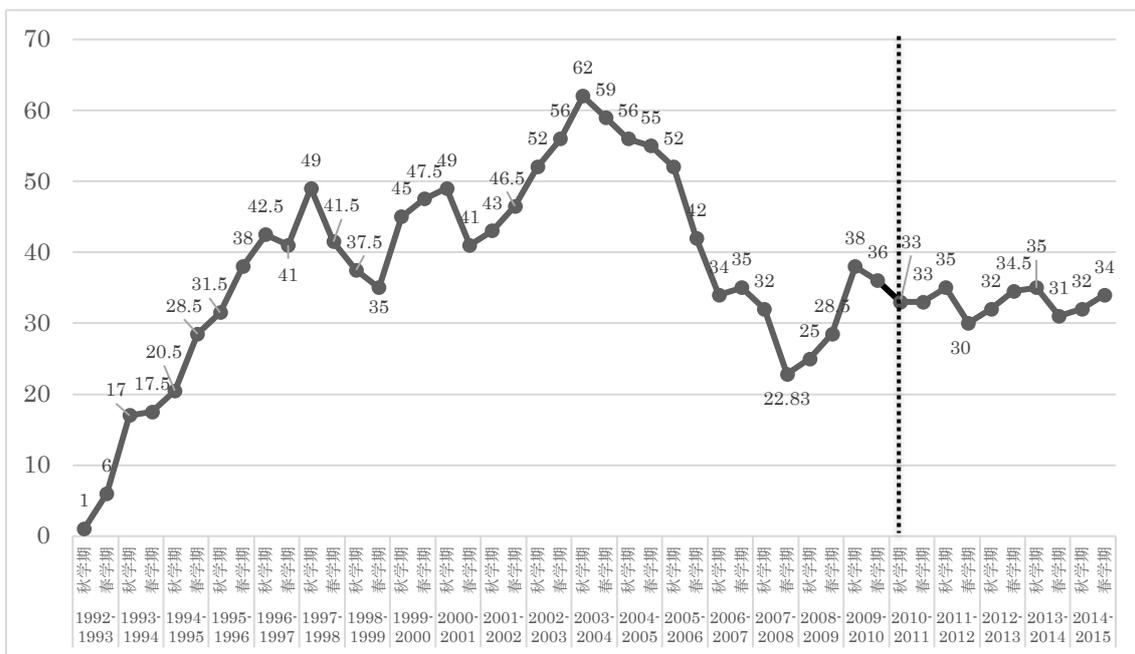


図 6-2 1992 年度から 2015 年度にかけてのダンス専攻の学生数の推移 (The University of Wisconsin-Madison Registrar's Enrollment Reports URL: <https://registrar.wisc.edu/enrollment-reports/>最終アクセス日 2019 年 2 月 28 日) より筆者作成)

図6-2にはダンス・プログラムの新規入学生受け入れが再開された1992年度から2015年度にかけてのダンス専攻の学生数の推移を示してある。新規入学生の受け入れが再開されて以後は、ダンス専攻の学生数は増加傾向にあったが、2002年の秋学期をピークにその後は減少傾向になった。その後、2007年の秋学期から再び増加しダンス・デパートメントとなって以後は4学年合わせて30名台前半で推移している。ダンス・デパ

ートメントの設立以後は、ダンスを専門的に学びたい学生を安定的に受け入れてきたことがわかる。ダンス学位の取得を希望する場合、大学への入学手続きとは別に、ダンス・デパートメントのオーディションを受けることになっており、バレエとモダンダンスの実技のほか、面接試験が実施されている。試験ではこれまでのダンスの経験や技術が重視されており、「創造的探求、イノベーション、厳格なトレーニングを通して個人を成長させる」ことを目指すダンス・プログラムでの学習に耐えうるかどうかを判断される⁴⁴。

一方で、ダンス・プログラムで提供される多くの科目は、「コンテンポラリーダンス・テクニクと理論」などの一部の科目を除いて、ダンス専攻の学生以外も履修することのできるオープン科目となっている。ダンス専攻以外のウィスコンシン大学マディソン校に学ぶ学生に門戸を開きダンスを学ぶ機会を提供しようとしている。また、授業期間中の毎週金曜日 15:30 より Margaret H'Doubler Performance Space で行われる Friday Forum では、ゲスト・アーティストや地域で活動するダンサー、アーティストによる講演のほか、学生によるパフォーマンスが行われている。この取り組みもダンス専攻の学生に限らず、ウィスコンシン大学マディソン校で学ぶ学生や地域住民に向けて一般公開されており、ダンスを大学や地域に開く試みである。

このように、ダンス・デパートメントの設立の過程で残念ながらダンス教員の養成という機能は失われてしまったが、現在のダンス・デパートメントでは、上演芸術としてのダンスの専門性を活かし、将来プロの上演家・振付家を目指す学生の教育に主軸を置きながらも、ダンス専攻以外の学生や地域住民にダンスを開くことで、ドゥブラー以来の伝統である地域に根ざしたダンスの普及・興隆のための活動を組織的に行なっている。その意味において、ダンスを通じた全人格的発達という、ドゥブラーが目指したアマチュアリズムとしてのダンスの精神が形を変えて、現在のダンス・プログラムを通じて提供される知識や技術の奥底に息づいていると言えるのではないだろうか。

¹ Nassif, A. (1980a). Vitae. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

² Nassif, A. (1980b). Dear Dance Faculty. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

³ Nassif, A. (1980c). Dance Department status. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

⁴ *Ibid.*

⁵ Dance Program. (1980). Handbook for dance majors. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

⁶ *Ibid.*

⁷ Dance Faculty. (1980). Dance Faculty Meeting Wednesday, Nov. 12, 1980 8:00a.m.

The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

⁸ 専攻ごとの入学者数に関する統計開始年は 1977 年であるが、当初は第 3 学年及び第 4 学年の学生のみを対象とし、ダブル・メジャーはカウントしていなかった。1983 年度から、フルタイム当量 (FTE) による表記に改まり、第 1 学年及び第 2 学年とダブル・メジャーも統計に含まれるようになった。

⁹ Brennan, M. A. (1986). A letter to Kay Petersen on February 20, 1986. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹⁰ Gerard, P. (1986). Dancing in the dark. Isthmus 6/27/1986.

¹¹ Petersen, K. (1986). Memo to Faculty and Staff on September 22, 1986. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹² Department of Physical Education and Dance. (1988). Minutes of the Physical Education Faculty Meeting February 26, 1988 Room 1180 Gym Unit II 8:00-10:00 a.m. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2014/143. なお、学部プログラムだけでなく大学院プログラムも閉鎖された。大学院プログラムは 1993 年に学部プログラムの閉鎖が解除されて以降も新規学生の受け入れを行っていない (2017 年 8 月現在)。

¹³ Nassif, A. (1988). Memorandum to Dean Palmer on April 26, 1988. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹⁴ Nassif, A. (1991). Memorandum to UW Dance Faculty on April 10, 1991. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹⁵ Ayer, J. (1989). Memo to Professor M. A. Brennan, Dance Program Coordinator on February 15, 1989. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹⁶ 筆者が 2015 年 9 月 9 日にジョセフ・コイカーに行ったインタビューによる。

¹⁷ Stelmach, G. E. (1990). Memorandum to Physical Education and Dance Faculty and Staff on June 7, 1990. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

¹⁸ 美術、ダンス、音楽、演劇のそれぞれから少なくとも 2-3 単位を履修することとされた。

¹⁹ 1992 年は閏年であったため 3 日間の開催であった。

²⁰ Zana, T. L. (1992a). A letter to Dean Henry Trueba on March 13, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

²¹ 1990 年にはそれまでの身体教育・ダンス・デパートメントとセラピー科学デパートメント (Department of Therapeutic Science) が統合され、新しくキネシオロジー・デパートメント (Department of Kinesiology) が設立された。ダンス・プログラムはその下に位置付けられたのが、1991 年頃までは身体教育・ダンス・デパートメントの名称も用いられている。

²² Zana, T. L. (1991). Memorandum to Dean Henry Trueba on November 5, 1991. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

²³ Zana, T. L. (1992b). Memorandum to Dean Henry Trueba on April 15, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

²⁴ Morgan, W. P. (1992). Memorandum to Sally Banes on June 25, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

²⁵ The University of Wisconsin-Madison School of Education. (1993). Program Committee Minutes Friday, May 7, 1993 12:30-1:40 p. m. Room 154 Education Building. Accession No.2015/279.

²⁶ Brennan, M. (1994). A letter to School of Education Programs Committee on November 21, 1994. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.

²⁷ 教育学部の各デパートメントが提供するプログラムの科目変更に関する審議を行う委員

会。身体教育・ダンス・デパートメントからは身体教育分野とダンス分野で別々の教員が委員として選出されていた。

²⁸ The University of Wisconsin-Madison School of Education. (1994). Program Committee Minutes on Friday, December 16, 1994 12:30-1:50 p. m. Room 154 Education Building. Accession No.2015/279.

²⁹ 1980年代まではダンス部会長 (Chair of Dance Division) という呼称が用いられることが多かったが、ダンス・プログラムの新入生受け入れが停止されて以後はダンス・プログラム長 (Chair of Dance Program) という呼称が用いられている。

³⁰ Yu, J. (2003). A letter to Charles Read on September 5, 2003. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.

³¹ The University of Wisconsin-Madison School of Education. (2003). Program Committee Minutes on October 17, 2003 12:30-2:00pm 154 Education Building. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.

³² ウィスコンシン大学マディソン校では大学アカデミック計画会議 (The University Academic Planning Council) の統括のもと、教職員が提供するプログラムの質を分析・改善することを目的として10年サイクルでプログラム審査を行っている (The University of Wisconsin-Madison Office of the Provost. Academic Planning and Institutional Research. URL: <https://apir.wisc.edu/academic-planning/program-review/> 最終アクセス日 2017年8月17日)。

³³ Dance Program. (2006). Termination of the Interarts and Tehnology Major Option (IATECH). The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.

³⁴ Whatley. M. H. (2010). A letter to Dean Julie Underwood and the School of Education Academic Planning Council on February 16, 2010. Jin-Wen Yu 提供.

³⁵ Dance Program. (2010). Proposal for Establishing the Department of Dance University of Wisconsin-Madison, School of Education February 9, 2010. Jin-Wen Yu 提供. p.2.

³⁶ デパートメントの設立や廃止に際して教育学部に作られる機関であり、それらの提案をするグループはタスクフォースに助言を求めながら提案書の作成を進める。結成されたタスクフォースの議長はマリアン・ワットリー (Mariamne Whatley) 教育学部名誉学部長が務め、教育学部副学長や演劇学部教授、人文学部会長、ダンス・プログラムの教授などで構成された (Whatley. M. H. (2010). A letter to Dean Julie Underwood and the School of Education Academic Planning Council on February 16, 2010. Jin-Wen Yu 提供.)。

³⁷ 主に中西部の大学で構成されておりスポーツ交流・学術交流が行われている。2017年8月現在、ウィスコンシン大学マディソン校の他、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校、インディアナ大学、アイオワ大学、メリーランド大学、ミシガン大学、ミシガン州立大学、ミネソタ大学、ネブラスカ大学、ノースウエスタン大学、オハイオ州立大学、ペンシルバニア州立大学、パーデュー大学、ラトガース大学より構成される。

³⁸ Dance Program. (2010). *op. cit.*, p.1.

³⁹ *Ibid.*, p.2.

⁴⁰ *Ibid.*, p.4.

⁴¹ The University of Wisconsin-Madison Office of secretary of the faculty. The tenure oprocess at UW-Madison. URL: <https://secfac.wisc.edu/events-programs/tenure-workshops/tenure-gloss-mbd/> 最終アクセス日 2019年3月1日.

⁴² Dance Program. (2010). *op. cit.*, p.7.

⁴³ Dance Program. (Date unknown). Establishment of Dance Dept –Procedure. Jin-Wen Yu 提供.

⁴⁴ The University of Wisconsin-Madison Dance Department. How to apply to the Dance Department. URL: <https://www.dance.wisc.edu/dance/admissions/how-to-apply/> 最終アクセス日 2018年9月10日.

第7章 本研究で得られた知見と貢献

本章では本研究で得られた知見を整理し、本研究の貢献について述べるとともに、今後の課題について述べる。

第1節 本研究で得られた知見

本研究はアメリカの高等教育機関において身体教育デパートメントの下位プログラムとしてスタートしたダンスが、デパートメントとして独立することを可能した要因は何かを、ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンス・プログラムの歴史的変遷を、その時代における大学内部や社会的状況との関連から通史的に明らかにすることで検証した。ここで本研究から得られた知見を整理したい。

本研究の第3章ではまず、マーガレット・ドゥブラーがニューヨークへの国内留学からマディソンに戻り、ウィスコンシン大学マディソン校においてダンス教育実践を開始した1917年ごろから、同校の女性身体教育プログラムにダンス専攻が設立された1926年ごろまでの時期を中心に、ドゥブラーのダンス教育実践と当時の教育思潮との関連や、彼女が実際に構築したカリキュラム、教育学部や文理学院等の上位組織との折衝がどのようなものだったのかを史資料に基づいて明らかにした。アリス・ベントリーの創造的な音楽教育実践に示唆を得たドゥブラーの実践は、学習者に自身の身体の重さや構造へ気づかせ、身体の動きに関する感覚を高めさせることから出発する。そこから簡単なリズムのパターンに対して自由に動きを創作させることで「個々人の思考や感情の純粋な表現」を導こうとするものであった。ドゥブラーによればそれぞれの運動が内包するリズムは私たちの運動感覚 (kinesthetic sense) によって美的経験 (aesthetic experience) として受容され、ダンサー自身に喜びをもたらす。ドゥブラーは美的経験を芸術作品の鑑賞に関わるもの、芸術経験 (artistic experience) を芸術作品の制作に関わるものとし、両者を区別して用いたが、この点はデューイが芸術の制作と鑑賞の両方に関わるものとして美的経験 (esthetic experience) を定義付けようとしたのとは異なっている。ドゥブラーが「デューイとともに」美を論ずる一方で、「デューイから離れて」独自の経験論へと向かっていったのは、ダンスという上演芸術形態に即した論の展開が希求されていたからであった。すなわち、ダンスの上演場面において「誰にとっての経験か」を明確にするために、敢えて「美的経験 (aesthetic experience)」と「芸術経験 (art experience)」を峻別して論じる構えをとったと考えられる。学習者の経験を重んじる当時の教育思潮との関連で考えたとき、ダンスという上演芸術形態に即した形で経験論を展開していった点をドゥブラーの功績として評価できる。

また、ダンス専攻の設立にあたりドゥブラーが構築したカリキュラムを検討すると、

科学関連科目や実技科目だけでなく、英語、哲学、スピーチ、音楽、美術史といった幅広い科目から構成されていたことがわかる。ドゥブラーはダンスを単なる身体の運動以上のものとして考えており、学習者の想像力／創造力を高めるためには人文学的な科目の学習を通して幅広い教養・芸術的素養を育成することが必要であると考えていた。

ドゥブラーが1926年にダンス専攻の設置に向けて尽力していた際、あくまでも身体教育プログラムの下位領域として新たな内容を付加するという形で内容導入が検討されており、独立したデパートメントの設置は検討されていなかった。カリキュラムの構想やダンス専攻の独自科目のすべてをドゥブラーが一人で担っていたことを考えると、ダンス・デパートメント設立の議論までには到底至らなかったと考えられる。1954年にドゥブラーが引退してからのち、ダンス・プログラムは1960年の応用専攻設置や1964年の修士（芸術学）学位設置など、それまでのダンス教育者育成を中心とした役割に加えて、プロの上演家・振付家の養成という新たな役割をも担うようになった。

続いて本研究の第4章では、第二次世界大戦後のアメリカ社会におけるダンスの興隆を連邦政府の文化政策に着目して描き、それに触発される形で「学問としてのダンス」のあり方が模索されていった様子を、「学問としてのダンス会議」の議論などを参照することで確認した。ダンスが上演芸術として発展し、他大学で独立したダンス・デパートメントや芸術系のデパートメントに位置付けられるダンス・プログラムが登場してきたことを受け、ウィスコンシン大学マディソン校においても1960年代後半にはデパートメントとしての独立が目指されるようになった。しかしながら、デパートメントとして独立を遂げたとしても予算や施設が確保できるかが不透明であったこと、テニユアを持った教員が少なく、デパートメントとしての十分な運営ができるとみなされなかったことから、デパートメントとしての独立は断念される。

第5章では、1972年のタイトルIXの施行を受けそれまで別々に運営されていた男女身体教育デパートメントが統合されることに伴い、ダンス部会内外において今後の方向性がどのように議論されていたのかを見てきた。1972年のタイトルIX施行の前後に、男女身体教育デパートメントの統合が議論されるようになる中、ダンス部会はダンス・デパートメントとしての独立を目指すのではなく、統合デパートメントにおける存在感を強めることを目指し、予算や独自の人事昇進システムの保持を主張した。さらに、女性身体教育デパートメントの他の教員の協力を得て、新デパートメントに「ダンス」の語を組み込むことに成功した。しかしながら、統合後はダンス専攻の学生以外の学生がダンスの授業を履修する機会が激減し、また、旧・男性身体教育デパートメントのデパートメント長が身体教育・ダンス・デパートメントのデパートメント長に就任したことによって、女性教員が意思決定の権限に関して不満を覚えるなど、統合前にダンス部会

の教員が楽観的に考えられていたような身体教育を専門とする男性教員との調和が実現したとはいい難かった。

第6章では、1980年代以後から2010年にダンス・デパートメントが設立されるまでのウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスの展開を見てきた。1980年代にアンナ・ナジフのリーダーシップのもとで再びダンス・デパートメントの設置をめぐる議論が再燃しながらも、ダンス専攻の学生数の減少や教員間の不仲が原因となり、1988年にはダンス専攻の新規入学生受け入れ停止という「危機」を迎える。しかしながら、ダンスにとどまらない異分野芸術を担う芸術家の輩出を目指した学際的なIATECH専攻の設置により、1991年には新たな装いのもとダンス・プログラムがスタートする。その後、学士（芸術学）学位の設置やカリキュラム改革を通じてプロの上演家・振付家の輩出という目的を一層鮮明にし、最終的に2010年にダンス・デパートメントの設立が承認されることとなる。それまでダンス・プログラムが位置付けられていたキネシオロジー・デパートメントからの独立は、ダンスの身体教育ではなく芸術としてのアイデンティティを強調し、ダンス・プログラムが「芸術化」を図ったこと、そして何より長年の課題であったテニュアを持った教員の確保、すなわちデパートメント運営を行うだけの「クリティカル・マス」の形成が達成されたことによって成し遂げられた。

第2節 本研究の貢献

次に本研究の貢献について述べる。

これまでのアメリカの高等教育機関におけるダンスに関する先行研究では、アメリカの高等教育機関において身体教育デパートメントの下位プログラムとして位置付けられたダンスが、デパートメントとして独立していった背景に、1960年代以後の連邦政府の芸術政策や全米レベルでのダンスを専門とする団体の設立といった高等教育機関外部の社会的政治的要因があることが指摘されてきた（Bonbright 2007, Hagood 2000, Kolcio 2010）。しかしながら、それらの社会的政治的要因のみではなぜダンスが独立したデパートメントとして組織されるようになったのかを説明することができない。本研究ではウィスコンシン大学マディソン校を事例に高等教育機関内におけるダンスの位置付けの変容を通史的に検討し、以下の諸点を明らかにした。

まず、先行研究が指摘する社会的政治的要因のみでは、ダンスの「芸術化」を説明できないことが明らかとなった。ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムを担当する教員によるダンスの「芸術化」は、1960年代から既に始まっており、またHagoodのいう「ダンス・ブーム」期（1965-1980）以前に既に芸術系のダンス・プログラムは存在していた。Bonbright（2010）が指摘するタイトルIXの影響は必ずしも

ダンスの「芸術化」を促す要因とはならないことも明らかになった。むしろタイトル IX が施行され、男女の身体教育デパートメントが統合されたことは、ダンス部会（当時）の教員たちにとっては学問的独自性を打ち出しデパートメントとして独立するチャンスというよりも、自分たちが女性身体教育デパートメント内で築き上げてきた予算や人事昇進プロセスに関する権限を失いかねないリスクとして捉えられていた。1976 年度の身体教育・ダンス・デパートメントへの統合前後のプログラムの内容を比較しても、①ダンス教育プログラム、②上演・振付プログラム、③ダンスセラピー・プログラムのそれぞれにおいて、育成したい学生像が別個に設定されており、統合以前のダンス・プログラムの内容が維持されていた。

デパートメントやプログラムに関する先行研究が指摘するように、高等教育機関は高等教育機関内外の変化に対し、基本的にデパートメントの設立ではなくプログラムの変容によって対処しようとする。個別の高等教育機関を検討することによって、プログラムの変容によって変化に対応しようとしていたのか、デパートメントの設立を目指していたのかが浮き彫りになってくる。ウィスコンシン大学マディソン校のダンスの通史的な変容を検討すると、1960 年以降、ダンス教育プログラムだけではなく上演・振付プログラムを設置したことや、1990 年に IATECH プログラムを設置したことに、教員がプログラムの変容によって大学内外の変化に対応しようとする基本的傾向が現れていることが確認される。Hagood (2000) は芸術系のダンス・プログラムの設置とダンス・デパートメントの設立を区別せずに論じていたが、ダンス・プログラムの新設や質的変容ではなくダンス・デパートメントの設立が行われた要因は、高等教育機関に外在するマクロ的な要因に直接に求められるのではなく、むしろ学問的志向性や人数といった高等教育機関内においてダンスを専門とする教員のありようにこそ求めることができることを本研究は示した。ウィスコンシン大学マディソン校においては、テニユア昇進審査の場面で、上演芸術としてのダンスの学問的独自性とダンス・プログラムが位置付けられてきたキネシオロジー・デパートメントの他の教員の学問的背景とが齟齬をきたしていたことが、ダンスのデパートメントとしての独立の誘因となった。ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスを教えることの意味づけは図 7-1 のように変化していたが、2010 年にダンス・デパートメントの設立が承認された際には、ダンス・プログラムの目的はプロの上演家・振付家の養成に焦点化されていた。

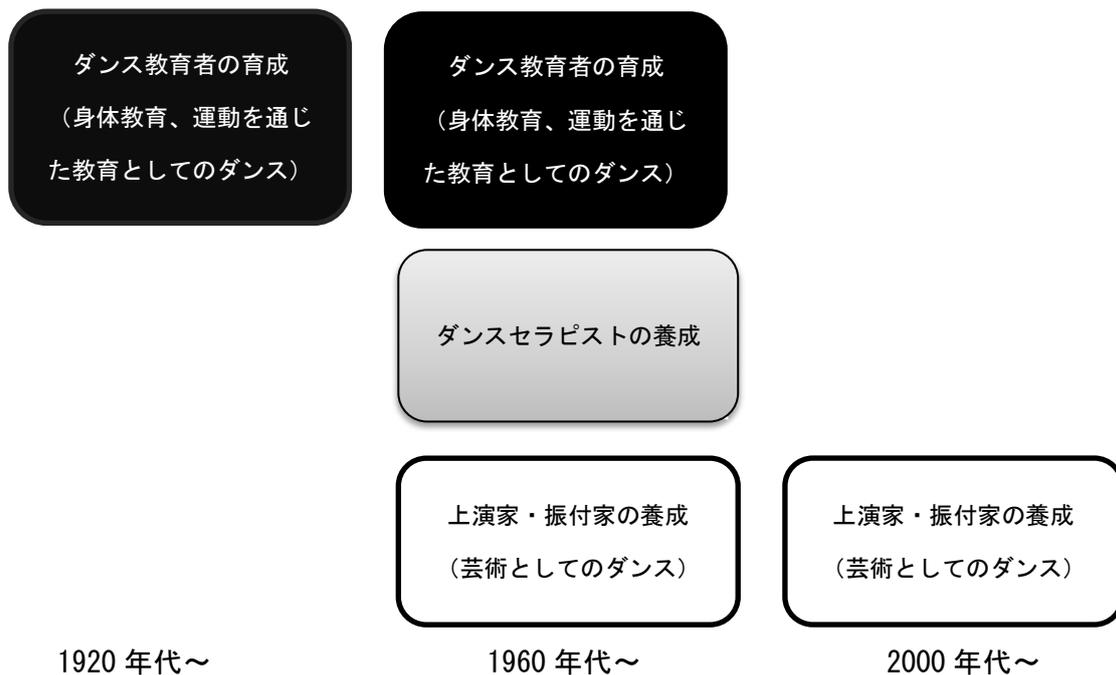


図 7-1 ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスの意味づけの変化 (筆者作成)

このように、ダンス・プログラムの目的をプロの上演家・振付家の養成に絞ることで、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス教員はダンスの学問的独自性を明確にすることに成功した。上演芸術としてのダンスの学問的独自性を明確にすることによってこそ、身体教育や他の芸術領域との差異化が図られ、大学内において専門を同じくする教員集団としての組織化—部門としての組織化—へと至る下地が整った。

そして、ダンスの部門としての独立を可能にした要因は部門としての運営を円滑に行うだけのテニユアを持った教員の人数の確保である。部門としての運営を円滑に行うだけのテニユアを保持した教員集団、すなわち「クリティカル・マス」の形成が、1960年代後半から一貫してウィスコンシン大学マディソン校ダンス・プログラムの教員たちにとっての課題であったが、プログラムの目的を上演家・振付家の養成に焦点化し、それを育成するためのトレーニング、研究を積んだ教員人数を確保することによって、ダンス・部門の独立は可能になった。これまでの部門に関する研究では、部門の成立要件について教員集団の人数が重要であることを指摘する研究は存在した(Blau 1973、ルドルフ 1990[1962])。ルドルフ(1990[1962])は部門化にとってはサイズが重要であるというアイディアを提示していた。また、Blauは専門分野を同じくする教員の人数が増えると、彼(女)らが部門の設立を求めるようになると指摘していた。本研究ではこ

これらの指摘を一步進め、同一の学問的アイデンティティを共有するテニユアを持った教員集団（クリティカル・マス）の存在がデパートメント化にとっての決定的要件であることを示した。すなわち、ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスの位置付けの変容を通史的に明らかにすることを通して、図 7-2 に示すように、高等教育機関外部の要因に影響を受けながらも、高等教育機関内部においてダンスを専門とする教員（集団）がダンスの学問的独自性や大学において果たすミッションの再定義、そしてテニユアを持った教員の確保を通じて、必要なレディネスを整えたときに初めてデパートメントとして独立し得たことが示された¹。特に教員がテニユアを保持しているか否かが焦点となっていたことは重要である。非常勤講師やテニユアを保持していない有期契約の教員が増えてもデパートメント化は進まなかったが、テニユアを持った教員が一定の人数に達したときに初めてダンス・デパートメントの設立は達成された。ダンスのように論争的な学問分野のデパートメントの設立を可能にするためには、教員が有する学問的専門性の証としてテニユアを取得することが決定的に重要になったのである。また、先行研究では高等教育機関外のマクロな要因に着目していたが、連邦政府の芸術政策やダンスの専門団体の設立は、あくまでもダンス・デパートメントが設立されるための先行条件であり、それによって高等教育機関内部の教員たちの学問的指向性の変化やその変化に沿った人材の確保が促され、ダンス・デパートメントとしての独立へとつながったと考えられる。

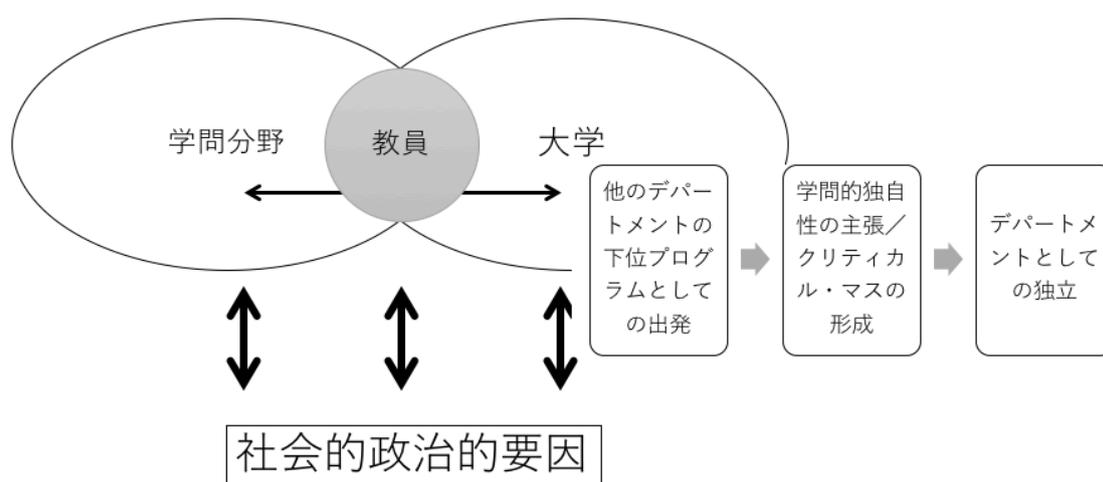


図 7-2 大学内におけるデパートメント設立までの過程（筆者作成）

さらに、ウィスコンシン大学マディソン校のダンスの事例を通史的に検討することによって、ウィスコンシン大学マディソン校におけるダンスが大きく変容したことを本研

究は実証的に示した。運動感覚を通して運動のリズムを美的経験として感受し、芸術経験としてのダンスに昇華させるという独自のダンス教育観を確立したドゥブラーは、ダンスがすべての人にとって学ぶ意味のある内容であると考え、アマチュアリズムの視点からダンス教育の普及に努めた。彼女が設置に尽力し、1926年に設置されたダンス専攻は公立学校や大学で教鞭をとるダンス教員の養成を目標としたものであった。以来、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・プログラムはダンス教員養成のメッカとして、先導的な役割を果たし続け、後に続く教員たちもその伝統を重視していた。しかしながら、1980年代には、上演芸術としてのダンスの側面を強調し、独立したダンス・デパートメントの設立を目指す教員が現れ始めた。「ダンスの芸術化」を推し進めることで、大学内における学問的独自性を形成し、デパートメントとしての独立に繋がったことは上に示した通りであるが、その一方で身体教育と結びついたダンスのありようが「時代遅れ (outmoded) の概念」と批判的に論じられていたことも事実であった。少なくとも1980年代後半にはウィスコンシン州内でダンスを教える公立学校が激減していたことを考えると (Cowan 1990)、ダンス教育プログラムで学位を取得し卒業後は公立学校の教員としてダンスを教えるというキャリア・パスが現実的なものではなくなっていた。アメリカの高等教育機関における現代のダンス・デパートメントはプロの芸術家・振付家の輩出をその第一の目標としていることは確認した通りだが、ウィスコンシン大学マディソン校においてさえ、アマチュアリズムとしてのダンスが重んじられなくなったことは、アメリカの高等教育機関におけるダンスの重点がアマチュアリズムからプロフェッショナリズムへと大きくシフトしたことを裏付けるものである。Hagood (2000) は「ダンス・ブーム」期を境に芸術系のダンス・プログラムやダンス・デパートメントが増加したことを指摘していたが、本研究は、身体教育デパートメントに位置付けられたダンス・プログラムも、その後上演芸術としてのダンスの学問的独自性を掲げたダンス・デパートメントへと質的に変容していったこと、すなわちアメリカの高等教育機関におけるダンスが「身体教育から芸術への長く緩やかな移行」を遂げていったことを実証的に示した。

本研究が示した史的事実から示唆されることは、アマチュアリズムとしてのダンスはデパートメント構造を持ったアメリカの高等教育システムにおいては二次的な役割に甘んじる可能性が高いということである。ドゥブラーが構想し、その後他の高等教育機関にも広がったアマチュアリズムとしてのダンスは、ダンスを手段としてあらゆる人々に「ダンスを人生の哲学や体系に対して貢献する、一つの経験として教える²⁾」ことを目指したインクルーシブなものであった。しかしながら、2018年時点で、ウィスコンシン大学マディソン校のダンス・デパートメントにはダンス教員免許につながるダンス

教育プログラムは置かれておらず、また、他の高等教育機関のダンス・デパートメントと同様に、入学を希望するものに対しては、バレエとモダンダンスの技能試験を含めたオーディションを課し、選考を行なっている³。すなわち、大学に入学する以前にハイ・アートとしてのダンスの経験を持っていることが入学のための重要な要件になっている。アメリカの高等教育機関におけるダンスのデパートメント化は学問としてのダンスのアイデンティフィケーション、すなわち芸術的側面の強調を伴ったが、その過程でハイ・カルチャーのみならず、幅広いバックグラウンドを持った人々が、ダンスを手段として全人格的に成長・発達することを重視する観点は後退してしまった。このことを考えると、幅広い層の人々に対してダンス学習の機会を保障するためには、「学ぶべきダンス」や「ダンスを学ぶことの意味」の狭隘化を伴うダンスのデパートメント化を進めるのではなく、むしろ、Risner (2010) が言うように、リベラルアーツ・プログラムなど、より広い枠組みの中でダンスを教えるという方策も考えられる⁴。社会におけるダンスの価値は、必ずしも劇場における公演活動などのハイ・カルチャーのみに求められるわけではない。ドゥブラーがウィスコンシン大学マディソン校においてダンスの実践を始めてから 100 年が経過した。少子高齢化が進んだ現代社会において、私たち一人ひとりが身体の可能性と限界に向き合わざるを得ない瞬間は増えてきているのかもしれない。公立学校でのダンス教育やコミュニティ・ダンス、さらにはダンスを活用した高齢者向けワークショップなど、あらゆる人にダンスがもたらすことのできる時空間ードゥブラーのいう「美的経験」「芸術的経験」を共有しあえる場—の価値を見直し、それを活かした形で高等教育におけるダンスのありようを考えるときののではなかろうか。

第3節 今後の課題

本研究は以下の課題も内包している。

最も大きなものは、新たなデパートメントの設立にあたっては教員集団のアイデンティティ戦略と「クリティカル・マス」の形成が重要であるという点の適用範囲についてである。これは身体教育と芸術という異なる学問分野に帰属が可能なダンスに固有な事情であるのか、他の学問領域においても適用可能であるのかを検証しなければならない。ダンスの場合は芸術学カレッジ (College of Fine Arts) や教育学部 (School of Education) に帰属されていることが多いが、他の学問分野でより多様な親学部・親カレッジに帰属可能なものがあるとするれば、そのアイデンティティ戦略はより複雑な様相を呈している可能性がある。デパートメントの構成員が著しく少ない事例を選び、その設立期やテニユア保持者の推移を検証することでこの点は確認できるだろう。この検証はダンスのみならず、デパートメントの設立に関する高等教育研究にも理論的な貢献をなしうると期

待される。

また、単一事例研究であることによる限界もある。ウィスコンシン大学マディソン校のダンスの歴史の変容を検証することによって観察された「身体教育から芸術への長く緩やかな移行」は、他の高等教育機関におけるダンスの歴史においても等しく観察される事象なのかどうか検証する必要がある。ウィスコンシン大学マディソン校は身体教育の文脈において、すなわち運動の教育、運動を通じた教育を実践するダンス教員の養成を目的として専攻が設置された経緯を持つが、同様の目的を持ってスタートした他の高等教育機関におけるダンスが、ウィスコンシン大学マディソン校のダンスと同じように「身体教育から芸術への長く緩やかな移行」を経験しているのか、そうでないとすればどのような要因があるのかを明らかにするべく、他の事例の検証が不可欠である。

さらに歴史的アプローチによる限界も指摘しておかなければならない。本研究ではウィスコンシン大学のアーカイブに保管されている史資料を主な分析対象としたが、中には正確な日付や資料の作成者の特定が困難なものがあった。また、教授会の議事録では発言者の特定が困難なものが多かった。現実的に困難になりつつあることも事実であるが、これらの資料的制約を克服すべく、オーラル・ヒストリーや新たな資料の発掘が待たれる。

1 図 7-2 中で双方向矢印が相互作用を表すのに対し、一方向の矢印は時間の経過を示している。

2 H'Doubler, M. (1998[1940]). *op. cit.*, p.66. 下線引用者.

3 ウィスコンシン大学マディソン校ダンス・デパートメントホームページ. (URL: <https://www.dance.wisc.edu/dance/admissions/how-to-apply> 最終アクセス日 2018 年 9 月 6 日)

4 Risner, D. (2010). *op. cit.*, p.132.

本研究で使用した UW-Madison Archives の資料一覧

- Ayer, J. (1989). Memo to Professor M. A. Brennan, Dance Program Coordinator on February 15, 1989. The University of Wisconsin-Archives. Accession No.1997/052.
- Barr, H. A. (1942). History of the athletic conference of American college women 1917-1922. the University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.
- Brennan, M. A. (1986). A letter to Kay Petersen on February 20, 1986. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Brennan, M. (1994). A letter to School of Education Programs Committee on November 21, 1994. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.
- Brennan, M. A. (Date unknown). Department of Physical Education and Dance Buff Brennan–Equity Action Committee. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.
- Dance Faculty. (1980). Dance Faculty Meeting Wednesday, Nov. 12, 1980 8:00a.m. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Dance Division. (1975). Dance Division Faculty Committee Meeting October 2, 1975 3:30- Dance Complex. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.89/79.
- Dance Division. (1976). Physical Education and Dance Department January 27, 1976. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Dance Program. (1980). Handbook for dance majors. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Dance Program. (2006). Termination of the Interarts and Tehnology Major Option (IATECH). The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.
- Deans of UW-Madison. (1971). Draft memo from Deans to Department Chairmen. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.
- Department of Physical Education. (1926). Letters and science document 33, June 8, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-3.
- Department of Physical Education and Dance. (1988). Minutes of the Physical Education Faculty Meeting February 26, 1988 Room 1180 Gym Unit II 8:00-10:00 a.m. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2014/143.
- Fee, M. (1987). University of Wisconsin-Madison Archives oral history project Interview #612 Mary Fee, by Brennan, M. A. Date: August 22 of 1987.

- Genther, B. S. (1951). Dance Program. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5.
- Glassow, B. R. (1982). UW-Madison Archives oral history project: Interview #44 Ruth B. Glassow., by Snail, L. L. Date: February 1976.
- H'Doubler, M. (1951). Orchesis statement of principles. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.
- H'Doubler, M. (1953). Outline for study of movement and Dance. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.
- H'Doubler, M. (1972). University of Wisconsin-Madison archives oral history project : Interview # 609 H'Doubler, Margaret, by Brennan, M. A.
- Kloepper, L. O. (1976). UW-Madison Archives oral history project: Interview #180 Louise Kloppe, by Brennan, M. A. and Davidson, H. Date: November 30 of 1976.
- Kloepper, L. O. (1979). UW-Madison Archives oral history project: Interview #180 Louise Kloppe, by Pelt, M. V. Date: February 15 of 1979.
- McCarty, D. (1974). Memorandum to Professors Leonard A. Larson, Muriel R. Sloan September 23, 1974. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- Morgan, W. P. (1992). Memorandum to Sally Banes on June 25, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Nassif, A. (1980a). Vitae. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Nassif, A. (1980b). Dear Dance Faculty. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Nassif, A. (1980c). Dance Department status. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Nassif, A. (1988). Memorandum to Dean Palmer on April 26, 1988. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Nassif, A. (1991). Memorandum to UW Dance Faculty on April 10, 1991. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Palmer, J. (1976). Memo to: University of Wisconsin-Madison Deans, Directors, and Departmental Chairmen. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.86/60.

Petersen, K. (1986). Memo to Faculty and Staff on September 22, 1986. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

Regular Letters and Science faculty meeting. (1926). Minutes: Regular Letters and Science faculty meeting, Monday, October 18, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-2.

Sloan, M. R. (1974). A letter to Dean Donald J. MaCarty. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

Special Letters and Science faculty meeting. (1926). Minutes: Special Letters and Science faculty meeting, Monday, June 14, 1926. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-2.

Stelmach, G. E. (1990). Memorandum to Physical Education and Dance Faculty and Staff on June 7, 1990. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

The Department of Physical Education. (1975). Minutes of Faculty Meeting, May 13, 1975. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Department of Physical Education. (1976). Minutes of February 27 Faculty Meeting (Men). The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Department of Physical Education for Women. (1974a). Department Faculty Minutes May 13, 1974 1:00-3:00 Lounge 1. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

The Department of Physical Education for Women. (1974b). Department Faculty Minutes 9/19/74 Seminar Rm 3:30-5:00. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Department of Physical Education for Women. (1974c). Motions and substitute motions re integration approved by the Department of Physical Education-Women 10/31/74. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Department of Physical Education for Women. (1974d). Department Faculty Special Meeting Minutes October 31, 1974 7:00-9:00 a. m. Seminar Room. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Department of Physical Education for Women. (1975). Department Faculty Minutes 2/20/75 3:30-5:30 Seminar Rm. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The Undergraduate Professional Program Committee. (1976). Handbook for Dance majors. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

The University of Wisconsin Department of Physical Education Women's Division, (1926). L&S Document 34—1926-27. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.7/1/1-3.

The University of Wisconsin-Madison. (1927a). Bulletin of The University of Wisconsin Catalog 1926-1927. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1927b). Physical Education Alumnae Association Bulletin. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5/00-4.

The University of Wisconsin-Madison. (1937). Alumnae placement status, types, names. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.

The University of Wisconsin-Madison. (1947). Bulletin of the University of Wisconsin-Madison: General Announcement of Courses 1946-48. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1963). Bulletin of the University of Wisconsin Graduate School Announcement of Courses 1963-65. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1965). Bulletin of the University of Wisconsin School of Education Announcement of Courses 1965-67. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1969). Memorandum. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

The University of Wisconsin-Madison. (1970). Dance 1968-69. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

The University of Wisconsin-Madison. (1974). Minutes of April 26, 1974 meeting of the Departments of Physical Education-Women and Men. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The University of Wisconsin-Madison. (1975a). H'Doubler, Margaret - Course materials (1933, 1971-1975). The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1975b). Report on the status of women and

minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.

The University of Wisconsin-Madison. (1975c). Report on the status of women and minorities in the School of Education, 1975-76. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.89/14.

The University of Wisconsin-Madison. (1976a). Minutes of joint meeting of Faculties Physical Education and Dance January 23, 1976 3:30p.m., Room 840, WARF. The University of Wisconsin Madison Archives. Access No.2014-143.

The University of Wisconsin-Madison. (1976b). Joint Department Faculty Meeting April 22, 1976, 4:30-6:00, Unit II 1160. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.

The University of Wisconsin-Madison. (1977). Bulletin of the University of Wisconsin School of Education 1977. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1991). Bulletin School of Education Effective 1991-93. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (1997). Undergraduate Catalog 1997-1999. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.5/00/1.

The University of Wisconsin-Madison. (date unknown). Muscle Spindle-Matthews. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.

The University of Wisconsin news Service. (1950). Feature story 8/3/1950. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No. 13/5.

The University of Wisconsin News Service. (1951). U. W. News 11/7/1951. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.

The University of Wisconsin-Madison School of Education. (1993). Program Committee Minutes Friday, May 7, 1993 12:30-1:40 p. m. Room 154 Education Building. Accession No.2015/279.

The University of Wisconsin-Madison School of Education. (1994). Program Committee Minutes on Friday, December 16, 1994 12:30-1:50 p. m. Room 154 Education Building. Accession No.2015/279.

The University of Wisconsin-Madison School of Education. (2003). Program Committee Minutes on October 17, 2003 12:30-2:00pm 154 Education Building. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.

- Trilling, B. (1932). Dance news coverage at Wisconsin. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/001.
- Wolf, J. G. (1971). Minutes Departmental Reorganization Meeting Committee Tuesday, December 14, 1971 8:30AM. The University of Wisconsin-Madison Archives. Access No.2014-143.
- Yu, J. (2003). A letter to Charles Read on September 5, 2003. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.2015/279.
- Zana, T. L. (1991). Memorandum to Dean Henry Trueba on November 5, 1991. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Zana, T. L. (1992a). A letter to Dean Henry Trueba on March 13, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.13/5.
- Zana, T. L. (1992b). Memorandum to Dean Henry Trueba on April 15, 1992. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.
- Author unknown. (1971). Tentative proposals for UW Affirmative Action Plan. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.
- Author and date unknown. Classification of types of positions held by graduates of the Department of Physical Education for Women, University of Wisconsin, over an eleven year period. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No. 1997/001.
- Author and date unknown. Interim report on study of status of academic women. The University of Wisconsin-Madison Archives. Series No.1978/78 59B3-6.
- Author and date unknown. Preliminary undergraduate enrollment summary. The University of Wisconsin-Madison Archives. Accession No.1997/052.

引用・参考文献一覧

- Abbot, A. (2002). The disciplines and the future. in Brint, S. (ed.) *The future of the city of intellect: The changing American University*. California: Stanford University Press. pp.205-230.
- American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1966). Dance Directory: 5th edition. DC: American Association for Health, Physical Education, and Recreation.
- American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1978). Dance Directory: 10th edition. DC: American Association for Health, Physical Education,

and Recreation.

American Association for Health, Physical Education, and Recreation. (1986). *Dance Directory*: 13th edition. DC: American Association for Health, Physical Education, and Recreation.

Altmeyer, A. J. (1958). The Wisconsin Idea and social security. in *Wisconsin Magazine of History*. pp.19-25.

Bastedo, M. N., Altbach, P. G. & Gumport, P. J. (2016). *American higher education in the 21st century*. 4th edition. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Bauerlein, M. (2009). *National Endowment for the Arts: A History 1965-2008*. Washington: the National Endowment for the Arts.

Bellas, L. M. (1994). Comparative worth in academia: the effects on faculty salaries of the six composition and labor-market condition of academic disciplines. in *American Sociological Review*. vol.59. pp.807-821.

Blau, M. P. (1973). *The organization of academic work*. New York: A Wiley-interscience publication.

Bond, K. E. (2010). Graduate dance education in the United States. *Journal of dance education*. vol.10(4). pp.122-135.

Brennan, M. A. (2007). H'Doubler on H'Doubler. in Wilson, M. J., Hagood, T. K., & Brennan, M. A. *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York: Cambria Press. pp.15-35.

Callahan, J. (1928). *Laws of Wisconsin relating to common schools*. Wisconsin: Department of Public Instruction.

Callahan, J. (1931). *A manual of physical education for the public schools of Wisconsin*. Wisconsin: Department of Puublic Instruction.

Chapman, S. A. (1974). *Movement education in the United States: Historical developments and theoretical bases*. Philadelphia: Movement Education Publications.

Clark, D. (1994). Voices of women dance educators: Considering issues of hegemony and the educator / performer identity. in *Impulse*. 1994(2). pp.122-130.

Clemente, K. (1997). Dance education degree programs in colleges and universities. in *Dance in higher education: focus on dance XII*. Virginia: American Alliance for Health, Pphysical Education, Recireation and Dance. pp. 41-46.

Cowan, K. (1990). The current states of dance education in Wisconsin and

- developmental influences. A doctoral dissertation submitted to the University of Wisconsin-Madison Department of Physical Education and Dance.
- Cowley, W. H. & Williams, D. (1991). *International and Historical Roots of American Higher Education*. New York: Garland Publishing, Inc.
- Cox, P. N. (1997). *The development of modern dance in higher education with an emphasis on the contributions and influences of Margaret H'Doubler*. a thesis submitted to San Jose State University.
- Cummings Jr., M. C. (1991). Government and the Arts: An Overview. in Benedict, S. (ed.) *Public Money and the Muse: Essays on Government Funding for the Arts*. New York: The American Assembly. pp.31-79.
- Dewey, J. (2005[1934]). *Art as Experience*. New York: Penguin group.
- Dressel, P. L. & Reichard, D. J. (1970). The University department: Retrospect and prospect. in *the Journal of Higher Education*. vol.41(5). pp.387-402.
- Durrant, S. M. (1992). Title IX- Its power and its limitations. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*. pp.60-64.
- Gerard, P. (1986). Dancing in the dark. *Isthmus* 6/27/1986.
- Gray, J. A. (1978). *To want to dance: A biography of Margaret H'Doubler*. Doctral dissertation submitted to the University of Arizona.
- Gumport, P. J. (1988). Curricula as Signposts of Cultural Change. in *Review of Higher Education*. vol.12(1). pp.49-61.
- Gumport, J. P. (2002). *Academic pathfinders: Knowledge creation and feminist scholarship*. CT: Greenwood Press.
- Gumport, P. J. & Snyderman, S. K. (2002). The Formal Organization of Knowledge: An Analysis of Academic Structure. in *the Journal of Higher Education*. vol.73(3). pp.375-408.
- Habel, L. S. (2010). *History of the modern dance program at the University of Utah 1968-1989*. A published theses submittited to the faculty of the University of Utah.
- Hagood, T. K. (2000). *History of dance in American higher education: Dance and the American University*. New York: Edwin Mellen Pr.
- Hagood, T. K. & Llyod, M. L. (2006). The middle years, 1932-1942: Inteivews with Elizabeth R. Hayes. in Wilson, M. J., Hagood, T. K., & Brennan, M. A., *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York: Cambria Press. pp.65-94.

- Haggood, T. K. & Brennan, M. A. (2006). The early years, 1928-1932: Interview with Hermine Sautoff Davidson. in Wilson, M. J., Haggood, T. K., & Brennan, M. A. *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York: Cambria Press. pp.37-63.
- Haggood, T. K. & Kahlich, L. C. (2013). *Perspectives on Contemporary Dance History: Revising Impulse, 1950-1970*. New York: Cambria press.
- Hashem, M. (2007). Becoming an independent field: Societal pressures, state, and professions. in *Higher Education*. vol.54. pp.181-205.
- Hawkins, A. (1954). *Modern dance in higher education*. New York: Bureau of Publications.
- H'Doubler, M. (1925). *The dance and its place in education, with suggestions and bibliography for the teacher of the dance*. New York: Harcourt, Brace and Company.
- H'Doubler, M. (1998[1940]). *Dance : A creative art experience*. Madison, WI : The University of Wisconsin Press.
- H'Doubler, M. (2012[1921]). *A Manual of Dancing: Suggestions and Bibliography for the Teacher of Dancing*. Tennessee: General Books LLC.
- Hefferlin, J. B. L. (1969). Dynamics of academic reform. San Francisco: Jossey-Bass.
- J. B. L. ヘファリン著. 喜多村和之・石田純・友田泰正訳. (1987). 大学教育改革のダイナミックス. 玉川大学出版部.
- Hove, A. (1991). *The University of Wisconsin: A pictorial history*. Wisconsin:the University of Wisconsin Press.
- Ingram, A. (1986). Philosophical discussion of where dance belongs in higher education (U. S. A.) in *Dance the Study of dance and the place of dance in society: Proceeding of the VIII Commonwealth and International Conference on Sport, Physical Education, Dance, Recreation and Health Conference*. London, New York: E. & F. M. SPON. pp.194-203.
- Kerr-Berry, J. A. (2007). Dance educator as dancer and artist. *Journal of dance education*. vol.7(1). pp.5-6.
- Kirk, D. (1998). *Schooling bodies: school practice and public discourse, 1880-1950*. London: Leicester University Press.
- Kolcio, K. (2010). *Movable pillars: Organizing dance 1956-1978*. CT: Weleyn University Press.
- Kraus, R. (1991). *History of the dance in art and education*. New Jersey: Prentice-

- Hall, Inc.
- Lee, M. (1983). *A history of physical education and sports in the U.S.A.* Canada: John Wiley & Sons.
- Manns, C. L. & March, J. G. (1978). Financial adversity internal competition, and curriculum change in a University. in *Administrative Social Quarterly*. vol.23(4). pp.541-552.
- Mark, J. E. III. (1957). *America learns to dance: A historical study of dance education in America before 1900.* New York: Dance Horizons.
- McPherson, E. (2013). *The Bennington School of the Dance: A History in Writings and Interviews.* North Carolina: Mcfarland & Co Inc Pub.
- Montgomery, S. S. & Robinson, D. M. (2003). What becomes of undergraduate dance majors? in *Journal of cultural economics*. vol.27(1). pp.57-71.
- Mulcahy, K. V. (1999). Cultural diplomacy in the post-cold war world. in *the Journal of Arts Management*. vol.29(1). pp.7-28.
- Park, R. J. (2007). Sport, gender and society in a transatlantic Victorian perspective. in *The International Journal of the History of Sport*. vol.24(12). pp.1570-1603.
- Powers, K. & Schloss, P. J. (2017). *Organization and administration in higher education*. 2nd ed. New York: Routledge.
- Prevots, N. (1998). *Dance for export: cultural diplomacy and the cold war.* Connecticut: Wesleyan University Press.
- Remley, M. L. (1975). The Wisconsin Idea of Dance: A decade of progress, 1917-1926. in *Wisconsin Magazine of History*. vol.58(3). pp. 179-195.
- Risner, D. (2010). Dance education matters: Rebuilding postsecondary dance education for twenty-first century relevance and resonance. *Arts education policy review*. vol.111. pp.123-135.
- Rose, R. J. (1950). *The Wisconsin dance idea.* A thesis submitted to the University of Wisconsin-Madison Department of Physical Education for Women.
- Ross, J. (2000). *Moving Lessons: Margaret H'Doubler and the Beginning of Dance in American Education.* Wisconsin: University of Wisconsin Press.
- Ross, R. D. (1976). The institutionalization of academic innovations: Two models. in *Sociology of Education*. vol.49(2). pp. 146-155.
- Rudolf, F. (1990[1962]). *The American college and University: A history.* Georgia:

- The University of Georgia Press. F. ルドルフ著. 阿部美哉・阿部温子訳. (2003). アメリカ大学史. 玉川大学出版会.
- Saunders, K. (1980). Women's athletics at Madison and Title IX. in Swoboda, M. J. & Roberts. A. J. *Women emerge in the seventies*. The University of Wisconsin Collection. pp.81-92.
- Smith, W. N. (ed.) (1967). *Focus on dance: Dance as a discipline*. Washington: American Association for Health, Physical Education, and Recreation.
- The University of Wisconsin-Madison. (1985). *Wisconsin Women's Intergollegiate Sports 1984-85 10th Anniversary*. The University of Wisconsin Collection.
- Tyack, D. & Hansot, E. (1990). *Learning together: A history of coeducation in American schools*. New York: Russell Sage Foundation.
- Verbrugge, M. H. (2012). *Active bodies: a history of women's physical education in twentieth-century America*. New York: Oxford University Press.
- Veysey, L. R. (1965). *The emergence of the American University*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Wagner, A. (1997). *Adversaries of Dance: From the Puritans to the Present*. Chicago: University of Illinois Press.
- Waterfall, T. M. (1968). A history of dance at the University of Utah (1906 to 1968). A thesis submitted to the faculty of the University of Utah.
- Wilson, J. M. (2006). Margaret H'Doubler's mottos in context. in Wilson, J. M., Haggod, T. K., & Brennan, M. A. (ed.) *Margaret H'Doubler: the legacy of America's dance education pioneer*. New York: Cambria Press. pp. 305-351.
- Wood, T. D. (1927). *The new physical education: A program of naturalized activities for education toward citizenship*. New York: The Macmillan company.
- Yin, R. K. (2014). *Case study research: Design and methods-Fifth edition*. California: Sage.
- Zazzali, P. (2016), *Acting in the academy: the history of professional actor training in US higher Education*. New York: Routledge.
- アレクサンダー・ジョージ＝アンドリュー・ベネット著. 泉川泰博訳. (2013). 社会科学のケース・スタディ 理論形成のための定性的手法. 勁草書房.
- 阿曾沼明裕. (2014). アメリカ研究大学の大学院. 名古屋大学出版会.
- J. ベン＝デービッド著 潮木守一、天野郁夫訳. (1974). 科学の社会学. 至誠堂.
- 舞踊文化と教育研究会編. (2008). 松本千代栄撰集 5 舞踊教育の開拓. 明治図書.

- 江原武一. (1994). 大学のアメリカ・モデル—アメリカの経験と日本. 玉川大学出版会.
- 福留東土. (2007). 米国におけるアクレディテーションと連邦政府の関係—アカウント
ビリティの観点を中心に—. 広島大学高等教育研究開発センター編. 大学改革にお
ける評価制度の研究. COE 研究シリーズ 28. pp.75-90.
- 五島敦子. (2008). アメリカの大学開放: ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開. 学術
出版会.
- ジェームズ・C・ハーン. (2015). アカデミック・デパートメントに関する社会学的研究.
パトリシア・J・ガンポート編. 伊藤彰浩、橋本紘市、阿曾沼明裕訳. 高等教育の社会
学. 玉川大学出版部. pp.287-341.
- 廣兼志保. (2015). Margaret H'Doubler(1889-1982)が提示した”Exercises for
Fundamental Motor Control”(1921)についての考察. スポーツ教育学研究. vol.35(2).
pp.29-41.
- イマヌエル・カント著. 熊野純彦訳. (2015). 判断力批判. 作品社.
- 片岡康子. (1984). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—ナチュラル・ダンス
からのアプローチ. お茶の水女子大学人文科学紀要. vol.37. pp141-158.
- 片岡康子. (1986). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—クリエイティブ・ダ
ンスの教材体系を中心にして. お茶の水女子大学人文科学紀要. vol.39. pp.171-201.
- 片岡康子. (1991). アメリカにおける創造的舞踊教育の成立過程—1930年代にダン
ス・セクションとベニントン・スクールが果たした役割を中心として. お茶の水女子
大学人文科学紀要. vol.44. pp.235-252.
- 片山泰輔. (2006). アメリカの芸術文化政策. 日本経済評論社.
- 喜多村和之. (1993). 大学評価とは何か—自己点検・評価と基準認定—. 東信堂.
- 木場裕紀. (2014). 学校ダンスとジェンダー観に関する言説の歴史の変容—体育専門雑
誌の言説分析から—. 舞踊學. vol.36. pp.31-40.
- 松浦良充. (1995). アメリカ大学史におけるデパートメント組織の成立—研究序説—. 明
治学院論叢総合科学研究/明治学院大学一般教育部会編. vol.559. pp.107-137.
- 森田信博. (1995). 「体育」概念の形成過程について. 秋田大学教育学部研究紀要 教育
科学部門. vol.48. pp.61-71.
- J. W. スコット著 荻野美穂訳. (2004). ジェンダーと歴史学 (増補新版). 平凡社.
- 潮木守一. (1993). アメリカの大学. 講談社.
- 吉田文. (2005). アメリカの学士課程カリキュラムの構造と機能—日本との比較分析の
視点から—. 高等教育研究. vol.8. pp.69-92.

参照 web ページ一覧

- Bonbright, J. M. (2007). National agenda for dance arts education: The evolution of

dance as an art form intersects with the evolution of federal interest in, and support of, arts education. National Dance Education Organization website. URL: [https://s3.amazonaws.com/ClubExpressClubFiles/893257/documents/Evolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf?AWSAccessKeyId=AKIAIB6I23VLJX7E4J7Q&Expires=1444044614&response-content-](https://s3.amazonaws.com/ClubExpressClubFiles/893257/documents/Evolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf?AWSAccessKeyId=AKIAIB6I23VLJX7E4J7Q&Expires=1444044614&response-content-disposition=inline%3B%20filename%3DEvolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf&Signature=IBUPmlG7%2B4bbSKD9zII5%2BHKrQWQ%3D)

[disposition=inline%3B%20filename%3DEvolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf&Signature=IBUPmlG7%2B4bbSKD9zII5%2BHKrQWQ%3D](https://s3.amazonaws.com/ClubExpressClubFiles/893257/documents/Evolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf?AWSAccessKeyId=AKIAIB6I23VLJX7E4J7Q&Expires=1444044614&response-content-disposition=inline%3B%20filename%3DEvolution_of_Dance_in_the_Arts.pdf&Signature=IBUPmlG7%2B4bbSKD9zII5%2BHKrQWQ%3D). 最終アクセス日: 2017年8月20日

ED. gov, Title IX and Sex Discrimination, U.S. Department of Education URL: https://www2.ed.gov/about/offices/list/ocr/docs/tix_dis.html 最終アクセス日 2016年11月26日

Five College Consortium URL: <https://www.fivecolleges.edu/dance> 最終アクセス日 2018年3月5日

Hawkins, A. (1968). A look to future. in *Impulse, annual of contemporary dance 1968*. Temple University Digital Collections. URL: <http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2477/rec/18> 最終アクセス日 2018年3月26日

Hawkins, A. et al. (1968). The undergraduate dance major curriculum. in *Impulse: annual of contemporary dance 1968*. Temple University Digital Collections. URL: <http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2477/rec/18> 最終アクセス日 2016年11月26日

Lippincott, G. (1965). Report of the Arts in Government, Education, Community 1965. in *Impulse: annual of contemporary dance 1965*. Temple University Digital Collections. p.8. URL: <http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2220/rec/15> 最終アクセス日 2016年11月26日

Temple University Libraries Digital Collections. *Impulse: annual of contemporary dance 1968*. URL: <http://digital.library.temple.edu/cdm/compoundobject/collection/p15037coll4/id/2477/show/2432> 最終アクセス日 2016年11月26日

The National Association of Schools of Dance. URL: <http://nasd.arts-accredit.org>. 最終アクセス日 2018年9月11日.

The University of Wisconsin-Madison. Registrar's Enrollment Reports. URL:

<https://registrar.wisc.edu/enrollment-reports/>最終アクセス日 2018年8月19日

The University of Wisconsin-Madison Academic Planning and Institutional Research. (2018). Data Digest 2017-2018. URL: <https://uwmadison.app.box.com/s/epbh1zhdsudpjvyki38jl7wo8a9gl5w8> 最終アクセス日 2019年3月1日,

The University of Wisconsin-Madison Dance Department. How to apply to the Dance Department. URL: <https://www.dance.wisc.edu/dance/admissions/how-to-apply/> 最終アクセス日 2018年9月10日.

The University of Wisconsin-Madison Office of the Provost. Academic Planning and Institutional Research. URL: <https://apir.wisc.edu/academic-planning/program-review/> 最終アクセス日 2017年8月17日

The University of Wisconsin-Madison Office of secretary of the faculty. The tenure process at UW-Madison. URL: <https://secfac.wisc.edu/events-programs/tenure-workshops/tenure-gloss-mbd/>最終アクセス日 2019年3月1日.